
IS インフィニット・ストラトス 新劇場版～シンジ編～

ぐぎゆる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 新劇場版〜シンジ編〜

【Nコード】

N4699R

【作者名】

ぐぎゅる

【あらすじ】

最強の拒絶タイプの第10の使徒と戦闘を繰り返す碇シンジ。第10の使徒に綾波を取り込まれるも擬似シン化第1覚醒形態になり第10の使徒を倒し綾波を取り返す……。しかしそれはサードインパクトの引き金となる……。そして……。次に目を覚ました場所は……。ISが飛び交う世界だった！！果たしてシンジは元の世界に戻るのか！

この話は原作を追いながらもオリジナルや使徒戦を織り交せて進め

ていく予定です

この小説はArcadia様にも投稿させていただいています

序章 Ⅱ サードインパクトⅡ (前書き)

ご意見・ご感想お待ちしております

ではおしまひ

序章 Ⅱ サードインパクト Ⅱ

「あれは翼……15年前と同じ……」

「ええ……セカンドインパクトの続き……サードインパクト」

「世界の終わりよ」

序章 サードインパクト

「そろそろ……いいかな？」

渚カヲルは槍を擬似シン化第1覚醒形態になった初号機に投げる……
が

スカッ

「あ………はずしちゃったね テヘッ」

そして・・・サードインパクトが起きた

「ん・・・・・・・・ここは・・・・・・・・?」

「あら・・・・・・・・おはよう、シンジ君」

「え!?!リツコさん!?!」

僕・・・・・・・・初号機に乗って・・・・・・・・綾波助けて・・・・・・・・ええ!?!?

「どうやらあなたの世界ではサードインパクトが起きたようね・・・
あなたとレイによって」

「あの・・・・・・・・どういう・・・・・・・・」

「説明してる暇はないわ・・・・・・・・とりあえずこれを渡しておくわ」

そついうとリツコさんは設計図を渡してきた

「これ・・・・・・・・何の設計図なんですか?」

「目覚めたらわかるわ」

「はぁ・・・・・・・・」

不思議そつに首をかしげると急に眠気が襲ってきた

「もう行くのね・・・・・・・・生まれ変わったあなたがあの世界を救えたら・・・
・・・再びやり直せるかも知れないわね・・・・・・・・じゃ・・・・・・・・行つてら
つしゃい」

その言葉を聴きながら僕は意識を閉ざした

「 I S 学園中庭 」

千冬 Side

「 今日もいい天気だ 」

私は日の光を浴びに中庭に出ていた

「 入学式まであと1ヶ月・・・またあの馬鹿騒ぎなクラスでなければいいのだが 」

私が逡巡していると・・・目の前が光り始めた

「 なんだ！？クツ・・・ 」

私は目を閉じ、暫くして光が収まり目を開けてみると

「何！？ 」

少年が横たわっていた

続く

序章 Ⅱ サードインパクトⅡ (後書き)

次回予告

IS学園に飛ばされたシンジ

訳もわからず学校に入学を勧められ戸惑う

シンジの出す答えは？

次回 IS学園

この次もサービスサービスう (ナニヲ)

人物・IS設定(前書き)

人物やISの設定集です

間違っていたら一言お願いします

人物・IS設定

主人公

名前 碓シンジ

年齢 この当時15歳

特徴 擬似シン化第1覚醒形態になったことにより使徒と同じ能力を持つに至った（オリ設定）目が綾波レイと同じく真紅になりATフィールドが使える。だが初号機や第4の使徒のように目からビームは出来ない（ただし、IS展開時に擬似シン化第1覚醒形態になった場合は使用可能/3/22改定）。シンジはこれを『使徒化』と名づけた（オリ設定）

ヒロイン（エヴァ）

名前 式波・アスカ・ラングレー

年齢 この当時14歳

特徴 異常とも言える程プライドが高く、勝気で負けず嫌い、且つ自意識過剰な性格。社交性は他のパイロットと比較して高い。EVAシンクロー用のインターフェイスヘッドセットを髪留めとして常に着用するほど、EVAパイロットの適格者、チルドレンであることに拘りを持つ。この話ではアスカの搭乗するエヴァ3号機が第9使徒に侵食されたときにシンジが飛ばされた世界に同じように飛ばされる。このアスカとシンジが同じ時間軸から飛ばされたかは不

明。普段はシンジをバカにしたような物言いであるが、その心内はシンジが好きな気持ちでいっぱいなのである

名前 綾波レイ

年齢 この当時15歳

特徴 色白で青色の髪と赤い瞳を持つ細身の少女。生年月日などに至るまで記録は全て抹消された、ほとんど感情を表に見せず、寡黙で無表情。他者への興味が希薄だったが、シンジとの交流により、複数の他者へ関する感情が豊かになった。シンジに恋愛感情を抱いており、それを隠そうとはしないため、それに引きずられてアスカもついついシンジに対してレイと同じことを要求することもままある。実はこのレイはシンジと同じ時間軸にいて、カヲルが槍を外してしまったために、サイドインパクトが勃発。その際に別世界に飛ばされるも、時間がずれてしまい、アスカと一緒に飛ばされる結果となった。シンジはこのレイが助けたレイとは気付いていない

IS

シンジ専用IS 『エヴァ初号機』

形式番号 『NERV-EVA-01Type-Infinite Stratos』

全長 約3・2m

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力 『S2機関』：シールドエネルギーを二倍、武器や使用するエネルギーは無限になる。これにより『F型装備』を際

限なく使用可能になる

別世界の赤木リツコよりもたらされた設計図を元に織斑千冬が篠ノ之束に依頼し製作されたシンジ専用ISである。パッケージがあるため第3世代型扱いになっっているが、能力は第4世代型に引けを取らない物に仕上がっている。待機形態は小さな赤いロンギヌスの槍がついたネックレス。シンジと同じようにATフィールドを使えるが攻撃を完全防禦する代わりにフィールドにダメージが蓄積し、一定量を超えると破壊されその戦闘中は使えなくなる（オリ設定）
フルセット
基本装備が多いため後付装備が出来ない。（基本装備のうちポジットロン・スナイパー・ライフルはリツコから完成品が送品済み）初号機のコアがISのコアの代わりに果たしている。S2機関は後々登場予定。新劇場版の初号機仕様だがF型装備を装着可能にしている（オリ設定）推進力の要のスラスタは無く、光の羽根（解る方が少ないかもですが・・・パチエヴァの大当たり昇格の時に出現する初号機の羽根）を展開させて飛行する。出力は白式・第1形態より若干低めだが高出力。F型装備はATフィールドを利用した高出力スラスタ内臓なので羽根無しでも飛行可能。出力は白式・第2形態を上回るほど。（オリ設定）暴走の予定はありません。てかさます（。ロ。）ライ

暴走するとエヴァンゲリオン 試験初号機の姿の全身装甲フル・スキャンのISになり圧倒的戦闘力で敵を屠る。さらに、擬似シン化第1覚醒形態にもなれる。暴走および擬似シン化第1覚醒形態は意図的になることは出来ない。

武器

格闘武器

プログレッシブ・ダガー（以下・プログ・ダガー）：本来はF型装備のものを採用。プログレッシブ・ナイフを大型化し殺傷力を高めた武器

マゴロク・エクスターミネート・ソード：大型の日本刀状の刀。刃渡りは機体の3/2を占める

射撃武器

ハンドガン：IS専用の拳銃。特に特徴はなく普通の拳銃

パレット・ライフル：EVA専用のアサルトライフルをIS専用に改良したもの。正式名称は「エヴァ初号機専用大口径30mm小銃 AU Assault Rifle Type MM-9」⁹

ポジトロン・ライフル：陽電子（ポジトロン）が物質中の電子に衝突・消滅する力を利用した武器

ポジトロン・スナイパー・ライフル：新劇場版に出る大出力型第2次試作自走460mm陽電子砲を改良しIS単体で使えるようにしたもの。エネルギー消費が著しく、IS戦闘には向かず、無人巨大兵器の中枢の狙撃・殲滅などに使われる。

機能特化専用パッケージ『F型装備』：初号機の「火力の向上」「重装甲化」、それに伴う重量増を補うための「A・T・フィールドを利用した機動力の上昇」を目指したパッケージ。この状態でもプログ・ダガーやマゴロク・エクスターミネート・ソードは使用可能。本来、拡張領域パストロットが必要であるパッケージだがリッコの設計

により拡張領域が無くともパッケージを装着できる。なお、新装備として遠隔操作兵器・『ビット』を搭載している（追加オリ設定）
。現在はS2機関が搭載されてないため、長時間の使用は出来ない。
（およそ2〜30分）

F型装備専用兵装

インパクト・ボルト：ATフィールドにより発生させ、エネルギーチャンネル内で増幅した高出力の指向性電撃を放出する、初号機最強の武器

全領域兵器マステマ：プログ・ナイフと同様に超振動により物体を分子レベルで切り裂くブレードがついたフレームに、ガトリング砲、2発のN2ミサイルを装着した兵器。「全領域兵器」の名のとおり、近接、射撃、広域破壊に対応できる万能武器である

遠隔操作兵器・ビット：背中のスラスター周りに装備されている。ブルー・ティアーズのものと基本的な構造は同じで、数は12機ある。F型装備に高度なOSを積む事により、ビットを自由に操りながら、なおかつ自身で攻撃できる。因みにOSの基礎を構築したのは赤木博士でOSの製作・ビットの製作は篠ノ之束博士（追加オリ設定）。

暴走時

素手とプログ・ダガーを使った格闘

擬似シン化第1覚醒形態

ATフィールド：新劇場版では切り飛ばされた左腕の再生にも使用したが、今回はそれはなく、攻撃のみ可能

光線：強力な目からビーム。第10使徒のフィールドを吹き飛ばすほどの威力

アスカ専用IS『エヴァ二号機』

形式番号 『NERV-EVA-02 Type-Infinite Stratos』

全長 3.2m

別世界の赤木リツコよりもたらされた設計図を元に篠ノ之束が製作されたアスカ専用ISである。第4世代型。シンジのISと似ているために興味が湧き、零号機とともに製作した。初号機と同じようにATフィールドが使用可能が、初号機のATフィールドと同じでダメージが一定量を超えると、破壊され、その戦闘では使用不可能になる。待機形態は赤と白のイヤリング。

武器

格闘武器

プログレッシブ・ナイフ：EVA二号機に標準装備されている近接戦闘専用武装。プログ・ナイフと略称される事が多い。コードネームは「PK-01」。高振動粒子で形成された刃により、接触する物質を分子レベルで分離する事で切断する

ソニック・グレイブ：プログ・ナイフと同様に超振動によって相手を分子レベルで切り裂く薙刀

射撃武器

ハンドガン：IS専用の拳銃。特に特徴はなく普通の拳銃

パレット・ライフル：初号機用しかなかったパレットガンを
二号機にも用意したもの

ポジトロン・ライフル：初号機が装備しているものと同じラ
イフル

ハンド・バズーカ：小型で取り回しのよいバズーカ砲

超電磁洋弓銃：いわゆるクロスボウだが、実在のクロスボウ
とは比較にならない連射速度をもつ

レイ専用IS『エヴァ零号機』

形式番号 『NERV - EVA - 00 Type - Infinite
Stratos』

全長 3・2 m

別世界の赤木リツコよりもたらされた設計図を元に篠ノ之束が製作
されたレイ専用ISである。第4世代型。シンジのISと似ている
ために興味が湧き、二号機とともに製作した。初号機や二号機と同
じようにATフィールドを使えるが、特性は先の二体と同じ。待機
形態は黄色と白のプレスレット。

武器

格闘武器

プログレッシブ・ナイフ：EVA零号機に標準装備されている近接戦闘専用武装。プログ・ナイフと略称される事が多い。コードネームは「PK-01」。高振動粒子で形成された刃により、接触する物質を分子レベルで分離する事で切断する

スマッシュホーク：プログ・ナイフと同様に超振動によって相手を分子レベルで切り裂く斧

射撃武器

ハンドガン：IS専用の拳銃。特に特徴はなく普通の拳銃

パレット・ライフル：初号機用しかなかったパレットガンを零号機にも用意したもの

ポジトロン・ライフル：初号機が装備しているものと同じライフル

使徒

大体設定は原作と同じで大きさが少し違う程度です

第4使徒

新劇場版：序で第3新東京市の襲来した第4使徒と同じタイプ。顔が二つあるのが特徴

大きさはエヴァ初号機（IS）より少し大きい
武器は腕のパイルバンカーと目からビーム。

ATフィールドも張れるが、セシリアの『スターライトMK
?』で貫通可能なくらい脆い

第5使徒

同じく新劇場版：序で第3新東京市に襲来した第5使徒と同じタイプ。二本の触手が特徴

大きさは初号機より一回り大きい

武器は触手

第6使徒

同じく新劇場版：序で第3新東京市に襲来した第6使徒と同じタイプ。正八面体の姿が特徴

大きさは初号機の3倍の大きさ

武器は加粒子ビーム。正八面体の基本形態から、攻撃や防御時に様々な幾何的形態に目まぐるしく変化することで連射や掃射などの攻撃のバリエーションがある

ATフィールドはポジトロン・スナイパー・ライフルの出力でないと貫通できないほど強力

第3使徒

新劇場版：破でベタニアベースでエヴァンゲリオン仮設5号機に殲滅させられた第3使徒と同じタイプ。大きさは背は高くないが全長は10mほど。骸骨状の竜（あるいは蛇）のような首と尾が生えており、頭部にコアがある。胴体は丸く縛られ、頭部にはゼーレの刻印が押されている。首の部分に、エントリープラグソケットが埋め込まれている。歩行に用いる4本の短い脚のほか、太い4本の脚（特に使われない）を持つ。武器は眼部からの光線（目からビーム）

第7使徒

新劇場版：破で第3新東京市に襲来した第7使徒と同じタイプ。大きさはISのエヴァ初号機を縦に6つ並べたぐらいの大きさ

頂上部に時計を模したような顔があり、そこからシンメトリックなオブジェのような身体と2本の非常に細長い脚をもつ。登場時、上部にあるコアらしきものは^{デコイ}罠であり、真のコアは下部の球体内部にある。足先で海水を凍らせてその上を歩行する。罠が破壊されると崩壊しかけるが、すぐに元に戻り下部の真のコアがある球体が振り子のように上に上がってくる。武器は無数の触手らしきもの

第8使徒

新劇場版：破で第3新東京市に襲来した第8使徒と同じタイプ。ATフィールドが光すら歪めるほど強力であり、「目のような模様が蠢く黒い球体」にしか見えない。途中でATフィールドによる落下軌道変更も行う。落下直前には球体状の身体を展開、TV版の第11使徒リリエルのような姿（ただし虹色と黒の縞模様）へと変形。その後、赤い炎を噴出しながらTV版第10使徒のような形へ変形する。（色はそのまま）その大きさは全長1キロ。上面には無数の人型があり、手を繋いで波打つように踊るほか、ラッパを吹く天使状のものもみられる。武器は使徒本体（受け止めると中からヒト型（上半身状）のものが現れ、両掌を突き刺して攻撃する）

第9使徒

新劇場版：破で第3新東京市に襲来した第9使徒と同じタイプ。大きさはISのエヴァ初号機と同じ大きさで姿形もエヴァ3号機に寄生していた姿と同じ。基本的な性質はTV版第13使徒バルディエルと変わらないが、寄生された部位が青黒く光るようになる。また、3号機の肩から新たに1対の腕を生やし、その腕によって初号機の首を絞め、その組織を浸食。今回はダミープラグや中にアスカがいると言っているのではない。第9使徒に寄生されたエントリープラグは残っている。武器は伸縮する腕が二対と触れた部分からの侵食

第10使徒

新劇場版：破で第3新東京市に襲来した第10使徒と同じタイプ。大きさはISのエヴァ初号機より少し大きい。顔はTV版の第14使徒（ゼルエル）に似通っているが、胴体は小さく、包帯のような布状の腕を複数持っている。「最強の拒絶タイプ」と呼称された通り、放つ光線もATフィールドもそれまでの使徒とは桁違いの力をもつ。布状の腕は瞬間的に伸縮可能で、攻撃にも用いる。コアを肋骨で防御することで、ATフィールドを全て突破されたうえでのN2誘導弾の直撃にも無傷で耐える。零号機を捕食し融合、レベルEEEへの使徒侵入に備えたネルフ本部の自爆システムを封殺する。しかし初号機によってコアから零号機のコアを引きずり出されて形象崩壊した。今回は暴走した初号機に捕食される。そして初号機はS2機関をゲットする。

人物・IS設定（後書き）

多すぎでしょうか？？

とりあえず、当面はこれで行きます

3 / 8 ご感想の中に全長についての意見がありましたので・
・早速変更を・・・調べて見れば読者の通りでした・・・わざわざ
ありがとうございます そしてIS装着時に『胎児のように』と
ご意見を頂きました。ありがとうございます！・・・ただ私の想像
力があまりにも陳腐なせいか・・・うまくイメージできませんでし
た・・・よってほかの操縦者のように服を纏う感じで行きたいと思
います・・・せっかくのご意見を無駄にするようで申し訳ないです
(; ; ;)

3 / 10 使徒の設定を追加しました

3 / 29 アスカとレイの設定、アスカとレイのISの設定を追加

4 / 10 F型装備に新装備を追加

第一章 Ⅱ I S 学園 Ⅱ

ここは I S 学園の保健室・・・ベッドには碇シンジが寝ていた

「・・・・・・・・んっ・・・・・・・・」

僕はゆっくりと目を開ける・・・

「知らない天井だ・・・・・・・・」

第一章 I S 学園

前にもいったような気がする・・・

「・・・・・・・・ここは・・・保健室？」

辺りを見渡せば普通に保健室のようだ

「どこかの学園なのかな？」

「その通りだ」

不意の声に驚いて振り向くと背の高い女性が立っていた

「ここは I S 学園の保健室だ」

「I・・・S・・・学園・・・・・・・・？」

首をかしげる僕に問いかけて来た

「君はどこから来た？」

「えっと・・・第3新東京市ですけど」

戦っていた場所もそこだったのでそう答えることにした

「聞いたことはないな・・・」

「そうですか・・・」

「一番可能性があるのは・・・違う世界から来た・・・次に君が嘘をついてるか・・・だが」

「そんな！嘘なんてついてませんよ！」

「・・・信じよう。ではこれはなんだ？」

そう言っ僕が持っていた設計図を見せる

「これは・・・僕がもらった・・・」

「ほう・・・調べたところ・・・これはISの設計図とわかった・・・」

「そんなんですか!？」

「ああ・・・知り合いからも見知らぬコアが届いたといっていた・・・」

リッコさん・・・コアまで送ってたんだ・・・

「どうする？君が取る選択肢は3つ。一つはこのまま日本政府に尋問を受けるか。どこから来たかわからない少年がISの設計図を持っていたとなれば・・・政府の人間が欲しがるだろうからな。もう一つはこの設計図を置いてここから出て行くか。それいう生き方も

ある。学校も手配しよう。最後の一つがここIS学園に入学するか。ISに乗ることになるが・・・3年間ここで過ごせるし・・・設計図の機体も差し上げよう。・・・その後の人生も悪くはないものになる。さあ・・・どうする？」

「・・・一つ目は・・・論外だ・・・そんな尋問は受けたくない。二つ目は・・・それでもいいけど・・・リツコさんの思いを無駄にはしたくない・・・となると・・・」

「・・・ここに入学します」

「いいのか？」

「はい」

「まあ・・・すでに手続きは済ませてある。ISに乗れるかもしれない男子をこのままほおって置く私ではないからな」

「・・・どっちにしる入学は決まってたんだ」

「・・・僕をほおって置かないってどういう・・・」

「ISは基本女性しか乗れない物だ」

「あ、なるほど・・・」

「理解したか？さて、早速寮に移ってもらおう。必要なものは此方で揃える。付いて来い」

そして寮の入り口に着いた

「校舎からここまでは近いから迷うこともないだろう・・・君の部屋は”1026号室”だ。間違えるなよ。一時間すれば呼びに来る。それまでに制服に着替えておけ」

「はい・・・えっと・・・」

「ああ、自己紹介が遅れたな私は織斑千冬だ。おりむらちふゆ学校では織斑先生と

呼ぶように」

「わかりました、織斑先生・・・僕は碇シンジです」

「うむ・・・では碇、一時間後にまた来る」

そう言うと先生は去っていった・・・僕の周りには居なかったタイプの女性だな・・・

そんなことを思いつつ、指定された”1026号室”に入つたと、入ってすぐのところにダンボールが入っていた。中には制服と部屋着と寝間着が入っていた。仕事が速いな・・・この学園

とりあえず・・・きている今の制服を脱ぎ、IS学園の制服を着る・・・

「なんか・・・着られてるって感じかも」

といいつつ内心少しかっこいいなと思いつつながらベッドに座り・・・

「どうなったんだろ・・・僕の世界は・・・」

リッコさんは「サードインパクトが起きた」って言ってたけど・・・やっぱり僕のせいなのかな？

それに・・・あの設計図・・・ISの設計図とか言ってたけど、なんでリッコさんは僕がこの世界に来るってわかったんだろ？
・・・わからない・・・と考えていると

コンコン

僕は突然のノックに「はい」と上ずった声で答える

「碇、準備は出来ているか？」

「大丈夫です」

僕はそういつと部屋から出る

「ほう・・・馬子にも衣装だな・・・似合っているぞ」

「そうですか・・・？」

お世辞とわかっていても・・・嬉しいものだ

そのまま織斑先生について行き食堂に着いた

「ここが食堂だ。3年間3食をここで取る」

「えっと・・・お金持ってないんですけど・・・」

「心配するな・・・ここは無料だ」

ここが無料！？女子が持っているメニューを見てもかなりのレベルの食事だ・・・それが無料なんだ・・・

「碗も食べてくるといい・・・午後からISの基礎について教えるからな」

「わかりました」

そういつて列に並んで・・・初めて気がついた・・・

女子しか見当たらないのだ

確か織斑先生が・・・。「ISは基本女性しか乗れない物」って言うってたけど・・・ここって女子高なのかな？

後ろの女生徒の視線が痛い・・・そしてそれが増殖しているような・・・

「えっと・・・カレーライス一つお願いします」

「はいよ」

恰幅のいいおばさんにメニューを告げてそのまま進むと・・・もう一人のおばさんがカレーライスを渡してくる。

「すごい・・・こんなに早く出来るんだ・・・」

驚きながら僕は誰も座ってない・・・ないし、一人になれそうな場所を探して端っこのほうに一人になれそうなスペースを見つけてすわり・・・手を合わせて

「いただきます」

カレーを一口食べる。・・・美味しい！ミサトさんのレトルトカレーよりも美味しい

まあ・・・もともとがミサトのカレーと比べるのが間違ってるのだが・・・

と・・・あまりの美味しさにカレーにパクついていると・・・声をかけられた

「こんにちは・・・隣いいかな？」

「あ・・・はい・・・どうぞ」

女の子のお願いに頷き、女の子もいそいそと隣に座る

この時「しまった！出遅れた！」とか「まだまだ・・・チャンスはあるわ」などといった会話が聞こえたのは・・・聞かないことにした

「君・・・一年生だよな？」

「え？・・・あ、はい・・・まだ入学式じゃないんですけど・・・ちよつと事情があつて・・・先に寮に入ってるんです」

「へえ・・・IS・・・動かせるの？」

「え！？あつ・・・まあ・・・はい」

どう答えていいのか・・・思わずはいと言ってしまい・・・

辺りがざわめく。「ええ！？2人目！？」とか「スクープよ！彼の寮の部屋番号調べて！」とか聞こえてくる・・・なんか・・・ちよつとした騒ぎになつてきちゃったな・・・

「そうなんだ！？ねね・・・良かったら後でISのこと教えて・・・《心配ない。ISのことは私が教えることになっている》お、織斑先生・・・」

「静かにせんか！大人しく食事も出来ないのか貴様らは」

一喝とはこのことだろう・・・はしゃいでいた生徒が瞬時に着席した・・・すごい・・・

「そろそろ時間だ・・・行くぞ、碇」

「あ・・・は、はい！」

お皿を返却口に返して織斑先生の後についていく

そのあとは夕方までみっちりISの基礎勉強。

正直・・・こんなに勉強が痛いものだとは知らなかった

話を聞いていないと言つこと3回、余所見で10回、計13回も

出席簿で頭をはたかれた・・・

織斑先生が帰った後・・・ご飯を食べて部屋に帰りシャワーを浴び
寝間着に着替えてからベッドに横になった

「・・・大変な一日だったなあ・・・」

そう呟きながら・・・僕は眠りに付いた

第一章 Ⅱ IS学園Ⅱ（後書き）

次回予告

あっという間に一ヶ月がたち入学式。

シンジは1年1組所属となり、織斑一夏と出会う

この出会いはシンジと一夏に何をもたらすのか・・・

次回 入学式

この次もサービスしちゃうわよ（ナニヲ）

第二章 「入学式」(前書き)

最後らへんを少しいじりました

どうでしよつか？

第二章 「入学式」

朝・・・僕は目覚ましのアラームで目を覚ました

第二章 入学式

歯を磨き、食堂で朝食を食べ、特注のISSスーツに着替えた後、織斑先生にISSアリーナに連れてこられた

「すごい・・・広いですね！」

「ここはISSの自主訓練などに使用されるからな。ある程度の広さは確保してある」

なるほど・・・と納得しながら此処のアリーナが第3アリーナ聞いたとき、これがあと少なくとも2つあることに驚かざるを得ない

「今日は実際にISSに触れてもらう」

「え?・・・もう出来たんですか?僕のISS」

「馬鹿者。まだに決まっているだろう・・・訓練機を使つての練習だ」

「あ・・・そっか」

よくよく考えたら・・・まだ1週間も経ってないのに出来てるわけ

ないか・・・

「ついて来い」

僕は織斑先生の後についていく

とアリーナの真ん中にネイビーカラーの4枚の翼が特徴的なISが見えた

「これは『ラファール・リヴァイヴ疾風の再誕』という。フランス社製の第2世代型ISだ」

僕はまじまじとそのIS『ラファール・リヴァイヴ』を眺める

ちなみに第2世代型とは・・・後付武装イコライザによって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代。現在最も多く実戦配備されている・・・と教本に載っていた

「では・・・第3世代型とは何だ？」

「・・・え？・・・口に出してたかな・・・まあいいや」

「第3世代型とは・・・操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代。未だ実験機の域を出ない。そのためか、どの機体も燃費が悪く、新たな課題となっている・・・であってますか？」

「上出来だ」

・ ほう・・・と一息つく・・・いきなりだったからびっくりしたよ・・・

「触ってみるか？」

「いいんですか!?!」
「かまわんよ」

僕は玩具を与えられた子供のようにISに触れた……とその時

キーン!?!!

「っ……あ」

頭に耳鳴りのような音がしたと思うと……IS『ラファール・リ
ヴァイヴ』が起動し始めた……なんで!?!?

「どうやら……君もISに乗る資格があるということだな」

「はぁ……」

僕は気のない返事をして……乗り込んでみる

「楽にしている……時期に装着される」

その言葉通りISが次々に装着されていき……

「……すごい!?!凄いですよこれ!?!」

手を動かしてみると『ラファール・リヴァイヴ』の手も同じように
動く

「よし……まずは歩いてみる」

「へ?……あ、はい」

頷き……歩いてみる。楽勝かと思ってただけ……

「うわっ！」

「……こけてしまった・今はパッシブ・イナーシャル・キャンセラー……通称PICは切つてあるので地面に突つ伏した格好になつてしまった……は、恥ずかしい／＼」

「やれやれ……そこからか……まあいい早く起きろ」

そんなこんなで訓練は20日以上続き……

並みのIS操縦者では倒せないほどの技量を身につけた

まあ……織斑先生の超絶スパルタ地獄特訓（シンジ談）のお陰なのは言うまでもない

そして……

今日は入学式

「……はすっ飛ばして……え？ダメ？いいじゃないか……飛ば

したいのは飛ばしたいんだよ

ってことで

場所は変わって1年1組

「やっぱ・・・落ち着かないや」

僕の席は一番前の真ん中辺り

隣は・・・男子?・・・なのかな・・・そういえば・・・織斑先生が言ってたっけ・・・

『そうそう・・・ISは女性にしか動かせないと言ったんだが・・・実は起動に成功した男子がいてな・・・まあわたしの不肖の弟なんだが・・・同じクラスになるはずだ・・・面倒を見てやってくれ』
っていつてたっけ・・・結構カッコいいんだな・・・なんて見てると此方に気づいた男子がこっちを向いて

「あれ!?もしかして・・・男か?」

「え・・・あ、うん・・・そうだよ」

男以外に何に見えるってんだよ・・・

「いや、男は俺一人って聞いてたから助かった気分だ・・・あ、俺は織斑一夏おりむらいちかって言うんだ、よろしくな」

あ……この人が織斑先生の弟さんかあ

「僕は碓シンジ。よろしく……織斑君」

「一夏でいいって。俺もシンジって呼ぶからさ」

「わかったよ、一夏」

笑みを浮かべ挨拶を済ませると、先生がやってきた

織斑先生じゃなくて、眼鏡をかけたものすごく大人しそうな先生で

・なんか服もサイズが合っていないような感じで時折、ずり落ちる眼鏡を直している……大丈夫かな……

「おはようございます、1年1組の副担任の山田真耶やまたまやです。」

山田真耶……やまだまや……あ……面白い名前だなあ

「え〜皆さんこれから一年間よろしくお願いしますね」

……返事がない。皆緊張しているのかな？

「じゃ、じゃあ自己紹介から始めましょうか。出席番号順で」

なんか……不安だなあ……と

こんな感じで自己紹介が始まった……

続く

第二章 「入学式」(後書き)

次回予告

入学式を終えほっとするシンジ。

だがクラスでは自己紹介が始まった

シンジと一夏はどう答えるのか!?

そしてシンジのISは!?

次回 自己紹介とシンジのIS

この次もみくんなでみてね

第三章 自己紹介とシンジのISS (前書き)

え〜このたびはご感想を頂きありがとうございます〜

まだまだご意見・ご感想お待ちしておりますね〜

第三章 「自己紹介とシンジのIS」

今・・・このクラスは自己紹介中

まったく考えてなかった僕はどう自己紹介するか考えていた・・・

第三章 自己紹介とシンジのIS

いきなりだもんなぁ・・・と呟いていると

「碓君？碓シンジ君？」

「は、はい」

少し上ずった声での返事に周りからクスクスと笑い声が聞こえる・・・
・はずかしいなぁ／＼

「大声出しちゃってゴメンなさいね？・・・で、では自己紹介お願いしますね？」

僕は頷き先生に背を向けて

「碓シンジです・・・趣味は一応料理です・・・」

・・・うう・・・期待のまなざしが・・・

「え」と、皆さんと仲良くできたらいいなあと思っています。よろしくお願いします！」

最後のほうは凄く早口になっちゃったな・・・

「ありがとうございます」では・・・」

はあ・・・よくマンガでクラス全員女子！とか言う設定あるけど・・・しんどいだけじゃないか・・・

僕はこれからの生活に不安を拭いきれなかった

Side 一夏

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それはいい喜ぶべきことだから

だが・・・問題は・・・男がクラスに2人だけということ。

これは・・・想像以上にきついな・・・

自信過剰ではなく本当にクラス中から視線を感じる。シンジもかなり辛そうだ

大体・・・席もかなり悪い。最前列で真ん中って・・・なんか陰謀を感じるんだが・・・

「……くん。織斑一夏くん」

「は、はいっ!？」

大声で呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。さっきのシンジ同様クスクスと笑われてしまい……。どうも落ち着かない。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、お、怒ってるかな?ゴメンね?、ゴメンね!で、でも自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね……。自己紹介してくれないかな?だ、ダメかな?」

気がつくとも副担任の山田真耶先生がペコペコと頭を下げている。あまりにも頭を下げるので眼鏡がずり落ちそうになっている……

「わ、わかりました……。そんなに謝らなくても自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか?本当ですね!?!や、約束ですよ?絶対ですよ!」

勢い良く顔を上げて詰め寄る山田先生。ち、近いです……

おかげで凄い注目を浴びてるんですが……。ってシンジまで変な目で見えるな

……。やるといった以上、男子たるもの逃げるわけにはいかない。

俺はしっかりと立ち、後ろを振り向く

うつ……。皆がこっちを見ている。その中には箒ほうりも入っている

俺は別に女子に苦手意識は無い。だが限度というものもあるだろう。いくら雪見だいふく好きでも三食毎日雪見だいふくはさすがに飽きるだろうしなあ……

と……こんなことを言っている場合ではない。自己紹介自己紹介・

「えー……えっと……織斑一夏です。よろしく願いします」

儀礼的に頭を下げ、上げる。

うつ……なんだその「もつといろんな事喋ってよ」的な視線は。そして「まさか……これで終わり？まさかねえ」みたいな空気はなんだ？

別に無趣味ではないが……そこまで言うほどのものじゃない。つか……初対面で趣味を暴露してもな……私、家でウーパールーパーと遊ぶのが趣味なんです！……なんて女子が居たら若干引くぞ。

「……」

背中にだらだらと汗を掻きはじめる。どっどっしたらいいんだあつ！……！

Side シンジ

「……」

一夏……困ってるんだな……汗が噴き出してるよと僕も一夏の自己紹介を聞いていた……そして

「・・・・・・・・・・・・・・・・以上です」

ガクツ・・・

つと音が聞こえるぐらいにみんなずっこけていた。

「あ、あのー・・・・・・・・」

一夏の後ろから涙声が二割増した山田先生が一夏に声をかけていた。
・・・とその時

パンツといい音が一夏の頭から聞こえた。・・・ああ・・・やっ
と来たんだ

「挨拶もまともに出来んのか。この馬鹿者が」

そこには織斑先生がいた。そして一夏は

「げえっ！？関羽！？」

とか言つてまたはたかれた。

「誰が三国志の英雄か。馬鹿者」

相変わらず容赦ないなあ・・・

とは言つものの・・・僕もなんとなく銅鑼の音が聞こえてきそうな
雰囲気だ

一夏は状況が飲み込めずに驚きっぱなしのようで・・・

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかったな」
「い、いえつ。副担任ですからこれくらいはしないと・・・」

あ、なんか調子を取り戻したみたい。というか若干熱っぽい声と視線を織斑先生に送っている。憧れなのかな？

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君達新人をこの一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが私の仕事だ。私の言うことは良く聴き、良く理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳に育て上げることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

・・・どここの鬼教官なんですか、先生。さすがにこれはきつ
いんじゃないかな・・・と思っていた。

だけど・・・この僕の認識がものすごく甘いとすぐに思い知らされた。

「キヤーーーーー！！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずうつとファンでした！！！」

「私、お姉様の憧れてこの学園に来たんです、南関東から！」

まあ、別に北関東でもいいんだけど

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。其れとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「・・・ポーズ・・・じゃなさそうだなあ・・・もうちょっとやさしくしたほうが・・・」

「きゃあああああ!!!お姉様!もつと叱って!罵って!」
「でも時には優しくして!」
「そしてつけあがらないように躡をして!!」

「……………あはは
すごいね……………このクラスは

その後…………一夏が先生の名前を呼んで叩かれたり

一夏が金髪の女子に絡まれてクラス代表戦が勃発したりと何かと騒がしかったが何とか一日が終わり…………

「碓、お前のISが届いている。取りに來い」

とその言葉に

「……………ええええええええええっ!!!!!!??」「……………」

つと…………クラスが地響きを起こすかと思つぐらいの音が響き

「碓君、専用機持ちになるんだ?」

「いいなっ、いいなあ」

「専用機持ちになると……………また揉めそうね」

何が揉めそうなんだろうか??

「騒がしい。馬鹿者共……………碓も早く來い」
「あ……………はい」

こうして、教室を出て先生について行つた

「ISアリーナ・ピット」

アリーナのピットに着くと・・・
にび色の大きな鉄の箱があった

「あ、碇君。待ってましたよ」

ひらひらと山田先生が手を振ってきたので軽く振り返す。

「んんっ・・・では、お披露目と行こうか・・・起動テストを開始する」

「はい、では開けますね」

山田先生がポチッとボタンを押すと・・・箱の一面が競り上がって・・・そこから現れたのは

「これが・・・僕のIS」

設計書には全身装甲フルスキンの物もあったが・・・開発者が渋ったために（理由はデザインが気に入らなかったとか・・・）従来の腕や脚などの部分的な装甲とコアで形成されたISアーマーになった。

全体的に紫で統一されたカラーリングに帯のように緑のラインが在り、まるで初号機の様だった

「え〜っと・・・名前は何にしますか？形式番号には『EVA-01』と書かれてましたけど・・・」

開発者も名前だけは決めかねたようだった。

それなら……

「……初号機……エヴァ初号機でお願いします」

「はあ……変わった名前ですねえ」

といいながら名前を登録する山田先生

「よし……乗ってみる」

「はい」

僕は初号機に乗った……なんだろう……懐かしい感じがする……

それは初号機にインストールされた碓ユイの魂のせいなのだが……シンジは知らなかった

「フォーマット フィットインク初期化と最適化が済むまで動くなよ」

凄いい勢いで流れる膨大な数式や数字を見ていると頭が痛くなってくる……リツコさんなら解るのかな？そここうしているうちに終わり、ウィンドウに終了と出たのでそれに触れる。機体は滑らかな曲線が際だつフォルムになっており凄くかっこよかった。

「よし……まずは飛行試験だ……アリーナを3周程して来い」
「了解です」

僕はピットから出て……上を向き……

初号機が飛ぶイメージを頭に浮かべ

「碇シンジ、行きます！」

初号機が空に飛んだ。

Side 千冬

「ほう……なかなかの出力だな」

空に飛び立ったエヴァ初号機を見ながら呟く
恐らくは背中 of 光の羽根の作用か……まさか……第4世代型に
したんじゃないだろうな……あの馬鹿者は

それにしても……実にいい顔をして飛ぶ奴だな
時折……垣間見える表情に……少し笑みを零す

「せ……先生……まさか……」

山田先生の呟きに顔をしかめて

「なにがですか？山田先生？」

「あ……いえ……碇君とデキてるのかと……」

「……冗談も程ほどにな……山田先生」

私は怒気を含ませて山田先生を見る

「ほう……す、すみません！すみません！」

何度も謝る山田先生の頭を撫でながら碇に指示を与える

「次は武装のテストだ……まずは……ハンドガンを出せ」
「はい」

Side シンジ

「次は武装のテストだ……まずは……ハンドガンを出せ」
「はい」

僕はハンドガンを頭に思い浮かべる……手に光が集まり……ハンドガンを形成する

「……いいだろう……次は……」

こうして……武装のテストを続けていき……

「ラストは……ポジトロン・スナイパー・ライフルだ」

「えええっ!? そんなものまであるんですか!？」

「……仕様書には書いてあるが?」

「……やってみますね……」

頭にポジトロン・スナイパー・ライフルを思い浮かべようとする……
ダメだ……出ない……

「……無理そうなら……名前を呼べ。それで出るはずだ」
「はい……ポジトロン・スナイパー・ライフル!」

光が手に集まるも……その大きさにもう片方の手を添えて……

出てきたのは初号機より少し全長が長い、デザインはドラグノフ狙撃銃（昔、本屋で見たことがある）が手に収まっていた

「よし……これより試射を行う……構える」

僕はライフルを構えて……

「撃て」

引き金を引く。

キユウウウウ……バシユウウツ!!!!

光の筋は的を正確に射抜いた……が

ビシユン……バスツ……

「あ……」

アリーナの壁に穴を開けてしまった

「……規格外の威力だな……だが、IS戦には向かんな」

「……ですね」

シンジはエネルギー残量を見て頷く。エネルギーが飛行するだけしかなく、ほぼ空になっていた。

「このライフルに……豊富な武装、今は使用できないがパツケージ付きとは……設計者に敬服するよ」

「はは……」

「よし…… ISを待機形態にしる。これで起動テストは終了だ」
「はい…… 起動解除」

ISの起動を解除すると…… ISは粒子になり首回りにまとわりつき…… 槍の付いたネックレスになっていた

「ほう…… ネックレスか。存外似合うじゃないか」

「そうですか？」

「よし。起動テストを終了する。お疲れ様だ。今日はゆっくり休め」

そう言い残し、二人の先生は去っていく

……このネックレスの槍…… 何なんだろう……

そんなことを考えながら…… 一日が終わるのを感じる今日この頃
だった

続く

第三章 自己紹介とシンジのISS (後書き)

次回予告

ついに専用機を手に入れたシンジ

クラスは代表戦に盛り上がる

一夏対謎の金髪美少女！

そしてシンジは巻き込まれるのか!?

次回 クラス代表戦

この次もしっかり見てね

第四章 「クラス代表戦」(前書き)

なにやらPVとやらが5000越えを・・・ありがとうございます

第四章 Ⅱ クラス代表戦 Ⅱ

朝・・・僕は携帯のアラームで目を覚ました。

この携帯、実はここに来たときにポケット入っていた

携帯のアラームを止めて・・・目を擦って意識を覚醒させる

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

僕は顔を洗って制服に着替えて食堂に向かう

第四章 クラス代表戦

今日の朝ごはんは『焼鮭定食』おいしそうだなあ

きよろきよろと辺りを見渡すと・・・一夏と・・・たしか・・・篠ノ^{しの}
之^の箒^{はら}さんだったかな？

二人を見かけたので声をかける

「おはよう、2人とも」

「おはよう、シンジ」

「おはよう」

「一夏、隣いいかな？」

「おう」

「夏の隣に座って……いただきます」と言っ^てて飯を食べ始める

「そついや、専用機もらったんだつてな？」

「うん……なかなかの仕上がりだったよ」

「ふうん……後で見せてもらつていいか？」

「いいよ」

鮭を食べながら頷く

「ねえねえ……彼が噂の男子だつて」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「え、姉弟きょうだいそろつてIS操縦者かあ。やつぱり彼も強いのかな？」

「そついえば、隣の彼……すでに専用機もらつたつて話だよ？」

「嘘！？いいなあ」

昨日から僕たちの噂が絶えない……けど……話しかけられては
ない……どういふことなんだろうか？

「だから、筭……」

「な、名前で呼ぶなつ」

「……篠ノ之さん」

「……」

なんか……色々ありそうな2人みたい

「織斑君、となりいいかなつ？」

声の主を見れば女の子が三人立っていた……モテるんだなあ……

「へ？・・・いいけど？」

話しかけた女の子は安堵のため息をもらして、後ろの2人はガッツポーズを取っていた・・・そして周りの女子からざわめきが聞こえる

「ああ〜っ 私も早く声をかけておけばよかった・・・」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ〜」

「なんですって!?!？」

・・・この年頃の女子って凄いなあ

シンジは年頃の女の子と言えばアスカとレイしか居なかったのがこのテンションに気後れ気味だった

「あ、じゃ私はこっちの彼のとなりね〜」

ガッツポーズを取っていた2人のうちの1人が隣に座ってきた

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだねー!」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝食べとかないと色々キツいんだよ」

・・・そういえば一度織斑先生と食事したときも同じ事いつてたなあ
・・・健康管理に良いんだろっか・・・一度試してみようかな

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

それは僕も思った・・・凄い少ないよね・・・

「わ、私たちは・・・ねえ？」

「う、うん・・・平気かなっ？」

そうなんだ・・・案外女性しかIS動かせないのってこれが原因なのかも・・・なんてね

「ご馳走様。僕、先に行ってるね？」

「おう」

「ああ・・・わかった」

僕は一旦一夏達と別れて教室に向かった

「そういえば・・・」

窓ガラスの自分の姿を見る・・・目が赤い

入学式前日、部屋に手紙が送られてきた。差出人はリツコさん

どうやら今僕の体は神に近い新たな生命と言うことになっているらしい

ATフィールドも使えるらしい。さすがに目からビームや飛行は出
来ないらしい・・・

「使徒化かぁ」

人じゃない事実には少しばかり苦笑してしまった

それから1週間

一夏にISを見せて「かつこいいな！」と言われて喜んだり

一夏の練習に付き合ったり

織斑先生の視線に気付かない一夏を起こそうとして一緒に叩かれたりと・・・

あっという間に過ぎ・・・

今日はクラス代表戦当日

アリーナには観客席にクラス代表戦を見に来たギャラリィ。練習場には僕と・・・金髪の美少女・・・イギリス代表候補生、セシリア・オルコットさん、そして篤さんと一緒に一夏を待っていた
といってもさつきから無言である

セシリアが纏うのは『ブルー・ティアーズ青い雫』イギリス社製のISで、主に一対多を主とするISだそうなの

「・・・遅いですわね」

セシリアが不機嫌そうに呟く
まだ来て5分なんだけどなあ

「そろそろ来るんじゃない・・・あ、来たよ」

そこに白いIS『ひまへつぎ白式』を纏った一夏がいた……

「なんとか間に合ったな……」

「織斑先生」

「一夏は勝てそうか？」

「……正直……勝てないかもしれないです」

僕は少し俯きながら答えると

「別にすまなそうにする必要はない。私の弟であろうと特別扱いはしない」

「あ、そうでしたね」

そして……『ブルー・ティアーズ』と『白式』が激突した

〓 27分後〓

どうやら……セシリアの勝ちが濃厚になった感じだ

セシリアが特殊兵装の遠隔兵器を動かし一夏を狙う、そして回避する一夏をライフルで狙う。どうやらこれが必勝パターンらしい。

だが一夏は巧みにかわしセシリアに特攻をかける。互いにぶつかり火花が散る。そして一夏に向かう遠隔兵器を……一夏は切った。そしてそのまま兵器は爆散。

どうやら……何かを掴んだようで……

「はああ・・・すごいですねえ織斑君」

たしかに・・・乗って数分のISを見事に操っている・・・だけど
ギリ貧なのは変わらない

「浮かれているな、あの馬鹿者が」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あ
いつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

そうなんだ・・・姉だから何でもわかつちゃうんだな

「へえええ・・・さすがご姉弟ですねえ、そんなことまでわかるな
んて」

「ま、まあ、なんだ、あれでも一応私の弟だからな・・・」

あ、照れてる。結構わかりやすいかも

「碇・・・今何か考えなかったか？」

「えっ・・・そんなことは・・・」

と言いながら視線を逸らすと

バシン！！！！

出席簿ではたかれた

「下らんことを考えてるなら模擬戦をちゃんと見ておけ」

「は・・・はい・・・」

手加減してくださいよ・・・先生

そんなやり取りをしているうちに一夏の『白式』が爆音とともに煙につつまれる

一夏・・・負けたのかな・・・そう呟くと煙の中から『白式』が現れる・・・だが細部が微妙に違う気がする

「やっと一次移行したか。どうやら初期化と最適化も済んだ様だな」
ファーストソフト
フォーマット
フィッティング

一次移行した白式はどことなく中世の鎧を思わせる姿だった

セシリアが遠隔兵器を向かわせる。それを横一閃に薙ぎ払い破壊。

そして一夏はセシリアに突撃する。一夏の勝ちだ！と思ったその時

『試合終了。勝者・・・セシリア・オルコット』

あれ・・・？一夏の負け？何でだろう・・・

隣の織斑先生は理由がわかっているのか・・・「やれやれ」・・・と呟きながら一夏の元に行く

「あ、碇・・・模擬戦の準備をしておけ」

「え？」

「オルコットとやってもらうからな」

「わかりました」

僕は篝さんと山田先生の居るピットに向かう

「どうした？碇」

「模擬戦やるから・・・準備だつて」

「ええ！？私は聞いてないですよ」

そつなんだ・・・じゃ、思いつきなのかな？

僕はISを起動、装着しアリーナに出る

観客席ではどよめきが走り、写真を撮ってる子まで居る・・・そんなに興味深いのかな？

アリーナにはすでにセシリアが準備を整えて待っていた

「遅いですわよ！」

「ご、ごめん・・・」

少しイラついた表情で離れていき・・・試合開始の合図が鳴った

「先手必勝！先ほどの試合では懐に入られましたか・・・今回は最初から本気でいきますわ！」

セシリアは遠隔兵器『ブルー・ティアーズ』を4基出して更にライフルで僕を狙う

「遠距離特化の機体なんだ・・・しかも遠隔兵器つき・・・なら！」

シンジは『パレットライフル』を展開、向かってくるビットに向かい砲撃する

「なるほど・・・弾幕を張って近づけさせないつもりですわね・・・でも、甘いですわ！」

ビットは巧みに弾幕を避けて真正面に来るや否やビームを放つ

「避けきれない！」

そう叫んだ刹那

ガキイイン！！！！

初号機の前に虹色の障壁が展開、攻撃を防禦する

「……………ATフィールド……………」

目の前のスクリーンにフィールドの残りの耐久力が出る。どうやらこれが0になると使えなくなるみたいだ

「……………無駄遣いは出来ない」

『パレットライフル』を乱射しビットを離す。そして『パレットライフル』を格納し

「……………ポジトロン・スナイパー・ライフル」

セシリアとの距離を開け、地面に着地。そしてその手には『ポジトロン・スナイパー・ライフル』を展開していた。

それを構えて……………迫りくるセシリアに照準を合わせる……………そして

「……………いけっ！」

引き金を引く

キユウウウン・・・バシユウウツ!!!

セシリアは驚愕しながら・・・かわしていた!

セシリアは銃口が光った瞬間にすでに回避運動に入っていた
そのおかげで当たるとはなかった

光の帯はアリーナの障壁に当たって霧散した。シンジは出力を抑えて撃った・・・のだがエネルギーの消費は変わらず・・・

『試合終了。勝者・・・セシリア・オルコット』

「やっぱ、エネルギーは変わらないんだ・・・」

僕は出力を下げればエネルギーも抑えられるかと思ったのだが・・・無理でした

結果を見れば・・・セシリアもかわしたもののシールドエネルギーを削っていたらしく・・・結構僅差だったらしい

「なかなかやりますわね・・・あなた、お名前は?」

「へっ?・・・碇シンジだけど」

「シンジさんですか。覚えておきしょう・・・私のことはセシリアとお呼びになつてくださいな」

「は、はあ」

「では・・・ごきげんよう」

なんか・・・良い人っぽいかも

こうして・・・波乱のクラス代表戦はセシリアの2勝という形で幕

を閉じた

続く

第四章 「クラス代表戦」(後書き)

次回予告

クラス代表に選ばれる一夏

そして一夏に急接近するセシリア

そんな中現れる転校生は一夏のセカンド幼馴染

はたしてその正体は・・・

次回 セカンド幼馴染

一夏君って・・・モテモテなのねえ

第五章 「セカンド幼馴染み」(前書き)

一日でPV15000越え・・・感謝しますです

実はこのストーリーは夢と妄想で出来ています(あ

第五章 「セカンド幼馴染み」

次の日

朝のSHR
ショートホームルーム

「では、1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、1繋がりでない感じですね！」

うん・・・確かに僕もいい感じだと思っ・・・けど

代表はセシリアじゃなかったかな？

第五章 セカンド幼馴染み

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたのですが、なぜクラス代表になっているのでしょうか？」

うん・・・凄く気になるな、それは

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり腰に手を当てるポーズ。うわ・・・凄い似合ってるな・・・けどなんで辞退したんだろ？それに、なんか上機嫌だなあ・・・いいことでもあったのかな？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのでから。それは仕方のないことですよ」

凄い自信家・・・まるでアスカみたいだな

「それでまあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして」
しまして・・・？

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわやはりIS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの」

なるほど・・・やっぱり良い人なんだなあ

僕が関心している間にクラスが騒がしくなり・・・

セシリアが一夏のコーチに名乗り出たり

篠ノ之さんがコーチは私で十分と反論してセシリアさんと睨みあったり

一夏が織斑先生に何回も出席簿ではたかかれたり・・・

楽しい時間が過ぎていった（その後は織斑先生の地獄の授業だったけど）

それから少したって・・・四月下旬

今日はISの基本操縦の実践をすると織斑先生が言っていた

グラウンドには1年1組のクラス全員集まっていた

「よし・・・礎、織斑、オルコット、ためしに飛んで見せろ」
「・・・はい」「」

僕は・・・イヤリングの槍を掴んで念じる・・・

イヤリングが光り・・・それが膜の様に広がり、体を包み・・・開放されるように弾け、再集結してまとめ、IS本体として形成される。その間0.5秒

セシリアはすでに展開済みで一夏は・・・あ、やっと終わった・・・とつぶやいた瞬間

ガスッ！

「うわああ!!」

イヤリングの槍が巨大化して目の前に突き刺さっている

二股のクリムゾンに近い赤で全長は4mぐらいあった

辺りがざわつき・・・

「静かにしろ・・・碇、武器を格納しろ」

「は、はい」

僕は槍を格納しようとして・・・ちゃんと格納できたようだ

「あゝびつくりした」

「よし・・・飛べ。ほかの2人はもう行ったぞ」

「え！？は、はい！」

あわてて飛んでいく。

一夏は・・・あれ・・・遅いな・・・故障なのかな？

セシリアは・・・上空で止まってる

「何をやっている。スペック上では白式のほうが上だぞ」

一夏への通信が此方にも流れてくる

「一夏、先行くね」

「あ・・・ま、待ってくれシンジ」

懸命に僕についてくる

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

たしかに・・・僕は織斑先生に漠然とPIC（パツシブ・イナーシヤル・キャンセラー）があるからだとしか言われてない

「説明してもかまいませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動破干涉の話になりますもの」

「わかった。説明してくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

・・・なんか・・・いずらいなあ・・・

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

キイイイイン！！！！

耳に響くっ・・・通信から聞こえた声は篠ノ之さんの声。下を見ればインカムを奪われておたおたしている山田先生と明らかに不機嫌そうにしている篠ノ之さんが見えた

「すごい・・・篠ノ之さんのまつげまで見える・・・」

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんですよ。元々ISは宇宙空間での稼働を想定したものです。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

そうなんだ・・・何でも知ってるんだな・・・セシリアは

「よし、碇、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ」

「了解です。では一夏さん、シンジさん、お先に」

そう言つて急降下を始めるセシリア。速い速い・・・
一夏の「うまいもんだなあ」の言葉に頷きながら見ていた
どうやら完全停止もクリアしたみたいだ

「じゃ、俺も行くわ・・・お先！」

一夏も急降下を始めて・・・ぐんぐん小さくなる。スピードならせ
シリア以上かも・・・と思つていと

ズドオオオン！！！！

大きな音に体を竦ませてしまい・・・目を開けると・・・グラウン
ドにクレーターを開けた一夏が見えた

「ちよつと間抜けかも」

といいながら僕も急降下し始める・・・ぐんぐん地表が近づき・・・
・警報が鳴る

「いまだっ」

下半身を地面ギリギリで振り上げ体を上下入れ替えて完全停止・・・
・ふう・・・

「碇とオルコットは合格点だ。織斑は・・・まだまだだな・・・」
「はい・・・」

一夏がずうんと落ち込む。篠ノ之さんにも怒られている・・・どん
まい

その後篠ノ之さんとセシリアが揉めてたけど、織斑先生に一喝されてその場は納まり

「織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるようになっただろう」

一夏は返事をして突き出した右腕を左手で握る

そして・・・一夏の手に光が集まり『雪片式型』ゆきひらにがたが形成される

「遅い。0.5秒で出せるようにしろ」

相変わらず厳しいなあ

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のように光の奔流を放出することはない、一瞬爆発的に光っただけ。それだけでその手には狙撃銃『スターライトMk?』が握られていた。

一夏より圧倒的に速い。しかもすでに銃器にマガジンが接続されており、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。この間わずか1秒足らず。さすが代表候補生

「さすがだな、代表候補生。・・・ただし、そのポーズは止める。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な・・・」

「直せ。いいな」

「……はい」

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

いきなり振られてびっくりするセシリア……何か考え事してたのかな？

銃器を光の粒子に変換し格納。新たに近接用の武装を展開させようとする……のだが

「くっ……」

「まだか？」

手間取っている。一夏より遅いかも……

「す、すぐですっ。……ああ、もうっ！『インターセプター』！」

半ばヤケクソ気味の武器の名前を呼ぶ。それにより、イメージがまとまり、光は武器となって展開される。

たしか……これは教科書に載ってる『初心者用』で……僕がポジットロン・スナイパー・ライフルを呼ぶときに使っているやり方。でも代表候補生のセシリアにはかなり屈辱的なよう……

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらったつもりか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦では初心者に簡単に懐に入らせていたようだし……碇との対戦ではさらに遠距離からの狙撃に危うく負けそう

に見えたのは気のせいか？」
「あ、あれは、その……」

ごによごによと齒切れが悪そうなセシリアを一夏が眺めている……
ああ……だめだつて
案の定……一夏は睨まれてたぶん……文句でも言われてるんだ
ろうな……

と此方にもセシリアからのプライベート・チャネル個人間秘密通信がきた

『あなたもですわよ！』

『な、なんでだよ！』

『あんな武器……反則ですわ！』

『そんなあ……』

……結局文句言われちゃったよ……

「碇。お前も武装を展開しろ」

「は、はい」

僕は気を取り直して剣を構えるような体勢にし……『プログレッ
シブ・ダガー』を呼ぶ
形が小さくわかりやすいのかすぐに展開できた

「やるな。ではポジトロン・ライフルを展開しろ」

「は、はい」

僕はダガーを格納する。そういえば……武装を出すときは『展開オープン』
しまうときは『格納クローズ』って言うそうだ。

そして……ポジトロン・ライフルを展開する……光の奔流が走

り・・・ポジットロン・ライフルが展開される

「1秒か・・・格闘武器と射撃武器の展開時間を同じにしろ。いいな」

「はい・・・」

やっぱ・・・格闘武器のほうが発展しやすいな・・・

そして・・・一夏と僕で後片付けをして今日の授業を終えた

Side ????

「ふうん・・・ここがそうなんだ・・・」

夜、私はIS学園の正面ゲート前に立っていた

「えーっと・・・受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出すくしゃくしゃになってるけど・・・ま、いつか

「本校舎一階総合事務受付・・・って、だからそれはどこにあんのよ」

文句を言っても紙は返事しない。私はイライラする気持ちと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。また中でくしゃくしゃって音が聞こえたけど私は気にしない

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

「まったく・・・出迎えないとは聞いてたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に15歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？」

私は文句を言いながら敷地内を歩き回る

誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できる人

時刻は八時過ぎ。どの校舎も灯りが落ちているし、当然生徒は寮にいる時間だ

あーもう、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな・・・

一瞬、それは名案！と思ったんだけど、あの『あなたの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、やめる

まだ、転入の手続きが終わってないのに学園内でISを起動させたら、事である。最悪、外交問題にも発展する。それだけは本当にやめてくれ、と何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、少女の気分はちよつと晴れた

ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー

正直言って自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げるのは、ちよつと気分がいい。

昔から、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いな少女にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は見戯、女のISこそ正義。それもまた気分がいい。少女はかつて、『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな

子供だった

……でも、アイツは違ったなあ。

とある男子のことを思いそうとする

「君……こんなところで何してるの？」

ちよつと……今アイツのこと思い出そうとしてんのに邪魔すんのは誰よ！

不機嫌そうに振り向くと、黒髪で目はルビー色で顔もそこまで悪くない。そんな男子がIS学園の制服を着て立っていた

Side シンジ

「君……こんなところで何してるの？」

僕は眠れなくなって、気分転換に外に散歩に出ていた。そんな時見慣れない女の子を見かけて声をかけた

すると、不機嫌そうに振り返り……次に驚きの表情で見る

「あなた……誰？」

「僕は1年1組の碇シンジ。君は？」

「私は……《だから……でだな……》……あ……」

女の子がアリーナ・ゲートに走り出したので慌てて追いかける

「いきなりどうし《ちよつと黙ってて》……うんうん」

なんか・・・アスカと話してるみたいだなあ

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

女の子は足を止めて何か呟いてる。そして・・・

「いち・・・」

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいつて感じ』って」

「・・・くいつて感じだ」

「だからそれがわからないって言って・・・おい、待てって箒！」

一夏と篠ノ之さんが居たけれどこの子が居たから行けなかった・・・
ってなんか凄い怒ってる!?

女の子を見て少しおびえてしまうシンジ

「・・・総合事務受付ってどこ？」

「えっと・・・こっちだよ」

アリーナの後ろの本校舎に案内し、灯りのついてる総合事務受付まで連れて行き

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、ファン・リンイン 鳳鈴音さん」

へえ・・・ファン・リンインって言うんだ・・・中国の人かな

「碓君もありがとうございますね」

「あ、いえ・・・たいしたことはしてませんから・・・」

事務員さんに愛想笑いを浮かべて、その後鳳さんを見ると・・・まだ不機嫌そうで・・・唇を尖らせている

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？1組よ。碓君と同じクラスね。鳳さんは2組だから、お隣ね。あ、そうそう、あの子1組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

・・・噂好きなのはこっちでも変わらないんだな・・・シンジはとある女性を思い浮かべてた。

「2組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

・・・なんとなく解るのは僕の気のせいだろうか？

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

ああ・・・やっぱり

鳳さんの顔を見ると笑顔にはばっちり血管マークがついていた

続
く

第五章 「セカンド幼馴染み」(後書き)

次回予告

2組に転向してきたファン・リンイン凰鈴音

セカンド幼馴染みの存在に焦る箒とセシリア

そして現れる使徒

シンジは使徒に勝てるのか

次回 使徒、襲来

シンちゃんもがんばらないとね

第六章 使徒、襲来（前書き）

大体一話書くのに4時間。

皆さんはどれぐらいかかるのでしょうかかねえ？ちょっと知りたい気分w

第六章 使徒、襲来

次の日・・・夕食後に行われた『織斑一夏クラス代表就任パーティー』に強制的に参加させられたシンジ

「いや、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

・・・さつきから相槌打ってる女子は・・・確か2組の女子だったような・・・

と言うか・・・明らかに30人以上居るよ・・・なんでクラスの集まりでクラスの人数こえてんの？

「まあまあ・・・気にしない気にしない」

「碓君も楽しくいこうよ」

まあ・・・いつか

僕は女子に連れられてパーティーの輪に入る

第六章 使徒、襲来

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と碇シンジ君に特別インタビューをしに来ました〜!」

おお〜と一同盛り上がる・・・インタビューとか慣れてないんだけど

「あ、私は2年の井みかおほし黛薫子こ。よろしくね。新聞部部长やってます。はいこれ名刺」

名刺を受け取る・・・うわ・・・画数多いな・・・書くの大変そう

「ではではぜひ織斑君!クラス代表になった感想を、どうぞ!」

なんて答えるんだろ・・・

「えーと・・・まあ・・・なんとというか・・・がんばります」

まあ・・・普通だったね

「え〜、もうちょっといいコメントちょうだいよ〜。俺に触ると火傷するぜ、とか」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的!」

そうかな?高倉健はいいと思うんだけどな

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

・・・え?捏造するの!?

そんなシンジの心の声が聞こえるはずもなく

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「コホン、ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかと言つと、それは……」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからつてことにしよう」

「なっ、な、ななっ……!?!?」

「……ああ……セシリアって一夏に惚れてるんだ……真っ赤になるあたり凶星っぽいし」

その後、一夏の「なにを馬鹿な」発言にセシリアが噛み付いていた

「じゃ、碓シンジ君、なにかコメントちょうだい」

「え？ぼ、僕ですか？」

「こまったな……なんて答えよう……」

「一夏君にはクラス対抗戦頑張つて欲しいです」

「ふむふむ……じゃ、最後に今後の抱負を」

「……代表候補生に……なれたらいいなあと思います」

「はい、ありがとう」

ふう……何とか乗り切つたと、そこに篠ノ之さんが話しかけてきた

「碓はもっと自信を持ったほうが良い。セシリアに勝てる実力は持っているのだからな」

「それは聞き捨てなりませんわね……」

会話を聞いていたセシリアが割り込んできた

「ふん……一夏であの様だ、碇なら勝てるだろう」

「あ、あれは……少し油断しただけですわ！」

「私なら油断しないがな」

「くっ……言ってくれますわね」

「まあまあ……落ち着きなよ、2人とも」

僕が割って入り、2人を宥める

「まあ……リベンジなら受け付けますわよ？シンジさん？」

「はは……近いうちにね」

僕は先にパーティーから抜けて部屋に戻った

翌日

「おはよう」

「おはよう、碇君」

「織斑君、転校生の話聞いた？」

「いや……？」

転校生……ああ、ファン・リンイン鳳鈴音さんのことかな

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

今日もセシリアが腰に手を当てたポーズをとっている。ほんとに似

合つよね

「どんなやつなんだろうな」

一夏も気になるようだった。鳳さんは一夏を知ってたようだけど・
・言ったほうがいいのか？

「む……気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

なんか不機嫌そうな篠ノ之さん。やっぱり一夏のことが好きなのか
な？

「今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス
対抗戦があるというのに」

「そう！そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践
的な訓練をしましょう。せ、専用機を持っているのはまだクラスで
わたくしと一夏さんだけなのですから」

……何気に僕スルーされたよね？

「シンジも居るだろ」

「う、そうですね……」

少し残念そうな表情なせシリア

「2人で練習してきなよ。せっかくだしね」

「ん……まあ、そういうなら」

笑顔で頷く僕にセシリアが笑みを向けてきた・・・お礼なのかな？

「まあ、やれるだけやってみるか

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする。」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

最後の子は何か含みのある言い方だったなあ
と・・・いつの間にか廻りは女子で囲まれた

「織斑君、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね！」

ああ・・・なるほど・・・勝つと何かのフリーパスがもらえるんだ

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

「一夏は」おう」と答えている・・・とそこに

「・・・その情報、古いよ」

あ・・・聞いたことのある声。一夏もなんか聞き覚えがありそうな顔

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できなから」

「鈴・・・？お前、鈴か！」

やっぱり、知り合いだったんだ？

「そうよ。中国代表候補生、フヤン・リンミン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

うわぁ・・・言い草がほんとアスカにそっくり

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

あ・・・喋り方が砕けた・・・これがほんとの喋り方なんだ

「そういえば・・・あんたもこのクラスだったわね、この前はアリガト」

「ああ・・・」

気にしないで・・・と言おうとしたとき

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

目の前のウィンドウにNERVでよく見た警報と言う文字が大きく出て、そのウィンドウが何枚も出ていて

「ちよつ・・・なんなのよ！」

「わ、わかんないよ・・・え・・・!？」

僕は、慌てて外を見る・・・そこには

「使徒……」

使徒が居た……なんで!?

「まだここに居たか」

「織斑先生!」

「全員ここを動かすなよ」

「でも……シンジさんが飛び出していきましたけど……」

「何!? まだどんな敵かもわからないと言っのに!」

とりあえず……倒さない!

僕はISを起動させパレットライフルを展開し使徒に……発砲した

ガガガガ……ガキキキン!!!

が、ATフィールドに阻まれる

ロンギヌスの槍を使えば勝てるのだが……このシンジはそれを知らない

「このおおっ!」

パレットライフルを格納しプログレッシブ・ダガーを展開
ダガーでフィールドを切り裂き……

「はあああつ！！！！」

コアに突き刺す

ドゴオオオオン！！！！

十字の光が立ち上り殲滅した証の虹が出る

ふうとため息をつく……が

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

また警報が鳴る。辺りを見渡すと……

すでに学園内に紫色の触手を持った使徒に……遠く50キロの地
点には正八面体の使徒が出現していた

「なんで……こんなに！！」

紫の使徒に向き合つと

ビシュン！

使徒への攻撃。だがATフィールドに阻まれる

「シンジー！」

「シンジさん！」

「一夏、セシリア！」

援護に来た二人に

「下がって！こいつ等はフィールドがあつて攻撃が届かない。エヴアじゃないと倒せないんだ」

その言葉にセシリアが

「ならばフィールドさえなければわたくしでも倒せるのですね？」

「へっ！？・・・まあ・・・うん」

「今回は一夏さんの出番はありませんことよ。シンジさん、フィールドをお願いします」

「・・・わかった」

僕は・・・僕自身のATフィールドを発現させ・・・使徒のフィールドを侵食する

「いまだ！今ならフィールドを張れないはずだ！赤いコアを狙って！」

「わかりましたわ！」

セシリアがスターライトMk？でコアを狙い撃ち・・・

チユドオオオン！！！！

使徒は爆散し虹がかかる

後は・・・

望遠で正八面体の使徒を見る

何機かのISが応戦しているもATフィールドによって決定打が出

せず、使徒もISのすばやさで攻撃が当たらない。形を変形させて加粒子ビームの連射や掃射を行うも当たらない

「……………ポジトロン・スナイパー・ライフル」

現時点で最高の攻撃力（槍を除く）を持っているスナイパー・ライフルを展開させる

……二回目の戦い……前みたいに2回も撃たない。一撃で決める！

引き金を引き絞る……

その時

使徒が形をヒトデのような形に変え攻撃態勢に入る。そして最高出力での加粒子ビームを放つ

ヒュウウウウ………キイイイイン!!!!!!

赤いビームが迸る……もシンジには当たらない。ATフィールドで防いだのだ

「シンジさん！」

「いけー！シンジ！」

「あたれえ!!!!!!」

キユウウウウ………バシユウウウツ!!!!!!

光の奔流は真っ直ぐ使徒に向かい……

カンッ！・・・ドゴオン！！！！

コアを撃ち抜き・・・使徒は爆散せず崩れて消えていった

「よっしやあ！！！！」

一夏がガッツポーズをとる

「みんなのおかげだよ」

幸い学園の損害はほぼ0。

爆風で色々吹き飛んだぐらいだ

「さて・・・シンジさん・・・説明してくださいね？」

ニコリ笑みのセシリア

「・・・帰ってからね」

こうして、学園での取調べを覚悟しつつ・・・一路学園に向かうのであった

続
く

第六章 Ⅱ使徒、襲来Ⅱ（後書き）

次回予告

見事3体の使徒を撃破したシンジ

だが学園で待っていたのは厳しい取調べだった

シンジは真実を告げるのか？

どうなるシンジ！

次回 クラス対抗戦

シンちゃん・・・成長したわねえ・・・いじゅゆいじゅゆ

第七章 「クラス対抗戦」(前書き)

いつの間にかPVが30000、ユニーク5000近くに・・・感
謝感謝です

第七章 Ⅱ クラス対抗戦 Ⅱ

Ⅱ I S 学園・取調室 Ⅱ

今僕は取調室にいる・・・他に・・・一夏、織斑先生、鳳さんにセシリア、箒が居る

「さ・・・説明してもらいましょう・・・あれがなんなのか」

あれとは、先ほど殲滅した使徒のことだ

「せ・・・先生・・・」

「かまわん・・・言ってしまうえ」

みんなが首をひねる

「僕は・・・この世界の人間じゃないんだ」

第七章 クラス対抗戦

「」「」「えええええっ！！！？？」」「」「」

思ったとおりの反応だなあ

「・・・さて・・・先ほどの生物の話をしてもらおうか・・・あ

「これは私も聞いてないからな」

「あれは、使徒って言って・・・本来は僕らの世界に現れた天使の名を持つ敵だったんです」

「ほう・・・どのような敵なのだ？」

「僕はあまり詳しいことは聞いてないんですが・・・使徒は総じてATフィールドを持つてるんです」

「・・・シンジさんのISにもありますわね」

「僕のは耐久力があるんですけど・・・使徒のフィールドには耐久力はなくて・・・いつでも展開できるんです」

「と言うことは・・・我々の攻撃をいつでも防げると言うことだな」「ちよっ・・・それずるくない!？」

僕は鳳さんの言葉に一言付け加える

「あ、でも、僕の世界ではエヴァンゲリオンっていう兵器も持っていて、同時に張ることでフィールドを中和して対消滅させることが出来るんだ」

「へえ・・・対抗策はあるんだ・・・」

「でも・・・IS・エヴァ初号機のフィールドはそれが出来ないんだ・・・」

「・・・あら・・・?でも中和していましたわよね?」

僕は一旦躊躇して・・・告白する

「・・・実は・・・僕も、その・・・使徒とおなじ様な存在になつちやっただみたいで・・・」

・・・沈黙が続く・・・

「」「」「ええええ!?!」「」「」

再びの驚愕

「ちよっ……いきなり襲ってこないわよね!？」

「そっ、そんなことしないよ!!」

「ふーん……ならいいんだけど」

いきなり何を言い出すんだよ……鳳さん

「で……使徒とやらはあれだけか？」

「……知ってる限りでは……あと4体います」

考え込む織斑先生……やっぱり驚いたよなあ

「よし……碓の素性は他言無用とし……使徒に関しては学園から政府に打診してみよう……足止めぐらいは出来るからな」

「ありがとうございます……先生」

「気にするな……皆もそれでいいな」

「わたくしはかまいませんわ」

「ん、私もいいわよ」

「おう、俺もいいぞ」

「私もだ」

みんな……ありがとう

「よし……今日は解散だ。夕食をとって休め」

こうしてこの場は解散となった

それから数日

僕たちは特に騒ぎもなく日々を過ごしていた

一夏がセシリアと篠ノ之さんとのトレーニングでぼろぼろになったり

一夏と篠ノ之さんと同居していることが鳳さんに発覚したり

一夏が鳳さんとの約束を忘れて激怒されたりと……

「一夏……不憫だな」

「はは、ま、まあな……」

そして……クラス対抗戦当日

第二アリーナ。第一試合は鳳さんと一夏

噂の新生生同士の戦いとあって……アリーナは全席満員。それどころか通路まで立ってみている生徒で埋め尽くされている。

入れなかった生徒や関係者は外のリアルタイムモニターで観覧するらしい

僕は一夏のいるピットにいた

「頑張つてね、一夏」

「おう！」

一夏がフィールドに向かう

凰さんのIS『シエンロン甲龍』は肩のスパイクアーマーが特徴的だ。もしかして近接戦闘型なのかな？

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

そろそろ始まる・・・凰さんはかなり気合が入ってるな

「一応言っとくけど、ISの絶対防禦も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にもダメージを貫通させられる」

・・・僕はその言葉を聴きながら眉をひそめる。織斑先生から聞いた話と同じなので・・・本当のことだ。IS操縦者に直接ダメージを与える”ためだけ”の装備も存在するらしい・・・もちろん、競技規定違反にひっかかる。何より人命に危険が及ぶ僕はそういうのは嫌いだ・・・それでも

『殺さないようにいたぶることは可能』

ということ

『それでは両者、試合を開始して下さい』

ピーッと鳴り響くブザー・・・と同時に一夏と凰さんが動いた

ガギインッ！！！！

一夏が展開した雪片式型が弾かれる。一夏はクロス・グリッド・ターン三次元跳躍旋回を使いこなして凰さんを正面に捉える

そして鳳さんは柄を繋げた状態の二本の青龍刀をバトンを扱うように回す。それは縦横斜めと鳳さんの手によって角度を変えながら斬りこんでくる。一夏は何とか捌くも・・・それが精一杯のようで、一旦距離を置こうとしたとき

鳳さんのISの肩アーマーが開く。中心の球体が光った瞬間、一夏は反対のほうに吹き飛ばされていた

「えっ！？・・・なんで吹き飛んだんだ！？」

思わず呟いてしまうシンジ

そして、再び一夏が吹き飛ばされ地面に打ち付けられる一夏。

かなりダメージを受けている・・・大丈夫だろうか

それにしても・・・何で一夏は吹き飛ばされたのだろうか

「なんだあれは・・・？」

篠ノ之さんもつぶやく

それに答えたのはセシリアだった

「『衝撃砲』ですわね」。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。ブルーティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

篠ノ之さんはそれ以上聞いてはいなかったが

「砲身が見えない・・・」

それは脅威だ。たぶん、僕が向こうの世界で初号機に乗っても対応できないかもしれない。

そして・・・鳳さんが青龍刀を構えなおす。一夏は・・・どうやら加速体制に入ったようだ

どうやら・・・『あれ』を使うらしい

イグニッション・ブースト
『瞬間加速』

名前の通り、一瞬で加速し、一気に間合いを詰める技。奇襲とかによく使われると先生から聞いたことがある

まさに一夏の刃が鳳さんに届こうかとしたその時

ズドオオオント！！！！

大きな衝撃がアリーナ全体に走った。どうやら衝撃砲じゃなさそうだ・・・

ステージ中央から煙が立ち昇っている・・・僕は無意識にISSを起動させていた

そして・・・

『ステージ中央に熱源。所属不明のISSと断定。白式がロックされています』

その通告に

僕は飛び出していた……。暫くしてオープン・チャンネルの通信を拾い上げた初号機に一夏と凰さんの会話が聞こえてきた

『あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!』

『にげるって……。女を置いてそんなこと出来るか!』

『馬鹿! アンタのほうが弱いんだからしょうがないでしょうが!』

言い争いをしている場合じゃないのに!

『別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を収拾……。』

『あぶねえ!!!!』

一夏が凰さんの体を抱きかかえて横に飛ぶ。その直後、一夏たちがさっきまでいた空間に熱線が通り過ぎる……。がすぐさま一夏たちに二発目のビームが迫る。一夏たちは体勢を立て直せず動けない

「させるかあああああ!!!!!」

僕は一夏たちの前に立ち、初号機のATフィールドでビームを防ぐ。ビームは上に弾かれ、アリーナの遮断シールドに当たって霧散する

『ビーム兵器かよ……。しかもセシリアのISより出力が上だ』

たしかに……。そう呟くと初号機のATフィールドが崩れていく。耐久力が0になったらしい

『ちよつ、ちよつと、馬鹿！離しなさいよ！』

『お、おい、暴れるな……つて馬鹿！殴るな！』

『2人とも！馬鹿やつてる場合じゃないよ！』

『ちよつと！馬鹿やつてるのは……』

『くるぞ！』

煙を散らすかのように式ビームを連射してくる。

それをかわすと、その射手たるISがふわりと浮かび上がってきた

『なんなんだ……こいつ』

一夏の言うとおり。異形だった。深い灰色をしたそのISは手が以上に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首というものがない。肩と頭が一体化しているような形をしている。

何よりも特異なのが、その『フル・スキ全身装甲』だった。

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。なぜか。必要がないからだ。防禦はほとんどシールドエネルギーによって行われている。だから、見た目の装甲というのはあまり意味を成さない。（初号機には全身装甲の案もあったが篠ノ之東が上記の理由で廃案にした）防禦特化型のISで物理シールドを搭載しているのもあるが、素肌を1？も露出していないISは知る限りでは聞いたことはなかった。

大きさにしてもそつだ。腕を入れると2mを超える巨体はこの初号機と同じくらいだ。

そしてその巨体の姿勢を維持するためなのか全身にスラストアークが見える。頭部にはむき出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先ほどのビーム方向が左右合計4つある

『お前、何者だよ』

一夏が問いかける……も反応なし。当然といえば当然かも……

『織斑君！鳳さん！碇君！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISで制圧に行きます！』

割り込んできたのは山田先生。いつもより厳しい口調だ。それを聞いた一夏が

『……いや、先生達が来るまで俺達が食い止めます』

どうやら一夏も同じ考えらしい。相手はアリーナの遮断シールドを突破してきた……ということは、今ここで僕たちがいなくなればその砲口がいつ観客席に向くか解らない。

『いいな、鈴』

『だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃないの！』

『ああ、悪い』

一夏が鳳さんから離れる

『織斑君！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら・

……』

と……その言葉をかき消すように相手が突っ込んでくる。一夏はそれをかわす

『ふん、向こうはやる気満々みたいね』

『みたいだな』

『わたしは衝撃砲で援護するわ。アンタは突っ込みなさい、武器それしかないんでしょ?』

『僕も援護するよ、その間にお願いだよ』

僕はポジットロン・ライフルを構える

『よし、それでいくか』

僕たちは謎のISに攻撃を開始した

僕と鳳さんが援護しながら一夏が相手に斬りつける。・・・もかわされてしまう

僕は離れて、通信を切り援護に集中する。的確に当てていくもあまり効いていない。

鳳さんも衝撃砲を放つもすべて叩き落されている。

・・・それにしても・・・動きが人間的じゃない・・・まさか・・・僕は通信を開き二人にオープン・チャンネルで話しかける

「このIS・・・もしかして無人じゃないのかな?」

『あ、俺もそう思ったぜ』

『ううん、でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの』

・・・でも・・・絶対なんてあり得るのだろうか・・・

『仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ?』

『何？無人機なら勝てるって言っの？』

『ああ。人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな』

そっとうものだろうか・・・？

『全力も何もその攻撃が当たらないじゃない』

『確かに。空振りばっかだよな』

『うるせえ。次は当てる』

『言い切ったわね。そんなこと絶対にあり得ないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましようか』

なんとなく凰さんがニヤリと笑みを浮かべた気がしたけど・・・ま、いつか

とその時

バシユウウン！

僕のISが動かなくなった。装甲は残ったままだがエネルギーが切れている

「な、何だよこれ・・・クソッ」

『シンジ！？どうした！』

『何？故障？』

「動かなくなった・・・ゴメン、一緒に攻撃できない」

『気にすんな、俺達でやるから』

『そっよ、そこで見ときなさい』

頼もしい言葉だなあ・・・と感心していると

「一夏あつー!!」

っあ……すごい声だ

キーン……とハウリングが尾を引くその声は、篠ノ之さんだった

『な、なにしてるんだ、お前……』

一夏が問いかけている

中継室のほうを見ると、審判とナレーターがのびていた。……結構酷いね……じゃなくて!

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

また、ハウリングが起こる。まずい……敵が篠ノ之さんを向いている

「動け!動け動け動け動け動け……」

体を動かそうとするも動かない。砲口が篠ノ之さんに向く

「今動かなきゃ何にもならないんだ!だから……動いてよおっ
!!!」

ドクン……

鼓動が聞こえる

ドクン……

これは・・・何だ!?

ISの装甲が歪み始め・・・質量を増やす。そしてシンジを包み込む

この異常な光景に、一夏も鈴も箒も・・・謎のISでさえも見入っていた

そして・・・形がまとまり形成されていき・・・

シンジの時代の『エヴァンゲリオン初号機』がそこにいた

Side 一夏

俺はその光景に見入っていた。

シンジのISが形を変えている。『ファーストシフト一次移行』? いや・・・シンジが言ったと言っていた。ならばこれはなんだ?

『・・・』セカンド・シフト『セカンド・シフト第二形態移行』・・・』

聴きなれない言葉に首をかしげていると

”それ”は形を形成する。謎のISと同じ『フル・スキン全身装甲』だが、顔と首があり全体的に細く、スタイリッシュ。カラーリングは変わっていない。頭の辺りに角が生えている。

ドゴオオン!!!!!!!!!!

謎のISは爆発した

「シンジっ!!!!!!!!!!」

『あれじゃ……爆発から逃れられないわ……』

立ち上がる煙。

その中から現れるエヴァ

そして、装甲が歪み、溶けていき……元のISに戻る。シンジは
気を失ってるが、命に別状はない……良かったぜ

こうして……俺達のクラス対抗戦は終わった

続く

第七章 「クラス対抗戦」(後書き)

次回予告

エヴァ初号機の暴走によって終わりを告げた乱入事件

それと同時にクラス対抗戦も中止になった

嘆くクラスメイト

そして目を覚ましたシンジを待っているのは……

次回 嘆きのクラスメイト

まさか……暴走するなんて……ってわかってたけどね(うき
ゆきゆ)

第八章 「嘆きのクラスメイト」 (前書き)

かなり遅れてしまいました・・・陳謝です；；

え〜っと・・・シンジの戦闘についてアドバイスがいただけましたので満足いただけるように頑張っていきたいです

第八章 Ⅱ 嘆きのクラスメイトⅡ

・・・・・・・・ここは・・・・・・・・

「シンジ君・・・・・・・・」

・・・・誰の声だろうか・・・・辺りを見渡すと1人の少年が立っていた

「・・・・君は使徒を倒す術を・・・・得ているはずだよ」

使徒を倒す術・・・・・・・・なんだろう・・・・

「解ったね・・・・・・・・シンジ君・・・・・・・・槍だよ」

槍・・・・・・・・あ・・・・・・・・あの槍・・・・か・・・・・・・・

そして意識は闇に落ちていった

第八章 嘆きのクラスメイト

「ん……ここ……は」

少し気だるげにあたりを見渡せば織斑先生が目を覚ました僕を見て安堵のため息を漏らした

「保健室だ……具合はどうだ」

「……大丈夫です……」

僕はそう言いながら体を起こす……大丈夫と言ったものの、やっぱり少し気だるい

「そうか……まあ、あまり無理はするなよ」

……なんかばれてるっぽい……顔に出てたかな？

「よし……ではいくつか質問がある……まずは……碓のISだが……あれは『セカンド・シフト第二形態移行』なのか？」

「……よく解りません……途中から意識がなかったから……」

僕は包まれた後すぐに意識を失っていたのでよく覚えていない

「なるほど……では何も覚えてないのだな？」

「はい」

「ふむ……あの謎のISについては何か知っているか？」

「えっと・・・何かと言っても・・・戦闘したときに使っていた兵装位しか・・・」

「そうか。それなら織斑達と同じ答えしか得られそうにないな」

困ったように俯く織斑先生。僕も困ったように俯いてしまう

「ここで考えてもしょうがないな・・・では、私はそろそろ行くとしよう・・・仕事も残っているしな。暫く休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけを言い残し織斑先生は保健室を去っていく・・・本当に真面目な人だなあ

「おっす、邪魔するぞ」

先生と入れ替わりに一夏と篠ノ之さん、セシリアに鳳さんがやってきた

「もう、大丈夫なのですか？シンジさん」

「うん・・・ありがとう、セシリア」

「色々と、すまなかったな」

「気にしなくていいよ、篠ノ之さん」

「ま、こいつが気にするなってんだから、気にしなくていいんじゃない？・・・ねえ？シンジ」

「あ……うん、そっだね鳳さん」

「ま……無事で何よりってな!」

頭をわしわしと一夏に撫でられる……むう……くすぐったいなあ

「ちょっと、鳳さんってなによ……鈴でいいわよ」

「あ……うん……わかったよ、鈴」

僕はニコリ笑みを浮かべて名前を呼ぶ

「わっ、わかればいいのよ!」

何か顔が赤いし反応が変だけど……ま、いつか

それから、みんなで食堂に行くと、クラスメイトの女子がいた

「……フリーパスが……」

「うっう」

「あゝあ……惜しかったなあ……」

といいながらとぼとぼと帰っていく

「……なんか……切なかったね」

「まあ……仕方ないさ……事故なんだし」

そして僕たちは夕食を食べた後一夏たちと別れて部屋に戻った

「……そういえば……」

胸元のネックレスの槍のペンダントを手にする

「……俺と同じ形の槍……使徒を倒す術……ってこれなのかな」

夢に出てきた少年……僕を知ってるようだったけど……

「……色々考えてたら眠くなってきたな……もう寝ようかな」

今日はそのままベッドに入って床についた

第八章 Ⅱ 嘆きのクラスメイトⅡ (後書き)

次回予告

謎のISを退けたシンジ

そして学園に広がる謎の噂

ついに現れる転校生・・・その正体は!?

次回 転校生

第九章 転校生 (前書き)

第2巻突入です

第九章 Ⅱ 転校生Ⅱ

クラス対抗戦から暫くたち、六月初頭の日曜日

今日の朝食は1人で食べていた。一夏は友達の家に行くとか言っていたなあ

「あら、今日はお1人ですね」

後ろからの声に振り向くとセシリアと鈴が立っていた

第九章 転校生

「うん、一夏は友達の家に行くなって言ってたから」

セシリアと鈴は対面に座ってセシリアは半熟卵のカルボナーラを、鈴はラーメンを食べ始める

「そうですか・・・まさか別に女性が・・・」

なにかぶつぶつ言い始めたセシリア

「あゝ・・・確か男友達に会って言ったよ、中学からの友達だつて」

「あ、まさか・・・あいつか」

「知ってるの？鈴」

「まあね・・・」

なんか・・・すごくうつとうしそうな表情になってる・・・いい思
い出がないのかな？

「つていうか・・・鈴ってラーメンしか食べてないよね？」

「ん？いいじゃん。好きなんだし」

まあ・・・好きならいいんだけど

「ん・・・そういえば今月ですわね・・・学年別個人トーナメント」

「あゝそういえばそうね」

学年別個人トーナメント。名前の通り学年別のトーナメントで一年だと120人ぐらいなので二学年、三学年と合わせるとかなりの規模になる。一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年はそこから訓練した状態での成長能力評価、三年はより具体的な実戦能力評価となってるらしい。特に三年の試合は大掛かりでIS関係の企業のスカウトマンとか各国の偉い人が見に来たりする。すごいんだなあ・・・この学園

「今回は全員参加ですから腕がなりますわね」

「そうねえ。ま、代表候補生の私たちが残ると思うけど」

「すごい自信だ・・・ま、僕も頑張ろう・・・うん」

「そーいえば、シンジ。この間の対抗戦だけ・・・あなたのIS、変化してたけど・・・二次形態移行なの？」

セカンド・シフト

「ああ・・・ごめん・・・僕もよくわからないんだ・・・」

「ふん・・・結構ヤバめな感じだったから気になってさ」

「ん・・・あまり無理はなさらないよう・・・気をつけてくださいませね、シンジさん」

「うん、ありがとう。セシリア」

それから、朝食を終えた僕らは一旦別れた。僕は今アリーナに行きISを稼働させている。ISは稼働時間がものをいうそうでセシリアは300時間以上稼働させてるとか。僕はまだ20時間ちよい・・・まだまだだなあ

ということではISを身に纏い空を飛んだり射撃の訓練をしている

「む・・・碇じゃないか。ISの実習か？」

その声に振り向くと篠ノ之さんがIS・打鉄うちがねを身に纏い立っていた

「あ、篠ノ之さんも？」

「うむ・・・私のISランクはCなので・・・少しでも錬度を高めておかないと」

ISランクは訓練機で出した最初の格付けらしく・・・因みに僕はランクAだった。けどこのランクはあまり関係ないと織斑先生が言ってたようなきもする

「よかつたら模擬戦する？いい訓練にもなるし」

僕は手をまえにかざし、マゴロク・E・ソードを展開した

「うむ。いいだろう」

篠ノ之さんが刀を鞘から抜く。鈍い鉄色くろがねいろが実体剣特有の鋭さを際立たせている

「では・・・参るっ！」

篠ノ之さんが袈裟気味に斬りかかってくる

「はあっ！」

僕はその斬撃をマゴロク・ソードで受け止め、鏝迫り合いになる

「はああああ！」

僕は力任せに剣をぐぐっと押し込んでいく

「中々に力強いな。だが、それだけだ！」

ギャリイイツと剣を受け流され胴を一闪される。

ガキインと音が鳴りATフィールドが発現する。耐久力は残り60%

「すごい威力だ・・・なるべく喰らわないようにしないと」

僕は構えたまま篠ノ之さんに突っ込んで斬りかかる。再び金属音が鳴り鏝迫り合いになる

「ほう・・・やるじゃないか」

「あはは・・・剣だけならこんなものだよ」

「む・・・銃火器を使えば確実に勝てると言いたげだな」

「あ・・・そういつわけじゃ・・・」

「隙あり！」

その言葉に反応するも二撃、三撃と喰らってしまい、ATフィールドが消滅。それでもなお続く斬撃を喰らい続けて・・・

「あ・・・」

僕のISのエネルギーシールドが0になった

「私の勝ちだな」

「うん……悔しいなあ」

「そうか」

相手のISが第2世代型と侮っていたのもあったからなあ……操縦者次第で変わるんだなあ

「ま、精進あるのみだ」

「そうだね……学年別のトーナメントもあるし……頑張らないとね」

「うむ……私もこれ以上の力で挑ませてもらうからな」

「僕はもう少し動かすけど……篠ノ之さんはどうする？」

「私は上がらせてもらうかな……ま、無理はするなよ？」

「うん」

そう言い残し篠ノ之さんは帰っていった。

「ん……なんか僕がこの世界に来てから前向きになった様な気がするなあ……まあ、いいことなんだろうけど」

僕は暫くISを動かしてから部屋に戻った。それからシャワーを浴びてから夕食を食べに食堂に向かった……と、そこで一夏と鈴に出くわした

「おっす、シンジ」

「あ、シンジじゃない」

「こんばんわ、2人とも」

「シンジは今日は何してたんだ？」

「ISの実習してたよ。稼働時間が足りないからね」

「ふ〜ん・・・ま、代表候補生と比べたら確実に足りないわね」

「だろうなあ・・・恐らく鈴もそれなりのセシリアと同じぐらい動かしてるだろうし・・・」

「ま、とにかく、夕飯に行こうぜ」

「丁度夕飯の時刻なのかぞろぞろと部屋から寮生が出てくる。まあ・・・しかし、格好がラフなことだ」

「あ、織斑君だ。やつほー」

「えええええ！？お、織斑君！？」

「のほ〜んとした子が一夏に擦り寄っている。大きめのパジャマをいつも着ていて、でかいナイトキャップがすぐにずり落ちては直している」

「やあ、おりむー」

「その愛称は決定なのか？」

「そうなのだよー、それよりかなりんと一緒に夕食しようよー、しんちゃんもいつしよに」

「……しんちゃんって……僕のこと？」

「そーだよー」

この世界でもあだ名はそれなんだね

「残念。シンジと一夏はあたしと夕飯するの」

「あー、りんりんだー。勇気が出そうだね」

「そ、その呼び方はやめてよー！」

あ、かなり拒否してる……なにか嫌な思い出でもあるんだろうか？

「ま、まあ……五人で夕食したらいいと思うんだけど……」

「む……よくないけど……いいわよ」

よくないけどいいって……矛盾してるなあ

「ところで……そのかなりんって子どもどこか行っちゃったぞ？」

「おお……。ほんとだいなーい」

そういえばいない……とおもったら、恥ずかしかったのか体を抱

くようにして廊下の先に消えていった

「あゝ、待って〜」

そしてのほほんとした女の子はぺたぺたとどこかに走っていった。
お、遅いなあ……

「ふうん……あんたらってモテんの？」

「はあ？どこ見てそう思ってたよ。男が2人いるってのが珍しい
だけだろ」

「僕もそう思うよ」

「ふうん。ま、いいけどね」

どうにも、言ってる言葉ほどよくなさそうな顔で早足で食堂に向か
う鈴を一夏と一緒に追いかける

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と碇君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話！」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで……」

相変わらずの騒がしさだ。思春期の女子で埋め尽くされた食堂は姦かしましい。

僕たちは奥のほうでスクラムを組んでる十人ほどの一団に気がついた

「なんか、すごい人がいっぱいだね」

「なんかあったのか？」

「トランプ占いでもやってんじやないの？」

いや……あの熱気は相当なものだと思っただけど……なんかどよめきまで起こっている

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」

「マジでー」

「うそー、きゃー、どっしょー!」

何かすごく面白いことでもあるんだろうか?きゃーきゃーと黄色い声が怒涛のように押し寄せてくる。まあ……楽しそうだしいいかな

「シンジ」

「あ、ゴメン」

鈴にせかされて前に進む。僕の今日の夕食は日替わりの鯖の煮付け定食。程よい甘辛そうな香りが食欲をそそる。一夏と鈴は同じく日替わりのチキンの香草焼き定食。これも香草の匂いが食欲をそそるいい香りである。

「」「いただきます」「」

「あ、この味噌汁美味しい」

「だよなあ、いいダシが出ててうまいな」

「うわ、一夏爺くさ」

「なっ、失礼な」

「だってさ、なんか一夏ってそういつこと考えてるとき目細めてるじゃん。なにあれ?思い馳せちゃってるわけ?」

「う、うるさいな・・・」

「あはは、2人とも仲がいいんだね」

そういうと、途端に鈴が真っ赤になって

「ば、馬鹿いつちやいけないわね！まったく」

あゝ・・・鈴って一夏のこと・・・

「仲が悪いよりはずっといいよ」

「ま、まあ、そうねっ」

それにしても・・・仕草や喋り方がアスカにそっくりだなあ・・・と鈴を眺めると訝しげに見られて

「あによ、なんか顔についてんの？」

「あ、いや、なんか喋り方とか知り合いに似てたからつい」

「ふん・・・どんな子なの？」

「頭が良くてすごく自信家ですごく負けず嫌いでプライドの高い子だったなあ」

「へえ、似てるわね」

「頭がいいところはわかんないけど」

「あんだね、一言多いのよ！」

今にも噛み付きそうな勢いで掴みかかってくる鈴

「ご、ごめん」

「ふん、まったく！」

「お前らも仲いいじゃんか」

一夏のその言葉に鈴はまた顔を真っ赤にさせて

「なな、何でそういう思考になるわけ！？バツカじゃないの！？」

おお・・・まさかアスカと同じ台詞を言うとは・・・姉妹みたいだ

「まあまあ・・・2人とも落ち着いて」

「元々あんたのせいでしょうが！」

服を掴んでゆさゆさと揺さぶる鈴。や、やめて・・・気持ち悪い・・・

「鈴・・・シンジの顔がやばそうだなぞ」

「あ、ご、ごめん」

「いや、大丈夫だよ」

あー気持ち悪かった

と、そこに3人の女子がやってきて

「あーっ!!!織斑君と碇君だ!」

「えっ!、うそ!?!どこ!?!」

「ねえねえ、あの噂ってほんと……もがっ!」

例の一団の中で僕たちの存在に気付いた女子がなだれ込んできた。噂ってなんだろう?その女子は取り押さえられたからわかんないけど。

「えっと……噂って何?」

「い、いや、なんでもないの。何でもないのよ。あははは……」

「バカ!秘密って行ったでしょうが!」

「いや、でも本人だし……」

と、そこで一夏が改めて問いかける

「んで、噂って?」

「う、うん!?!何のことかな!?!」

「ひ、人の噂も三六五日っていうよね!」

それを言うなら七五日だったような……

「な、何を言ってるのよミヨは！四九日だってば」

それは確か中陰だったような・・・

「「なにか隠してない??」」

一夏と僕は同時に問いかけた

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!?!」

なんか変わった3連コンボを決めて、即撤退した女子。その間二秒。速い。

「なに?またなんかやらかしたの?」

「僕は何がなんだか・・・」

「じゃ、一夏ね」

「なんで俺が問題児扱いなんだよ」

「問題児じゃないつもりなの?」

あはは・・・なんともいえないなあ

「ああ、お茶がうまい」

「逃げたわね」

「夏も結構自覚があるんだ」

「じゃ、そろそろ僕は行くよ」

「おう、また明日な、シンジ」

「また明日ね、シンジ」

僕は二人と別れて部屋に戻る

次の日

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子が賑やかに談笑していた。みんなカタ

ログを持って、あれやこれやと意見を交換している

「夏も色々聞かれてるみたい

「そういえば碇君のISスーツも見たことないね。どこのやつなの？」

「えっと・・・たしかイングリッド社に頼んで作ってもらったんだ。このデザイン好きなんだ。あはは・・・」

この世界に来てから暫くして織斑さんからスーツについて聞かれたのでとりあえずこのデザインを伝えてみたら入学前にこのISスーツが届いていた。まったく同じのスーツだったので驚いた記憶がある

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらと説明する山田先生はすごいと思う

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから・・・って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。・・・って、や、山ぴー？」

入学式から約二ヶ月。山田先生には愛称が8つほど付いていた。人
気あるんだなあ

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーさんは真面目ツ子だなあ」

「ま、まーさんって……」

「あれ？マヤマヤの方が良かった？マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

よっぽど嫌なのかな……口調がきつくなってる

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりま
したか？わかりましたね？」

クラス中から返事が返ってくるけど、信用にかける返事なのは聞いてわかつたのでこれからも山田先生のあだ名は増えていくんだろ
うなあ

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわついていた教室が静まり返りみんな席に着席する。いままでの織斑先生の教育の賜物だろう。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でかまわんだろう」

いや、下着姿は拙いんじゃないや・・・

因みに学校指定のISスーツはタンクトップとスパッツをくつつけたような感じの、至ってシンプルなもの。ではなぜわざわざ学校指定のものがあるのに各人で用意するかというとISは百人百通りの仕様へと変化するものなので早い内から自分のスタイルというのを確立するのが大事なのだそう。まあ・・・みんながみんな専用機をもらえるというわけじゃないのでどこまで個別のスーツが役に立つか解らないがそこはそれ花も恥じらう十代乙女の感性を優先させてるんだらうなあ。そういうえば、誰かが女はおしゃれの生き物だから・・・って言ってたな

序に言う専用機持ちの特権に『パーソナライズ』がある。これを行うと。IS展開時にスーツも同時に展開される。着替える手間が省けて楽になる。着ている服は一時的に素粒子の分解されてISのデータ領域に格納される。ISスーツ込みのフォームチェンジはエネルギーを消費するので普通はスーツを着たままISを展開するのがベター。・・・って織斑先生に聞いた

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ……ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え……」

「「ええええええええっ！？」」

うわ……声がすごい……まあ、この季節に転校生なんて珍しいからかもしれないな……にしても2人とも1組なんて……普通はわかるものじゃないだろうか？なんて考えてると教室のドアが開いた

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた2人の転校生を見て、ざわめきが止まる

それもそのはず

転校生の1人が……男子だったのだから

第九章 「転校生」(後書き)

次回予告

IS学園にやってきた二人の転校生

一夏は転校生の1人に平手打ちを受ける

波乱を巻き起こす転校生達

そしてシンジの行動は？

次回 実戦訓練とお弁当

この次もぜひったいみてね

第十章 〓 実戦訓練とお弁当 〓 (前書き)

PV70000越えにユニーク8000越え。感謝でございます

とりあえず、エヴァ関係の方々はいずれ出すかもしれません。ゲン
ドウは碇シンジ育成計画の時のテンションで(キラッ)
(

第十章 Ⅱ 実戦訓練とお弁当Ⅱ

第十章 実戦訓練とお弁当

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の1人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

あっけにとられたのは僕を含めてクラス全員がそうだった

「お、男……?」

「はい。此方に僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入を
……」

誰かが呟いた言葉に答えるシャルル。人なつっこそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色

のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。体格も華奢なスマートさにすらつと伸びた脚が格好いい。

お世辞じゃなく自然に『貴公子』が似合う感じだ。

「きゃ・・・・・・・・・・」

「はい？」

「きゃあああああつ！！！！！！」

うわっ！すごい声だ・・・・・・・・ソニックウェーブなのかな・・・・・・・・冗談抜きで。クラスの中心から歓喜の叫びはあつという間に伝播する

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！！！！」

そ、そこまで・・・・・・・・なんとというか・・・・・・・・元気だね・・・・・・・・このクラスの女子は

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生が場を鎮めようとぼやく・・・・・・・・表情がものすごく鬱陶しそうにしてるのは・・・・・・・・多分素だと思う

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わっていませんから！」
みんなが騒ぎすぎてもう1人の転校生がぼつんと立っていた。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長く下ろしている。綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象のそれ。そして眼帯。医療用じゃなくて普通の眼帯。戦争映画に出てくる大佐とかがしてそうなやつ。見えているほうの右目は真っ赤な赤色を宿しているが、その瞳は限りなく冷え切った感じだ。それを見ていると綾波を思い出す。

印象はまんま軍人。身長はシャルルと比べたら小さいのだけれど・
・全身から放たれる冷たく鋭い気配がまるで同じ背丈に見せているように見える。シャルルも男子の中では低いほうだけど、もう1人の転校生は女子の中でも若干背が低い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

転校生は何も言わない。普通ならさっきの騒ぎで少しは反応してそうなんだけど・
・少しも反応してない。視線だけは織斑先生に向いていたけど

「・・・・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生、ラウラにクラス一同ぱかんとする。対して異国の敬礼を向けられた織斑先生はさっきとはまた違った面倒くさそうな顔をする

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、脚を踵で合わせて背筋を伸ばしている・・・格好いいな

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・え・・・・・・・・それだけ？

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答。先生が泣きそうになってるよ・・・あ、一夏と目が合った

「！・・・貴様が・・・」

ラウラさんが一夏に歩み寄る。そして手を上げて・・・

あ・・・・・・・・っ

僕が目をつぶった瞬間

ガキイイイン！

え？一夏が叩かれた割には変な音が……

ラウラの手は一夏の目の前で止まっている。一夏とラウラの間には……僕のATフィールドが出ていた。どうやら無意識に出していたらしい……

「あ……」

一言。

一言言っただけでみんなや2人の転校生もがこっちを見てくる。……すごくやばい感じが……

「あー、んんっ……ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて織斑先生が行動を促す。みんなが少し腑に落ちなさそうな表情で動き出す。つと僕もすぐに行かないと。今日は第二アリーナの更衣室が空いてたっけ

「碇、織斑。デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう」

あ、そっか、同じ男子は僕らだけだしね

「君達が織斑君と碇君？初めまして、僕は……」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」
「そうだね。急ごつ」

説明すると同時に僕たちは行動を開始した。一夏はシャルル君の手をとって、僕はその前を走りながら更衣室に向かう

一夏が走りながら説明している・・・それにしてもシャルル君、落ち着かなさそうだな・・・やっぱり環境が違うからかな？

とりあえず・・・階段を下って一階に。階段を一段飛ばしで下りていく、ここで速度を落とすわけには行かないなぜなら・・・

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と碇君と一緒に！」

HRが終わって、早速各学年各クラスから情報先取のための女子達が駆け出してきている。飲まれたら最後、質問攻めにあって遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っている・・・僕は入学前に経験済みなのであの恐ろしさは二度と味わいたくない。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会えい出会えい！」

ここはいつから武家屋敷に・・・暴れん 將軍じゃあるまいに

「織斑君と碇君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃあああつ！見て見て！織斑君と転校生！手！手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

あはは・・・これからもちゃんとしたプレゼントをね

シャルル君が困ったように一夏に聞いている・・・確かに最初は僕も困ったなあ・・・慣れてしまったけどね・・・アハハ

「ま、なんにしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「僕は碓シンジ。シンジってよんでよ」

「うん、よろしく一夏、シンジ。僕のことシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

「わかったよ。シャルル」

僕達はなんとか校舎を出ることが出来た、足を止めることなく第二アリーナに向かう

「ふう・・・なんとか着いたね」

「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」

「そうだね」

僕は制服のボタンを外してロッカーのハンガーにかける

「わあっ!?!」

いきなりの声に振り向くと一夏とシャルルが何か言い合っている。
シャルルは顔が赤い・・・恥ずかしいのかな?・・・僕もだけど・・・
・アハハ

一夏達があーだこーだしているうちに僕はISスーツに着替えた

「じゃ、先に行くね」

・・・って言っても聞いてないか

グラウンドにはすでに織斑先生がいてみんなは姿勢よく並んでいる
僕もそそくさと自分の定位置にならぶ

「遅い!!!」

バシーン!

あゝあ・・・早くしないから・・・

「シンジ・・・てめー・・・先に行きやがって」

「一夏がだらだらしてるからだよ」

「ぐっ・・・言い返せん」

「随分とゆっくりでしたわね」

一夏の隣には最近一夏に構ってくるセシリアだった

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

一般的にISスーツは女性用しかなく見た目はワンピース水着やレオタードに近い。肌の露出が多いのは動きやすさを考慮してのことらしい。防御面に関しては、シールドバリアーがあるためスーツ面積が少なくても問題ない。僕ら男子のISスーツはスキューバダイビングの時に着る水着のように全身すっぽり型。僕はプラグスーツで慣れてるので問題ないけど、一夏達は結構着るのに時間がかかるらしい

「道が混んでいたんだよ」

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

今日のセシリアはなんか・・・棘があるような・・・？

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？そうでないと女性からはたかれそうになったりしませんよね」

うわぁ・・・なんて嫌味な・・・

「なに？アンタまたなんかやったの？」

・・・一夏の後ろのほうから声が・・・っていない？

「アンタね・・・いるわよ」

後ろから鈴に足を蹴られた・・・冗談だったのに

「冗談もほどほどにしなさいよね」

「此方の一夏さん。転校生の女子にはたかれそうになりましたの」

「はぁ！？アンタなんでそうバカなの！？」

・・・ああ・・・鈴のバカ

「安心しろ。バカはわたしの目の前にも二名いる」

おそるおそる振り向くセシリアと鈴。その視線の先には織斑先生が立っていた

バシーン！！！！

今日も出席簿がいい音を鳴らす

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はいっ！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合が入っていた

「くうっ……何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

……後ろや横から文句が聞こえてくる……鈴に至っては何か呪詛のような文句が……

どかつ！

「アンタね……しょうもないこと考えるんじゃないわよ……」
「いたた……なんでわかるんだろう……」

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな……
鳳！^{ファン}オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

うわ……完全なとばっちりだよ……

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

2人はしぶしぶ前に出た。鈴は「一夏のせい」なんて言っていたり・・・織斑先生がなにか2人に囁いてる・・・

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

なんか・・・2人ともすごいやる気が出てる・・・何を言ったんだろ？

因みに・・・「お前らがヤル気を出せば・・・アイツにいいところを見せられるぞ？」と言ったとか言わないとか

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は・・・」

キイイイン・・・

・・・何かが飛んでくる音がする・・・なにがとんで・・・

「ああああーっ！！ど、どいてくださいっ！」

ドカーン！

一夏にそれがぶつかって数メートル吹き飛ばされてごろごろと転がっていく

「一夏！だいじょうぶ……ぶ……」

と、そこにはISを展開している山田先生と先生の胸を鷲掴んでいる一夏がいた

「ちよつ……一夏……」

と、その時一夏が先生から体を離す。そして1秒前まで一夏の頭があったところにレーザー光が貫いた

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

そこには笑っているがその顔には怒りマークが浮いてるのが見てわかる。蒼穹の狙撃手ことセシリア・オルコット（大逆鱗バージョン）である……「こわぁ……」

となると……鈴木……かなり怒ってるんじゃない……

「あんだねえ……もうちよつと気をつけなさいよ」

……あれ？もつと怒ると思ったのに……珍しい

「オルコット……落ち着け」

ギンツと織斑先生が睨むと怒り顔でしぶしぶ大人しくなった

「んんっ・・・山田先生」

「は、はいっ」

慌てて体を起こして立ち上がる山田先生

「山田先生はこう見えて元代表候補生だからな」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし・・・」

んん・・・想像できない・・・そんなにすごい人だったとは・・・

「さて小娘ども・・・そろそろ始めるぞ」

「え？あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

あ・・・・・・2人からヤル気の炎が見える・・・気がするほどにヤル気を出している

「手加減はしませんわ!」

「いくわよー!!--!」

「い、行きます!!--!」

言葉こそいつもの山田先生だが、目つきは鋭く冷静なものに変わって行く

「……さて、今の間に……そうだな。ちようどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦性の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性チロール・チェンジ役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、一旦そこまでいい。……終わるぞ」

と、織斑先生の言葉で上を向けば、山田先生が射撃でセシリアを誘導しているところで、セシリアは鈴とぶつかり、そこにグレネードを投擲。爆発が起こって煙の中から二つの影が地面に落下した

「くっ、うっ……まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐつ……！」

「ぎぎぎぎつ……！」

「……なんか……どっちもどっちのような……」

結局……このいがみ合いは織斑先生に突っ込まれるまで続いた

「さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて織斑先生がみんなの意識を切り替える

「専用機持ちは、織斑、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰、碓だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが行うこと。碓は例外として各班のサポートに回ってもらう。いいな？では分かれる」

僕は一夏とシャルルに群がる女子を見ながら織斑先生の隣に行き……そして……怒号

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

この一声でみんなは素早く行動し、専用機持ちグループは二分とからず出来上がった

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

さすが……。織斑先生……。一喝だなあ

まあ……。あちらこちらからぼそぼそとお喋りが聞こえるのは気のせい……。にしておこう

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちがね}』か三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がいつもの3倍しつかり者に見える……。さっきの模擬戦で自信を取り戻した……。ようで

「さて……。そろそろ回って来い」

「あ、はい」

僕は駆け足で最初の班に向かった

1・セシリア班

「あぁっ……もう！なんでそこでこけるのですか!？」

「大変そうだね」

なかなかうまくいかない事にイライラしているセシリア

「あら、シンジさん。装着と起動はうまくいったのですが……歩行がなかなかうまくいかなくて……」

「はは、普段は浮いてるけど、今はP I E C切って歩行できるようにしてあるから……最初はこんなものだよ……ちょっと立ってみて」

「う、うん……」

「まずはゆっくり……そう……でだんだん早く……うん、上手上手」

最初こけていた女子も何とか歩けるようになっていった

「こんな感じでいいんじゃないかな？」

「わかりましたわ、ありがとうございます、シンジさん」

2・鈴

「ふーん……なかなかうまくいかない、はい、じゃ次」

「ここは・・・問題なさそうだね」

「あ、シンジ。この女子は優秀だから楽だね」

「あはは・・・そう」

「あ、ちょっといい？」

鈴が小声で話しかけてきた

「今日の昼・・・一緒に食べない？」

「え？・・・いいけど・・・？」

「じゃ、お昼に屋上ね」

そっいつて班に戻る鈴。心なしか嬉しそうで

「・・・次いくか」

3・一夏

「」「」
「お願いします!!!!」「」「」

「あ、あのな？どういふ状況がよくわからないんだが・・・」

「・・・どづしたの？」一夏

「あ、シンジ」

「みんな……ちゃんとしてないと……織斑先生の雷が落ちるかも」

「……あ、みんな作業に戻った……やっぱ怖いんだ」

「わりーな、シンジ」

「気にしなくていいよ、それより手伝いは大丈夫？」

「ああ、なんかヤル気になったし、大丈夫そうだ」

「そっか、じゃ、頑張ってね」

「おう」

4・シャルル

「……あれ？」

シャルル以外いない……

「みんななら……あそこ」

シャルルが指を差したほうを見ると……織斑先生に鍛えられている

「うわ……悲惨だ……あれ、一日でもきついんだよなあ」

「シンジは受けたことあるの？織斑先生の訓練」

「うん……一カ月だけ……おかげでそれなりに上達したよ」

「そっか……大変そうだね」

「大変……で済んだらいいほうかな」

「……そ、そうなんだ」

「あ、そろそろいなくなっちゃ」

「ん、わかったよ、がんばってね」

5・ラウラ

「……」

「……」

「……か、会話がない……」

「あ、碇君」

「うまく出来てる？」

「う、うん……なんとか……きゅっ」

「あ、大丈夫？」

「集中力が足らん・・・ヤル気があるのか？」

うわ・・・そんな言い方・・・

「ま、まあ・・・僕も最初はよくこけたし・・・そのたびに織斑先生に怒られたし・・・気にしないほうがいいよ」

「う、うん・・・ありがとう」

と、立ち上がって再び歩行を始める

「おい、貴様」

「え・・・僕？」

「教官に指導を受けたというのは本当か」

教官・・・・・・・・・・？・・・あ、織斑先生か

「うん、一カ月だけだけど」

「・・・・・・・・貴様、ここで戦え」

・・・・・・・・は？

「ちよつ・・・ダメだよ・・・授業中だし・・・織斑先生もいるし・・・また今度つてことで・・・ダメかな？」

「……仕方ない……今度出会ったら潰す」

……ラウラさん……怖いんですけど……

その後は各班、何とか滞りなく訓練を終えて……ISの片づけをして昼休みに入った

「……どういうことだ？」

「ん？」

昼休み、僕達は屋上にいた

僕は鈴に呼ばれたんだけど……そこには一夏にセシリア、篠ノ之さんにシャルルといった面子であとからきた鈴と話してみんなで食べることになったところでの篠ノ之さんの上の台詞

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルは転向してきたばっかで右も左もわからないだろうし」

「それはそうだが……」

ぐぬぬ……とほんとに言いそうな表情で持ち上げた拳を握り締める篠ノ之さん。その手には包みにくるんだ手作りの弁当が握られ

ていた……邪魔しちゃったかな？

「シンジ、はい、これ」

鈴から、タッパに入った酢豚とご飯を渡される

「え……いいの？」

「い、いいいいの。私の分もあるし」

「そっか、じゃ、いただきます」

タッパを開ける。ふわりと美味しそうな酢豚の香りが漂う。

「どれどれ……はむ……んぐんぐ……」

「どう？美味しい？」

「うん、美味しいよ」

「そっか……」

鈴は嬉しそうにお弁当を食べてる

「夏は篠ノ之さんに「はい、あーん」をしている。ほんとに仲良しだなあ

「シンジ」

「なに？」

振り向くと・・・酢豚の肉を箸で摘んだ鈴がいて

「は、はい、あ、あーん」

僕に食べさせようとする・・・さすがに食べないのは失礼すぎるので・・・パクリと食べる。でも・・・すごく恥ずかしい・・・

「お、おいしい・・・？」

「う、うん・・・」

恥ずかしくて顔を上げずに答える僕・・・情けないかも・・・

「ごほん・・・では・・・わたくしの手作りサンドイッチもどうぞ」

一夏がセシリアにサンドイッチを薦められている・・・一夏・・・嫌そうだな・・・

セシリアの作る料理は見た目はいいのだが味は壊滅的と・・・なんだか切ない料理である。・・・味見、してるのかな？・・・一夏ははっきり言えないみたいだし・・・

「あ、そのサンドイッチ頂き」

一夏の手からサンドイッチをとって一口食べる

・・・

あまっ！

何これ・・・なんたる・・・フルーツサンド・・・？でも・・・
ほのかにバニラの香りが・・・

「ちよっ・・・大丈夫！？シンジ！？」

「鈴さん！その台詞はいただけないですわ！」

「・・・セシリア・・・何入れたかはわかんないんだけど・・・
ものすごく甘いよ？」

「まさか・・・そんなはず」

パク

・・・

「そ、そんな・・・甘いですわ・・・」

「見た目も大事だけど・・・ちゃんとした材料と作り方をすればセ
シリアならすぐ作れるよ」

「はい・・・次こそはっ！」

ちゃんと作ってくれるといいんだけど……はは……

「ふーん……シンジってやさしいんだ？」

じーっとみてくる鈴

「そんなこと……ないよ」

「ま、いいけどね」

その後、一夏がシャルルに「男同士っていいよな!」と行って、女子トリオから白い目で見られ続けたのは……余談である

第十章 〓 実戦訓練とお弁当〓 (後書き)

次回予告

第三アリーナで自主練する一夏とシンジ

だがそこに現れるラウラ

そして2人に戦闘をけしかける

果たして2人は受けるのか？

次回 シュヴァルツェア・レーゲン 黒い雨

次回のISも、みんなで見てね

第十一章 〓 黒い雨（シユヴァルツェア・レーゲン）〓（前書き）

ユニーク9000越えました。ありがたやありがたや・・・

第十一章 黒い雨（シユヴァルツェア・レーゲン）

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんファンに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

「今僕はみんなと第三アリーナでISの実習をしている。今日は土曜日。IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は自由時間となっている。だが土曜日はアリーナを完全開放しているため、ほとんどの生徒が実習に使う。」

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね」

「うっ……、確かに『イグニッション・ブースト瞬時加速』も読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「一夏がシャルルの講義を真剣に聞いている……篠ノ之さんや鈴セシリアの時とは若干態度が違う」

「男子同士だからかな？」

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

今迄の一夏のコーチ達が不満を垂れ流している

僕はISを起動させて射撃武器の展開スピードを上げる練習をしている・・・今の展開スピードは0.7秒、格闘武器の展開スピードは0.2秒。まだまだ訓練が必要かも

そういえば・・・シャルルのISって普通のリヴァイヴじゃないとかいってたっけ

『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は『ラファール・リヴァイヴ』にあった4枚の多方向加速推進翼マルチ・スラスターが2枚になり、中央部分から二つの翼に分かれるようになっていて、より機動性と加速性が高くなっている。アーマー部分も従来のものより小さくシエイプアツプされているうえに、マルチウエポンラックとして大きなリアスカートがついている。そこにも小型の推進翼がついていて、主に姿勢制御に使っているとのこと。そして違いが顕著に現れているのが肩部分のアーマーで、本来付いている4枚の物理シールドが取り外されている。その代わりに左腕にシールドと一体化した腕部装甲が付けられていて、逆に右腕は射撃の邪魔にならないようにすっきりとしたスキンアーマーバネスロだけになっている。そして最大の特徴は拡張領域フレットの大きさで、基本装備をいくつか外して倍にしてある。そのおかげでどのような戦局にも対応できる・・・以上解説終わり

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

第十一章

シュヴァルツェア・レーゲン
黒い雨

アリーナがざわつき始めたのでその先に視線を移すと・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこにいたのは、もう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ポ
ーデヴィツヒ

転校初日以来、誰ともつるもうとしない。話すのも織斑先生だけと
いう・・・・・・・・いわゆるはみだし者な感じになっていた

「おい」

・・・・・・・・ラウラからのオープン・チャンネル開放回線で声が飛んでくる。なんたる・・・・・・・・

「なに？ポ－デヴィツヒさん」

「貴様との決着をつけに来た。私と戦え」

決着って……まだ一度も戦ってないんだけど……

「あの……ここじゃ危ないから……」

「関係ない」

「いやいなやラウラは漆黒のISを戦闘状態へとシフトさせる。瞬間、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた

「なっ」

ガキイーン!!!

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツ人は随分と沸点が低いんだね。ビールと同じで頭もホットなのか？」

「貴様……」

横から割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に61口径アサルトカノン『ガラム』を展開してラウラに向ける

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちほだかるとはな」

「未だに量産の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろうからね」

お互いに涼しい顔をした睨み合いが続く

ビーツ！！！！ビーツ！！！！ビーツ！！！！

「うえっ！？」

僕を含めたみんなが僕のISからの警報に驚き、みんなが僕を見る

『IS学園付近に未確認物体出現。各専用機持ちの生徒は速やかにグラウンドに集合して……あ、織斑先生……』

『未確認物体はすでに学園内に侵入している！専用機持ちは速やかに出撃し迎撃行動に移れ！そのほかの生徒はその場を動くな。では行動に移れ！』

アリーナにいた、一夏、セシリア、鈴、シャルル、ラウラ、そして僕はISを駆って外に飛び出す

第一アリーナのところに大きさは背は高くないが全長は10mほどの骸骨状の竜のような生物が走り回って目から光線を放っている

『くそっ……バリアーがあつて攻撃が通らない！』

『ここで何としても食い止めるのよ！』

数機のISが攻撃を加えるがATフィールドのせいで有効なダメージが与えられていない

『動きを止めますわ！』

セシリアが『スターライトMk?』の引き金を引き、敵性と思われる物体の進行方向を撃ち抜き侵攻を止める

『ここで、あたしね!』

鈴が物体の横に行き、衝撃砲『龍砲』を胴体に叩き込む。その物体は壁に叩きつけられる

『最後は、俺だああああ!!!』

一夏が瞬時加速で懐に飛び込み、零落白夜を発動、そのエネルギー刃が切りつける瞬間

ガキイイイン!!!!

セシリア、鈴、一夏の連携は上々のものだった。最後の一夏の攻撃が決まっていれば終わっていただろう。

『なっ……え、ATフィールド!?』

『まさか……使徒ですの!?』

エネルギー刃がATフィールドに止められている。それを確認した一夏、鈴、セシリア、シンジは使徒と判断した

『たたつきつちやえ!一夏!』

『うおおおっ!』

一夏が力を込めるも、フィールドは斬れない。

「くっ……出ない……」

掌に粒子が集まり回転したまま形を成さない。シンジはロンギヌスの槍を展開させようとするもなかなかでない

その時、使徒の首が曲がり顔を一夏に向ける、そして

キュオン！バシユウン！！！！

『ぐあああつ！！！！』

『一夏（さん）！！！！』

光線を受けた一夏が吹き飛ばされる。それを鈴とセシリアが受け止める。

「あ……コアを見つけた！」

頭部にあるコアを見つけたシンジは槍の展開をやめて両手にプログ・ダガーを展開する

『ふん、このようなもの、私1人で！』

ラウラは肩の実弾砲を放ち、そのまま実弾が着弾した頭部にプラスマ手刀を叩き込む……が

ガギィィィ！！！！

『ちっ……厄介なバリアーだな』

ラウラは毒づきながら放たれる光線をかわしながら離れる

「はあああつ！！！」

光線を放った隙に僕はプログ・ダガーを突き出し、突撃するもATフィールドに阻まれる

「ぜえええい！」

突き立てたダガーを振り下ろす。と、フィールドが半分に切れて消滅する

「いつけええええ！！！！」

ダガーをコアに突き立てる。コアがひび割れ……

ドオオオオン！！！！！

十字架クロスの光が立ち上り強烈な爆音が響く

『っ……シンジはどうなった！！！』

一夏が叫ぶや否や、光の中からシンジが出てきた

「うはあ……びっくりした」

『大丈夫？シンジ』

「ん・・・大丈夫」

シャルルと開放通信で話していると、織斑先生から通信が入り

『碇、目標は？』

「はい、殲滅しました」

『うむ、では帰投後、碇は私のところまで来い。ほかのものは帰投後解散だ。以上』

「だってさ、じゃ、僕は先に行くね」

『おう、わかった』

ISの起動を解除し職員室に向かった

第十一章 〓 黒い雨（シュヴァルツェア・レーゲン）〓（後書き）

次回予告

無事第3使徒を倒したシンジ

その裏でシンジに憎しみを募らせるラウラ

鈴とセシリアに襲い掛かる魔の手

そして始まるトーナメント

次回 ブルー・デイズ/レッド・スイッチ

孤独な少女が向ける矛先は誰に向かうのか

第十二章 「ブルー・デイズ/レッド・スイッチ」(前書き)

ユニーク100000達成です

みなさま見てくださってありがとうございます

これからもよろしくです

第十二章 「ブルー・デイズ/レッド・スイッチ」

「……なるほど、今回は見たことはない」と

「はい」

職員室の一室でシンジは織斑先生に先ほどの戦闘の報告を行っていた

「ふむ……だが使徒であることは間違いないだろう……コアがあり、バリアまであつてはな……それに目的もわからん……何を狙ってきているのか……」

「そうですね」

「しかし……私でも倒せない生物をお前が倒せるのは……些か癪に障るな」

先生がじつと僕を見てくる

「へっ！？ま、まあ、ATフィールドがなければ先生でも倒せますよ」

「まあ、私は出張らないからやり合う機会もないがな」

なぜか乾いた笑いしか出てこない……はあ

「私としても、お前には一目置いている。使徒はもちろんIS同士の戦闘でもそうそう落ちたりはしないからな」

「はぁ・・・といつてもそんなに戦闘回数はこなしてないですけど・・・」

「ほう、そうなのか？」

「はい」

まあ、僕をかってくれるのは悪い気はしないかな・・・ふふ

「まあいい。これからも精進しろ。私からは以上だ、行っていいぞ」

「はい、失礼しました」

第十二章 ブルー・デイズノレッド・スイッチ

僕は織斑先生に一礼して職員室を後にした

廊下を歩いていると一夏と一夏の左腕を掴んでいるセシリア、右腕を掴んでいる篠ノ之さんを見つけた

「一夏、夕飯？」

「おう。つかこれ何とかしてくれないか？」

「……………ごめん、僕には無理」

なにせセシリアと篠ノ之さんからの殺気とプレッシャーが半端なく怖い

「んだよ……冷たい奴だなあ」

「自分の命と引き換えには出来ないよ」

「なんだそりゃ。ま、いいか。じゃ、一緒に夕飯行こうぜ」

「それぐらいなら」

セシリアと篠ノ之さんが少し不満そうだったのが見えたけど、頷いた

食堂に着いて、僕は、焼き魚定食を選んだ。因みに魚は鯖。一夏も同じのを選んでいた

今日の鯖もふっくらとしてすごく美味しかった

一夏は終始、心ここにあらずな感じだったけど……大丈夫かな？

S i d e ラウラ

暗い。暗い闇の中にそれはいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれたときにはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見るときが、この少女は違う。闇の中で育まれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりがない

光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っている

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味も持たないことを理解している。

けれど、唯一例外はある。教官に・・・織斑千冬に呼ばれるときだけは、その響きが特別な意味を持っている気がして、そのたびにわずかな心の高揚を感じていた。

あの人の存在が・・・・・・・・その強さが、私の目標であり、存在理由・・・・・・・・

それは一条の光のようであった。

出会ったときに一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。心が揺れた。体が熱くなった。そして願った。

ああ、こうなりたい…………と。

これに、私はなりたいた。

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。

自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。

唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在。

ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない。

織斑一夏…………。教官に汚点を残させた張本人…………。

あの男の存在を認めはしない。

排除する。どのような手段を使っても……

そしてもう一人。

碇シンジ。

あの教官に教えを受けた男。

それは私一人でいい……二人も要らない

あの男も排除する……。完璧な教官を取り戻すため

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かに瞼を閉じる。闇と一体になりながら少女は夢のない眠りへと沈んでいった

「そ、それは本当ですよ!?!」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、僕と一夏とシャルルは教室に向かう途中に廊下まで聞こえる声に、顔を合わせて驚いていた

「なんだ？」

「さあ？」

「とりあえず、いつてみようよ」

教室に入ると、数人の女子にが集まっており、その中にはセシリアと鈴も混じっていた

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か碓君と交際でき……」

「俺達がどうしたって？」

「「「きゃああつ!?!」」」

わ……一夏が声をかけたら悲鳴が返ってきた。なにか拙い話題だったんだろうか??

「で、何の話だったんだ?俺とシンジの名前が出てたみたいけど」

「う、うん?そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

セシリアと鈴はあははうふふと言いながら視線と話を逸らそうとしていた。一夏に聞かれたくない話なのかな

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！またねシンジ！」

「あ・・・うん、またね、鈴」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

二人ともよそよそしい態度でその場を離れる。そして集まっていた女子もわらわらと自分の席に戻る

「なんなんだ？」

「「さあ・・・？」「」

おそらく元凶の篠ノ之さんが恐ろしく深刻な顔をしていたのには、気付かなかった僕達だった

「もー、なんでこんなにトイレが遠いんだよ・・・」

休み時間、僕は学園に三箇所しかないトイレのうちの一つからの帰る途中だった。

前に、一夏がトイレから帰る途中に『廊下を走るな！』とお叱りを

受けたとぼやいていたのを思い出す。最初はまさか・・・と思って
いたが、体験してみると・・・僕もお叱りを受けた。

今度、織斑先生に相談してみようかな・・・

「なぜこんなところで教師など!」

「やれやれ・・・」

わわ・・・なにか話し声が・・・そつと覗いて見ると、声の主は織
斑先生と・・・ボーデヴィツヒさん。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

言い争い・・・?確かボーデヴィツヒさんは織斑先生を慕ってたは
ず・・・

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

・・・どうやら・・・織斑先生の仕事についてみたい・・・
それにしても・・・無口無表情なボーデヴィツヒさんがここまで熱
くなるなんて・・・よっほどのことなんだな

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなた
の能力は半分も生かされません」

「ほっ」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません
ん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど……」

「……そこまでしておけよ、小娘」

「っ……！」

う……凄みが増した先生の声……すごく怖い……ボーデヴィツヒさんも竦んでしまい、言葉が出なかった

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間とは恐れ入る」

「わ、私は……」

……声が震えてる……その感情は恐怖。圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖

「それに……なかなか見込みのある奴もいるからな」

……一夏だろうか？

「……碇……シンジ……ですか？」

……なんで僕？

「アイツは普段はそうでもないが、いざとなるとなかなかどうして・・・気概のある奴だ」

楽しそうに話す先生。それとは裏腹に無表情なボーデヴィツヒさん

「さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ」

わ・・・こっちにくる。僕は身をかがめた。彼女が通り過ぎる瞬間
みた表情は・・・憎しみに顔を歪ませていた・・・

「その男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「なっ・・・何でそうなるんですか！千冬さ・・・」

「ごちんっ！」

「いつ・・・!？」

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

因みに学校外時間では織斑先生のことを千冬さんと呼んでいる

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初
戦敗退だぞ勤勉さを忘れるな」

「ええっ!？さつき褒めてたじゃ・・・」

「忘れるなよ?」

「・・・・・・・・はい、先生」

「よろしい」

僕は教室に向かって、早歩き・・・・ちよつとかつこ悪い

「碇・・・・廊下を走るな・・・・と言わん。バレないように走れ」

「は、はい！」

僕は一気に駆け出した

「「あ」「

二人そろって間の抜けた声を出してしまう。時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る。どうやらどちらも狙っているのは優勝らしい

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくつても悪くないわね」

「あら、めずらしく意見が一致しましたわ。どちらのほうがより強くより優雅であるか、この場ではつきりさせましようではありませんか」

二人ともメインウエポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では……」

キュウンッ!!

いきなり声をさえぎって超音速の砲弾が飛来する。

「!?!?」

緊急回避の後、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体が佇んでいた。

機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』登録操縦者……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情には欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた

「……どういつつもり？いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

連結した『双天牙月』そうてんがげつを肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる

「中国の『甲龍』カウリウにイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……
……ふん、データでみたときのほうがまだ強そうではあったな」

その挑発的な物言いに、鈴とセシリアの両方が口元を引き攣らせる

「何？やるの？わざわざドイツくん dari からやってきてボコられたいなんて大したマゾっぶりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、此方の方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラの全てを見下すかのような視線に強い不快感を抱いた二人はそれでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見出そうとする

「はっ……。二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くら
いしか脳のない国と古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ！

何かが切れる音がして、二人は装備の最終安全装置をはずす

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラブがお望みな訳ね。……セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが……」

「はっ！二人がかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬に熱を上げる様なメスに、この私が負けるものか」

「……今なんていった？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にはない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

二人の怒りのメーターはすでに振り切っている。得物を握り締める手にきつく力を込める二人。それを冷やかな視線で流すと、ラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る

「とつとと来い」

「「上等！」「」

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるアリーナは……」

「第三アリーナだ」

「」「わあっ！」「」

廊下で一夏とシャルルと並んで歩いていたらけれど、いきなり、声をかけられたので揃って声を上げてしまった

その声の主は篠ノ之さん

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「あはは、ごめん」

「ごめんなさい、いきなりのごとでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

礼儀正しく頭を下げるシャルルにさすがの篠ノ之さんもその氣勢が削がれてしまう。んんつと咳払いをしながら僕と一夏の間割り込んでくる

「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

それは非常に助かる。模擬戦を数えるぐらいしかしていない僕にとつては嬉しい情報だ

僕達がアリーナに向かっていると、近づくに連れてなにやら慌しい様子が伝わってきた

「なんだ？」

「何かあったのかな？こっちで先に様子見ていく？」

三人が観客席に行ったのにも気付かず、僕は嫌な予感に冷や汗を感じていた。頭に浮かぶのはボーデヴィツヒさんそして・・・浮かぶあの台詞

『この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません！』

この言葉通りに彼女が行動していたなら・・・やばい！

僕はピットに駆け出していた

Side 一夏

俺はシャルルの提案で観客席に向かう俺と箒とシャルル。普通にピットに入るよりも早く様子を見る事が出来ると思っただからだ

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が・・・」

ドゴオンッ！

「「「！？」」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。

「鈴！セシリア！」

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージから此方に爆発が及ぶことはないが、同時にこちら側の声も聞こえない

二人は苦い表情のまま爆発の中心部へと視線を向ける。そこにいたのは漆黒のIS『シユヴァルツエア・レーゲン』を駆るラウラの姿だった。

よくみると鈴とセシリアのISはかなりのダメージを受けている。機体はところどころが損傷し、ISアーマーの一部は完全に失われている。ラウラも無傷とまではいかないが、それでも二人と比較してかなり軽微な損傷だった。

「な、何をしているんだ？・・・お、おい！」

此方からの声が届かないので仕方ないが、鈴とセシリアは軽く目配せの後ラウラへと向かっていく。どうやら二対一の模擬戦のようだが、追い込まれているのは有利なはずの鈴とセシリアだった。

「くらえっ！」

ジャカツ！と鈴のIS『甲龍』の両肩が開く。そこに搭載されている第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲『龍砲』の最大出力攻撃である。訓練機のアーマーならおそらく一撃で沈められるであろうその砲撃を、ラウラは回避しようとしなない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな
衝撃砲の不可視の弾丸がラウラを指す………が、その攻撃
はいくら待っても届くことはなかった。

「くっ！まさかこうまで相性が悪いだなんて………！」

何かバリアーのようなものでも展開しているのだろうか。ラウラは
右手を突き出しただけで衝撃砲を無効化しすぐさま攻撃へと転じる。

肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴のISへと飛翔する。
それは本体とワイヤーで接続されているためか、複雑な軌道を描い
て迎撃射撃をぐり抜け、鈴の右足を捕らえる。ブレードとワイヤ
ーの両方の特性を持つ武器のようだった

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のため射撃を行うセシリア。同時にビットを射出、ラウラ
へと向かわせる。

「ふん………。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならい
ざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代兵器とは笑わせる」

セシリアの精密な狙撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、ラウラはまたさっきと同様に腕を突き出す。今度は左右同時、交差させた腕の先では目に見えない何かに掴まえられたかのようにビットがその動きを停止させていた

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙い澄ました狙撃は、ラウラの大型カノンによる砲撃で相殺される。すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリアを、ラウラは先刻掴まえた鈴をぶつけて阻害する。ワイヤーによる振り子の原理。原始的ではあるが効果的な攻撃だった

「きゃああっ!!！」

ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩した二人へとラウラが突撃を仕掛ける。その速度は弾丸並みで、間合いをわずか一秒で詰めた

「イクニッション・ブリスト
『瞬時加速』……!!！」

見間違えるはずがない。それは俺の十八番、格闘特化の技能だ

だが、格闘戦なら鈴にも分がある。それこそあの『双天牙月』の回転連撃を行うものと思っていた俺は、その連結を解いた鈴に驚いてしまう。

しかし、その理由はすぐにわかった。ラウラの両手首に装着した袖のようなパーツから超高熱のプラズマ刃が展開。左右同時に鈴へと

襲い掛かる

「このっ……！！」

前進し続けるラウラに後退で距離を置きながら鈴は刃を幾度となく凌ぐ。うまくアリーナの形状に合わせた機動で追い詰められないようにしている鈴だったが、再びラウラのワイヤーブレードが襲い掛かってきた。しかも今度は両肩だけでなく腰部左右に取り付けられたもの合わせて計六つ、それが三次元躍動で接近してくると同時にプラズマ手刀の猛攻なのだ。いくら格闘戦に慣れている鈴でもそれから全てを捌くには何度が高すぎる。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を射出する寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した

「もらった！」

「！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体制を崩した鈴に、ラウラがプラズマ手刀を懐へと突き刺す

「させませんわ！」

間一髪のところ、鈴とラウラの間に割り切ったセシリアは、『スタートライト Mk?』を盾に使って必殺の一撃を逸らす。同時にウエスト・アーマーに装着された弾頭型^{ミサイル}ビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガアアアアッ!!!

半ば自殺行為である接近戦でのミサイル攻撃。その爆発は鈴とセシリアをも巻き込み、二人は床に叩きつけられた

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが……」

セシリアの言葉が止まる

「……………」

煙が晴れ、そこに佇んでいたのはラウラだった。至近距離での大爆発ですら、ダメージはほとんど無かったかのように宙に浮いている

「終わりか？ならば……私の番だ」

言つと同時に瞬時加速で地上に移動。鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を当てる

さらにワイヤーブレードが飛ばされ二人の体を捕まえてラウラの元に手繰り寄せる。そこからはただただ一方的な暴虐が始まった

「ああああっ!!!」

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳が叩き込まれる。シールドエネ
ルギーはあっという間に減って機体維持警告域を超え、操縦者生命
危険域へと到達するこれ以上ダメージが増加しISが強制解除され
ることがあれば、その時は冗談ではなく生命に関わる。

しかし、ラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴とセシリアを
殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく

普段と変わらないラウラの表情が確かな愉悦に歪めたのを見た瞬間、
俺の中で何かのゲージが振り切れた

その瞬間

ガキイイイン!!!

俺はその音にはっとする。鈴とセシリアには拳は届いておらず、二
人とラウラの間にはラウラの拳が触れているためか虹色の障壁が見
える

ああ・・・あいつか・・・

俺はその姿を探し・・・見つける

二人の前に降り立つ

シンジを

Side シンジ

「……何をしているのかな？ボーデヴィツヒさん」

僕は……静かに言葉を紡ぐ。そう、この感情は……前に父さんに向けたときと同じかもしれない

「……模擬戦だが？」

「模擬戦の範疇を超えているよ？」

悪びれもしないこの女に苛立ちが募る

「ふん……こんな奴らが代表候補生と思うだけで虫唾が走る」

「……模擬戦の意味も理解できないバカよりはましだよ」

「……ここで決着をつけるか？貴様の死で」

「……フフッ」

「？」

「フフ……ハハハッ」

「貴様！何がおかしい！」

なんたる・・・今日はすごく酷い気分になれる・・・

「君が僕を傷つけるなんて・・・万に一つも無いよ」

どこかの悪役が言っていたっけ

ボーデヴィツヒが口元をゆがめ・・・消える。そして後ろから声がする

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。・・・消えろ」

手を振り上げればプラズマ手刀を展開。それを振り下ろす・・・が

ガキイン!!!

頭に振り下ろした手刀はATフィールドに阻まれる

「あれ？消せなかったね・・・あれだけ言ったのに消せないなんて・・・君こそ代表候補生止めたほうがいいんじゃない？」

嫌味たつぷりに言い放つ僕にラウラが表情をかえた

「貴様！貴様だけは殺す！」

「そういう物騒な言葉慎め。馬鹿者」

そこに現れたのは我らが担任織斑先生

「碓もあまりボーデヴィツヒをいじめてやるな・・・」

ぐくぐくと撫でられる・・・ちよっ、はずかしい!!!!

「この決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「・・・教官がそう仰るなら」

素直に頷きラウラはISの装着状態を解除する

「碓もそれでいいな・・・?」

「・・・はい」

それを確認した織斑先生は改めてアリーナ内の生徒に向けて言った

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散!」

パンツ!

こうして、一連の騒ぎは織斑先生の拍手で終息した

第十二章 「ブルー・デイズノレッド・スイッチ」(後書き)

次回予告

ボロボロになつた鈴とセシリア

その姿を見て心を痛めるシンジ

だが、休む間もなく、トーナメントがタッグ戦になる

この変化にシンジは、ラウラは。

次回 学年別トーナメント

孤独な少女の見据える未来は光か闇か

第十三章 「学年別トーナメント」(前書き)

いよいよトーナメント開催です

一度投稿してしまいましたが、書き足しました

第十三章 「学年別トーナメント」

織斑先生のＩＳでの私闘禁止令発言から少し後のシンジの部屋

「ああ・・・どうしよう・・・勢いとはいえ、あんなことを・・・」

あんなこととは、ラウラへの暴言である。一時の感情に流されて吐いてしまった自分に頂垂れる

「終わってから・・・謝ろう」

確実に報復されるかも・・・なんて考えていると

「邪魔するぞ、碇」

第十三章 学年別トーナメント

織斑先生がやってきた。なんだろ？

「ラウラがすまなかったな・・・私からも言っておいた」

「・・・僕としては、二人に謝って欲しいですが・・・」

そう。僕は被害者じゃないからいい。実害をこつむったのは鈴とセシリアだ

「そうだ、その二人の容態だが、命に別状はない。暫く休んだら、帰っても大丈夫だろう」

「そうですね・・・よかった」

思わず安堵のため息を漏らしてしまう

「どうやらボーデヴィツヒは私の教え子は自分だけでいいと思っているようだ。優秀が故の凝り固まった考えだが」

「そんな・・・」

「・・・もし、アイツと当たったときは、手加減無しで叩きのめしてやってくれ。まあ、教師がこのようなことを言うのもなんだがな」

「・・・解りました」

「ふむ、保健室に見舞いに行つてやるといい。鳳ファンも喜ぶだろう」

鈴・・・が？なんで鈴だけ？

「はい」

とりあえず僕は保健室に向かった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏とシャルルと保健室に行くと、鈴とセシリアがむすーっとした顔で視線をあらぬ方向に向けていた。シャルルは飲み物を買ってくるといって、席を外している

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「・・・・・・・・あの状態からどうやって勝つつもりだったんだろうか

別に感謝されたくて乱入したわけじゃないし・・・・・・・・いいんだけど

「おいおい・・・・・・・・助けてもらってその言い方は無いだろう？」

「あはは、まあ・・・・・・・・怪我が大したことじゃなくてよかったよ・・・

」

「こんなの怪我のうちに入らな・・・・・・・・いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味・・・・・・・・つう
つうっ！」

無理しちゃってる・・・・・・・・バカな考えは持たないほうが・・・

「バカってなによバカって！バカ！」

「シンジさんこそ大バカですわ！」

う・・・声に出してないのに反撃を受けた。十代女子にはテレパシ
ーでも備わっているのだろうか？

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入ってきたとき何か
言っていたけどちゃんと聞き取れなかった

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ここここ
これだから欧州人ヨーロッパって困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささ
か気分を害しますわねっ！」

二人ともいきなり饒舌になってまくし立て始めた。どうしたんだろ
・・・顔も赤いし

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきますしょう！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取ってペッ
トボトルの口を開けるなりごくごくくと飲み干す。

「まあ……先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、暫く休んだら……」

ドドドドドドドドドドドツ……………

「な、なんだ？何の音だ？」

一夏の言葉通り何やら地鳴りが……しかもだんだんと近づいてきている……何……？

ドカーン！ と保健室のドアが吹き飛ぶ。比喻じゃなくて、実際に吹き飛んだ。初めてみたよ……ドアが吹き飛ぶの

「織斑君！」

「デュノア君！」

「碓君！」

入ってきた、というよりは雪崩れ込んできた女子数十名。保健室は瞬く間にぎゅうぎゅうづめになった。そして僕達を見つけるやいなや、一斉に取り囲んで、競うように手を伸ばしてきたのである……怖すぎるよ……

「う、うわあっ！」

「な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「『『『これ！』『』『』」

状況が飲み込めない僕達にずっと女子生徒一同が出してきたのは学園内の緊急告知文が書かれた申込書。

「え〜つと……？」今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うために、二人一組での参加必須とする。なおペアが出来なかった場合は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは……『』」

「ああ、そこまででいいから！とにかくっ！」

一夏が読んでいたのを途中で止めたところでまた一斉に伸びてくる手。こ、怖っ！！

「私と組もう！織斑君！」

「私と組んで！デュノア君！」

「私と一緒になろう！碓君！」

僕だけニュアンスが変だよ！

「え、えつと……」

シャルルが困った表情でおろおろしているところに

「悪いな。俺はシャルルと組むからあきらめてくれ！」
なんだって!?

「まあ、そういつことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士ってのも絵になるし……」

「……嫌な予感しかない……逃げよう」

そろりそろりと忍び足で歩いていると肩を掴まれ

「……碓君」「」

「え……あ、あははは……」

その日、保健室で僕は天国と地獄を見た……様な気がした
とりあえず、丁重に断ってみんなを帰した。けれど僕はボロボロに
なっていた

「バカねえシンジ、あ、あたしと組むって言ったら済んだことなの
に」

「そうですね、一夏さんもわたくしと組めば……」

「ダメですよ」

いきなりの声に振り向くと山田先生が立っていた

「お二人のISの状態をさつき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可出来ません」

「うっ、ぐっ……！わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退いたします……」

やっぱり、そうなるだろうね……

「解ってくれて先生嬉しいです。ISに」無理をさせるとそのツケはいつか自分が支払うことになりますからね。肝心なところでチャンスを失うのは、とても残念なことです。あなたたちにはそうなってほしくありません」

「はい……」

「わかっていますわ……」

これはたしか、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だっただけ

『ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、より進化した状態へ自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不安定な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、

それらは逆に平常時での稼動に悪影響を及ぼす場合がある』・・・
だったね

「でも・・・なんでポーデヴィツヒさんと戦うことになったの？」

「え、いや、それは・・・」

「ま、まあ、なんと言いますか・・・女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「そう、なんだ」

すごく言いにくそうな二人に、これ以上聞くのは止めよう

「ああ、もしかしてシンジや一夏のことを・・・」

「あああっ！デュノアはひとこと多いわねえ！」

「そ、そうですね！まったくです！おほほほほ！」

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさつきから人がくせに体を動かさすぎだぞ。ほれ」

一夏が鈴とセシリアの肩をつつく

「」「」「びびっ」

あーあ・・・案の定二人は痛みで変な声を上げて凍りついた

「.....」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

「い、い、いちかぁ・・・・・・・・あんたねえ・・・・・・・・」

「あ、あと、で・・・・・・・・おぼえてらっしゃい・・・・・・・・」

うわぁ・・・・・・・・ぼくはしーらないと

「じゃ、僕は部屋に戻るね」

「うん」

「また明日な」

保健室を後にして、部屋に戻る途中の廊下で珍しい人に会った

「お、碓。最近よく会うな」

「織斑先生。そうですね」

僕達はとりあえず談話室に移動した

「ところで・・・・・・・・トーナメントのペアは決まったか？」

「いえ・・・・・・・・とりあえず、くじに頼ってみます」

「そうか・・・・・・・・」

「……ボーデヴィツヒさんはなんで一夏や僕に敵意を向け
てくるんでしょうか……」

僕は気になっていた事を聞いてみた

「お前の場合はさっき話した通りだ。私の訓練を受け、かつ優秀な
のはいままであいつだけだったからな。お前が現れたことによって
その場所が奪われそうになっていると思っ込んでいるのが原因だろ
う」

「……そうなんですか……」

「一夏の場合とはある事情で私がモンド・グロツソという大会の二
連覇が成らなかった原因が一夏にあると思っっているんだろう」

「……でも……事情があっただけでしょう？」

「アイツも小意地だからな……どうせ、私は完璧ではない。
……とか思っっているんだろう。それに汚点をつけた一夏が許せん
だろう」

「……もしかして……ボーデヴィツヒさんにとって、
先生はたった一人の憧れの人なのかも……」

「……もし、トーナメントで当たったら……あいつを頼む……」

「なんか……負けられなくなりましたね……」

「ふふ、がんばれよ」

ぐしぐしと頭を撫でられる

「あの・・・恥ずかしいんですけど?」

「気にするな、私もだ」

なんとなく先生を見る。そのあまりみない嬉しそうなようで気恥ずかしそうな表情に少し見とれてしまった

「さて、そろそろ私は行こうか」

「は、はい・・・先生！トーナメント、優勝目指しますよ」

「その意気だ。楽しみにしているぞ」

先生は歩きながら手を上げる

僕は部屋に戻る

傍に闇のように佇む少女の存在に気付かずに

S i d e ラウラ

私は廊下を歩いていると・・・教官を見つけた

声をかけようとするど……教官は私の標的、碇シンジに声をかけた
談話室に行くようだ。気になるので尾行する

話し込んでいる教官の表情は硬く、時折困った表情を見せる、碇も
同様だ

「……さすがに内容までは聞こえんか」

と、教官が碇の頭を撫でている

「っ……！！」

あんな教官の表情はあるとき以来だ

そして二人は別れた。私は一步も動けなかった

どうやら織斑一夏より先に消さなければなら無いようだ……

碇シンジ……

あの男は教官を変えてしまう……それだけは許されない

必ず……トーナメントで存在を抹消する！

S i d e シンジ

学年別トーナメント当日

「うわぁ・・・すごいなあ」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る

そこには、各国政府関係者、研究書員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた

そういえばシャルルが言ってたな・・・

『三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年は今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ』

・・・トーナメントはクラス対抗戦よりすごいんだなあ

「碓君、遅くなりました」

「あ、大丈夫。今来たところだから」

トーナメントのペアはくじで同じクラスの鷹月静寐たかつきしずねさんに決まった

「どうやら相手が決まったみたいですね」

「うん、誰だろうね」

モニターがトーナメント表に切り替わった。そして対戦相手を見て

驚いた

一回戦の相手はボーデヴィツヒさんと篠ノ之さんのペアだった

「じゃ、作戦通り、鷹月さんは篠ノ之さんを抑えてて。出来るなら倒しちゃってもいいから」

「わかりました」

「あ、あと……こつちが二人でボーデヴィツヒさんだけが残った場合はてをださないでほしいんだ」

「それは……足手まといということですか？」

「そうじゃないんだけど……ボーデヴィツヒさんとは一対一でやりたいんだ」

「…….…….わかりました」

笑顔で頷く鷹月さん

「じゃ、いじりー」

「一戦目で当たるとはな」

「ボーデヴィツヒさん……僕はあなたを倒すよ」

「やってみるがいい……」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一……開始

「貴様は教官のために抹消する！」

ラウラは試合開始と同時にイグニッション・ブースト瞬時加速を行う。

シンジはパレット・ライフルを展開。弾幕を張って牽制する別のところで鷹月さんと篠ノ之さんのバトルが始まった

パレット・ライフルの弾幕を強引に突っ込んで突破しラウラはプラズマ手刀を展開。叩き込む

「させるか！」

シンジはバックし手刀をかわしてマゴロク・ソードを展開。ラウラと切り結ぶ

「貴様は織斑一夏以上に危険だ！だから……殺す！」

ラウラのISから六つのワイヤーブレードが射出される。その全てが三次元躍動し襲い掛かってくる

シンジはそれを巧みに回避して時折、IS専用拳銃で牽制する。

と、ラウラの肩の大型レール砲ご火を噴く。それをかわしながら拳銃を格納。今度はポジットロン・ライフルを展開。正確にラウラを狙撃する

「ふん、やるじゃないか。だが……」

ラウラが腕をぐいと引っ張るように上げる……シンジはわけもわからず

ドガアアッ！

「わあああつ！」

「きやあああつ！」

突如後ろからの衝撃に体勢を崩した。ラウラは事前に鷹月さんを捕まえシンジにぶつけたのだ

「だいじょうぶ！？」

「は、はい！」

「じゃ、作戦続行で！」

再び鷹月さんは篠ノ之さんに、シンジはラウラに向かう

「ふん……まだまだだ」

ワイヤーブレードの攻撃を織り交ぜながらの瞬時加速で間合いを詰め、手刀を打ち込んでくる

ガキイン！！

ATフィールドで防ぐも耐久力は半分持っていられる

「はあああつ……！！」

瞬時にマゴロク・ソードを展開、袈裟気味に斬り付ける

「ちっ……」

かわされたものの、シールドバリアーは削れたようだ
僕はその流れでもう一撃叩き込む

「そうそう何度も……！」

ラウラが右手を突き出すとマゴロク・ソードはぴたりと止まる

「くっ……AICか……」

「消える」

六つのワイヤーブレードが襲い掛かる

「くっ！」

四つはATフィールドで防いだものの残りの二つはフィールドを破壊、僕にわき腹と肩に突き刺さった

「あああっ！……！」

肉体的に怪我は無いものの、痛みは伝わってくる。

「ふん」

ラウラは僕を蹴り、その勢いで壁にぶち当たって煙が上がる
ラウラは勝利を確信した……が

煙の中に見える影

手には二股の槍を持っている煙が晴れるころ、槍を構える。さながら槍投げ選手のごとく

「ござかしい!!!」

ラウラは大型レール砲を僕に向け発射。と同時に僕は槍を投げる「

と

バシユウツ!

ラウラの実弾が消え去った

ラウラは回避運動に入るも

槍は意思を持つかのようにラウラに向かう

「なんなんだ、この槍は!」

かわし、逃げ、迎撃しても落ちず、正確に付いてくる槍。そして・

ドスッ!

「ぐぐぐぐぐ!」

先端が細く千枚通しのようになってラウラの腹部に突き刺さる。と言っても絶対防御で貫通はしていない。が相殺し切れなかった衝撃

が深く体を貫きラウラの表情をゆがめる。その間にもシールドエネ
ルギーはどんどん削られていく

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

続けざまに何度も突かれラウラの体は大きく傾く。機体にも紫電が
走りIS強制解除の兆候を見せ始める

が、次の瞬間、異変が起こった

S i d e ラウラ

こんな……こんなところで負けるのか、私は………！

私は相手の力量を見誤った。それは間違えようの無いミスだ。だが
しかし、それでも………

私は負けられない！負けるわけにはいかない！

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前。識別上の記号

一番最初に付けられた記号は………遺伝子強化試験体C-00

37

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた

………暗い。暗い闇の中に私はいた

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた
知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識
わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した

私は優秀であった。性能面において最高レベルを記録し続けた
それがあある時、世界最強の兵器……ISが現れたことによ
つて世界は一変した

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージエ』に
よつて異変が生まれたのだ

『ヴォーダン・オージエ』……擬似ハイパーセンサーとも
呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的向上と、超高速戦闘
状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン
移植処理の事を指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『
ヴォーダン・オージエ
越界の瞳』と呼ぶ

危険性は全く無い。理論の上では不適合も起きない……はず、
だった。

しかし、この処置によつて私の左目は金色へと変質し、常に稼動状
態のままカットできない制御不能へと陥った

この『事故』により私は部隊の中でもIS訓練において後れを取る
事になる

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊
員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった

世界は一変した。……私は闇からより深い闇へと、止まるこ
となく転げ落ちていった

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千
冬との出会いだった

「ここ最近の成績が振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りは無かった。特別私だけに訓練を課したということは無かったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はIS専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した

しかし、安堵は無かった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にならぬ

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に……憧れたその強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた

……ああ、こうなりたい。この人のようになりたい

そう思ってから私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話しに行った

いや、話など出来なくても良かった。ただ傍にいただけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつふつと力が湧いてくるのが感じられた

それは、『勇気』という感情に近いらしい

そんな力があつたからだろうか。私はある日訊いてみた

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

その時……ああ、その時だ。あの人が鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた

「私には弟がいる」

「弟・・・・・・・・・・ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある強さとはどういつものなのか、その先に何があるのかをな」

「・・・・・・・・よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるならあつてみるといい。・・・・ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに・・・・・・・・」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは・・・・・・・・

それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに

だから・・・・・・・・許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう男、それを認められない。認めるわけにはいかない。

だから・・・・・・・・

敗北させると決めたのだ。あれを、あの男達を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！

ならば……こんなところで負けるわけには行かない。あの男は、あれは、まだ動いてるのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そうだ、そのためには……

力が、欲しい

ドクン……と私の奥底で何かが蠢く
そしてそいつは言った。

『……願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……
……？ より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など……空っぽの私など、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類無き最強の力を、唯一無二の絶対を……私によこせ！

D a m a g e L e v e l D .
M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .
C e r t i f i c a t i o n C l e a r .
《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》
• b o o t .

S i d e シンジ

「ああああああっ！！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシユヴアルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、ロンギヌスの槍が吹き飛ばされ地面に刺さった

「い、一体何が……！！？」

「碇君！」

「鷹月さんは下がって！」

その言葉に鷹月さんは下がる

そして僕は目を見開き驚愕した

視線の先のラウラのが・・・厳密に言えばISが変形していた。すでに変形とは呼べず、装甲がぐにやりと解け、どろどろになってラウラの全身を包み込んでいく。まるで闇に引きずり込むかのごとく

「・・・なんだよ、あれ」

僕はそう呟いた。おそらくはこの会場の人たち全員が思っているだろう

ISはその原則として、変形はしない。厳密には、出来ないといったほうが正しい。

ISがその形状を変えるのは『スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応』と『フォーム・シフト形態移行』の二つだけだ。パッケージ装備による多少の部分変化はあっても、基礎の形状が変化することはまずない。あり得ない。そう出来ている。

だが・・・それが、あり得ない事が、いま目の前で起こっていた。まるで、一度作ったものを溶かして作り直す粘土の人形だ

シヴアルツエア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。

それが大地にたどり着くと、まるで倍速再生を見るかのようにいきなり高速で全身を変化、成形させていく

そしてそこに立っていたのは、黒い全身装甲フル・スキーンのISに似た『何か』。しかしその形状は先月の襲撃者とは似ても似つかない。

ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化した少女のそれであ

り、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。そして、その手には刀。

「……一夏の『雪片式型』に似てる……」

と、そのとき

ザシュツ！

生暖かい感触が胸の辺りで感じる……あれ……あのIS……
が近い……あ……そうか……僕は……さ……され……
……た……

シンジは胸に刀を突き刺されたまま地面に突っ伏した

S i d e 一夏

「シンジいいいいいい！」

俺は白式を展開、零落白夜でシールドエネルギーを切り裂きラウラ
だった『何か』に突撃する

「はあああつ！！！」

俺は雪片式型を振り下ろす相手はそれを刀で受ける。やっぱりだ・
・相手の刀は『雪片』。千冬姉の振るっていた刀。それに酷似して
いた。

刹那、黒いISが俺の斬撃をいなし、居合いに見立てた刀を中腰に
構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく千
冬姉の太刀筋だった。

再度構えた『雪片式型』が弾かれる。そして、敵はそのまま上段の
構えへと移る。これは……………まずい！

「！」

縦一直線。落とすように鋭い斬撃が襲い掛かる。刀で受けることは
できない。それはもう間に合わない。刹那、俺は白式に『後方退避』
の緊急回避命令を送る。

千冬姉の戦法を知っていたからこそ、かろうじて回避することが出
来た。

だが、シールドエネルギーは先ほどの緊急回避とアリーナのシール
ドエネルギーを破るのに使い果たしてしまい、白式は光になって消
えてしまった

だからなんだ

「……………がどうした……………」

いまの俺には……どうでもいい！

「それがどうしたあああっ！！！」

激しい怒りに突き動かされて、拳を握り締めて黒いISに駆け出していた

……許さねえ。許さねえ。許さねえっ！

「うおおおおおっ！！！！！」

拳が黒いISに触れる瞬間、俺の体がぐんつと逆方向へと引つ張られる

「馬鹿者！何をしている！死ぬ気か！」

どうやら俺を引き離したのは筈だった

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

あの剣技は、俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だった。はじめてみた時のことを今でも正確に思い出せる

『いいか、一夏。刀は振るうものだ。振られるようでは剣術とは言わない』

ずしりとした鋼鉄てつのそれは、初めて手にした俺を試すかのように容赦のない重さを持っていた

手にしているだけでも汗が滲み、構えようにもその重量ゆえに刃が持ち上がらない

『重いだろう。それが、人の命を絶つ武器の、その重さだ』

冷たく、鈍色に煌めく、その刀

人を斬るために生まれ、作られ、鍛えられた、その存在

『この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか、考える。それが強さということだ』

そういつた千冬姉は厳しく、けれどどこか優しげな眼差しをしていた。何か眩しいものを見るかのように、いつもとは違う表情だった。だから俺は、少しでもそんな千冬姉の力になりたくて、そのための強さを追い求めた。そう、ずっと、あの日から、俺は……

「どけよ、箒！邪魔するならお前も……」

「っ！いい加減にしろ！」

バシーン！と頬を思いつきりひっぱたかれて俺は飛び出そうとしていた体勢も災いして横向きに飛ぶ

顔面を感じる痛みと触れた床の冷たさに、限界まで達していた怒りの頂点が折られた

「なんだというのだ！わかるように説明しろ！」

「あいつは……あれは千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

黒いISはアリーナの中央から微動だにしない。どうやら武器が攻撃に反応して行動する自動プログラムのようなものだろう。俺の拳は攻撃とみなされなかったらしい

「お前は……いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、わけわかんねえ力に振り回されるラウラも気にいらねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶったたいてやんねえと気がすまねえ」

力は、強さは、攻撃力じゃない。そんなものは強いとは言わない。ただ暴力なだけだ

「とにかく、俺はアイツをぶん殴る。そのためにはまず正気に戻してからだ」

「理由はわかったが、いまのお前に何が出来る。白式のエネルギーも残ってない状況で、どう戦う気だ？」

「ぐっ……」

「幕の意見はもつともだ。あの黒いISもおそらくはさほどエネルギーが残ってはいないだろうが、それでもいまの白式には一撃はおろか装甲展開するエネルギーも残ってないだろう。」

『非常事態発令！非常事態発令！トーナメントの全試合を中止。状況をレベルDと認定、鎮圧のため、教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐ避難すること！繰り返し！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は收拾されるだろう。だ

から……………」

ザシュツ！

俺と篝の後ろで音がしたので振り返ると……

シンジが立っていた

Side シンジ

「……………」

シンジ……………」

「だれ……………」

……………」あの子を……………」助けてあげなさい……………」

「……………」あの子……………」ボーデヴィツヒさん……………」?」

さあ……………」行きなさい

僕は……背中を押された気がした

Side 一夏

「シン……ジ……?」

確かにシンジだ。だが……刺された傷は無く、悠然と歩いている。シンジのISの緑色が赤に変わっている……シンジ!

黒いISが間合いをつめ先ほどの『真剣』の技を放つ

が、それはシンジのバリアーによって阻まれる。バリアーが消え、それを手のひらで小さくし、黒いISにぶつける。すると、黒いISは端まで吹き飛ばされる。シンジは黒いISに歩み寄り、そして

キユウウウ……ビイイイツ!!!

あろうつことか目から光線を放った

シンジの目から放たれた光線がラウラのいISを真っ二つに切り裂くそして、中から崩れ落ちるラウラをシンジがそつと抱きとめる

俺達は……

見ていることしか・・・できなかつた

第十三章 「学年別トーナメント」(後書き)

次回予告

波乱の結末で幕を閉じる学年末トーナメント

またもや繰り返される女子の嘆き

結末を見届けた一夏と篤は何を思う

そして、シンジは

次回 嘆きのクラスメイト・？

彼女達が望む結末は叶うことは無いのか

第十四章 Ⅱ 嘆きのクラスメイト・？Ⅱ (前書き)

前の十三章を見た方で、「なんか、途中までだったなあ」と感じ、なおかつ、それから見てない方はもう一度第十三章を見てください

第十四章 Ⅱ 嘆きのクラスメイト・？ Ⅱ

第十四章 嘆きのクラスメイト・？

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会うことがあれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激させるのだ。油断していると惚れてしまうぞ？」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだか見ているこちらがモヤモヤとした

だから……今ならわかる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを訊いてしまったのだ。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官

にそんな顔をさせる、その男が……羨ましい。

教官の弟と出会ってもわからなかったが……もう一人の男と戦って理解した

強さとは……なんなのか？

その答えは無数にあるのだろう

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった

『強さって言うのは、心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないか……って僕は思う』

……そう、なのか？

『だって、自分がどうしたいかわからない人は強い弱い前に……どうしたらいいかの歩き方がわからないんだから』

……歩き方……

『どこへ向かうか、どうして向かうか・・・ね』

・・・どうして向かうか・・・

『つまり、やりたいことはやったもの勝ち。遠慮や我慢は損だよ？
・・・っても僕もこっちに来て初めてわかったんだけど』

そいつは・・・苦笑して言った

『うん・・・やりたいようにやらなきゃね、自分の人生だし』

・・・ではお前は・・・？お前はなぜ強くあるうとする？ど
うして強い？

『ぼ、僕は強くないよ』

キツパリ言われた。その言葉にただただ呆けてしまう
あれほどの・・・それこそ神懸かった力を持ってなお、強くない
と言う。それが理解できない

『あえて僕が強いつて言うならそれは・・・』

それは……？

『守るものがあるから……守りたいから強いんだと思う』

……

『だから……君も守ってあげるよ。ラウラ・ボーデヴィット』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる

『守ってあげるよ』

そう言われて、私は……ああ、そうか。これが……そんなのか

ときめいて、しまったのだ

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの十五歳なのだと、ただの『女』なのだと

……碇、シンジ。

教官の弟ではないが……

惚れてしまいそうだ。

「う、あ……」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました

「気がついたか？」

その声には聞き覚えがある。聞き覚えがある……どころではない。どこで聞こうと一瞬で判断出来る、自らが敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ

「私……は……?」

「全身に無理な負担がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。暫くは動けないだろう。無理をするな」

千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこはさすがにかつての教え子。簡単に誘導されてはくれなかった。

「何が……起きたのですか……?」

無理をして上半身を起こすラウラは、全身に走る痛みとその顔を歪める。けれど、瞳だけは真っ直ぐ千冬を見つめていた。治療のために眼帯が外されている左目は、右目の赤色とは全く違う金色をしている。そのオッドアイが、ただ真っ直ぐに問いかける。

「ふう……。。。。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

しかし、そういつて簡単に引き下がる相手ではないこともわかってる。千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりに言葉を紡いだ

「VTシステムは知っているな？」

「はい……………。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……………。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれば……………」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積み重なっていた……………」

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思……………。いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅっつとシートを握りしめた。その視線はいつの間にか俯き、眼下の虚空を彷徨っていた

「私が……………望んだからですね」

あなたに、なることを

その言葉は口にしなかったが、千冬には伝わった

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる

「お前は誰だ？」

「わ、私は……………。私……………は……………」

その言葉の続きが出てこない。自分がラウラであると、どうしても今の状態では言えなかった

「誰でもないなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。何せ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

千冬の言葉が意外だった。まさか自分を励ましてくれるとは思ってもみなかったラウラは、何を言うべきかわからない。わからないまま、ただぼかんと口を開けていた

そんなラウラに、千冬は席を立ってベッドから離れる。もう言うべ

き事は言ったのだろう。教師の仕事に戻るようだった。

「ああ、それから」

そして、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく再度言葉を投げかけた

「お前は私にはなれないぞ。アイツの姉やお前達の教師は、こう見えて心労が絶えないのさ」

きつと、ニヤリと笑って言ったのだろう。それがどうしてかラウラにはわかった

そして、千冬が部屋を去ってから数分経って、急におかしくなった。

「ふ、ふふふ……ははっ」

ああ、なんてズルい人たちだろう。ふたり揃って言いたいことだけ言って言い逃げだ。

あそこまで言っておいて結局は自分で考えるんだから、ズルいことこの上ない。

といっても、シンジはそのようなつもりで言ったわけではないのだ

ろつが、ラウラにはそう思えた

自分で考えて、自分で行動しろ、か……

笑いが漏れるたびに全身が引き攣るように痛かったが、それさえもどこか嬉しいと感じた。

完敗。完膚なきまでの敗北。けれどそれがたまらなく心地いい。

そうラウラ・ボーデヴィツヒは、これから始まるのだから……

「トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上……」

ピツ、と誰かが学食のテレビを消す。僕は体の検査を行った後、一夏とシャルルとともに学食を食べに来ていた。因みにシンジは使徒化しているので傷は付いているが塞がっていた。医者も驚いていた

僕は、海鮮丼。一夏は海鮮塩ラーメン。シャルルはきつねうどんを食べていた

「ふむ、シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、七味とって」

「はいよ」

「ありがとう」

「今日は、色々あったね」

「ああ、ところで……ラウラのISを破壊したシンジのISの能力……なんなんだ？あれ」

「ボクも気になってたよ。もう、ISとしての能力を超えてるよね……あれ」

「僕もわからないんだ……みんなを守らなくちゃって願ったらああなったんだ。それに、ボーデヴィツヒさんも助けて欲しいそうだった気もするし……」

擬似シン化第1覚醒形態に初めてなったときは『綾波を絶対助ける』という思いで必死だったので今思うと、なぜあの形態になったかは、漠然と『だれかを助ける』といった思いがそうさせるとシンジは思っている。

実際のところは作者すらもわからないのだが。

「ふん、刺された相手すら助けようなんて……やるな、シンジ」

「だねえ。なかなか出来ないことだよ？」

「そ、そうかな・・・」

気恥ずかしそうにしながらご飯を掻き込むシンジ、それを見て笑みを浮かべて食事を進める一夏とシャルル

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ。・・・ん？」

なぜだか知らないが、さつきまで俺達の食事が終わるのを今か今かと心待ちにしていた女子一同がひどく落胆している。その沈みっぷりはさながらタイタニック号さながらだった。まあ、見たことはいんだけどね？

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・うわああああんっ！！！！」

バタバタバターと数十名が啼きながら走り去っていった。な、なんなんだろう・・・

「なんか・・・あつたのか？」

「さあ？」

ボクたち三人は顔を見合わせて首をひねる。ちんぷんかんぷんだ。女子というのは摩訶不思議な生き物だということがまた一つわかったことぐらいである

「じゃ、僕は先に部屋に戻るよ」

「ん、じゃ、また明日な？」

「またね、シンジ」

こうして僕は二人と別れた

第十四章 Ⅱ嘆きのクラスメイト・？Ⅱ（後書き）

次回予告

ラウラの暴走を擬似シン化第1覚醒形態で止めたシンジ

その活躍によってより一層注目されるシンジ

さらに、ラウラに起こった変化にとまどうシンジ

そして・・・ついに現れる二人の少女

次回 告白と再会

少女の告白は彼に何を与えるのか

第十五章 「告白と再会」(前書き)

昨日読者の方から激励をいただきました・・・泣きそうなほど嬉しいです！

感想が入っていると、いつもどきどきしながら書かれた感想をクリックするのですが・・・批評や感想も嬉しいのですが、一番は激励文が嬉しいですね！

これからも頑張って投稿していきたいと思えますので応援よろしく
お願いします！！！！

第十五章 「告白と再会」

「いや、昨日は最高だったぜ、大浴場！」

「へえ、これから使えるんだったら僕も入ってみようかな？」

「そうしろよ！絶対気持ちいいって」

第十五章 告白と再会

翌日、僕は一夏と大浴場の話で盛り上がった。なかなかの広さらしく、僕も興味が尽きない

「一夏は昨日、シャルルと入ったんだよね」

「え？・・・ああ、まあな」

ん・・・？なんか歯切れが悪いなあ・・・？そういえばシャルルがいないし・・・と一夏に聞いたら用事でいないとか。そういえばラウラもない。まあ、事情聴取とかいろいろあるんだろっな

「み、みなさん、おはようございます・・・」

教室に入ってきた山田先生はなぜかふらふらとしている・・・何かあったのかな？

「織斑君、何を考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしよ
うとしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はあ・・・」

一夏・・・何を考えてたんだよ・・・にしても、先生に覇気がない。
ほんとに参ってるみたい

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校
生といますか、すでに紹介は済んでいるといますか、ええと・・・」

・・・意味がよくわからない。すでにつてことは僕らは知ってる
つてこと・・・はて、いたかな？そんな人

クラスのみんなもそこに反応したらしく、一斉に騒がしくなる。今この時期、というかすでに今月は一人も転校生が来ているのにそれにまだくるのだろうか？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

えっ……この声って……

「シャルロット・デユノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ペコリとスカート姿のシャルル、もといシャルロットが礼をする。クラス全員がぼかんとしたまま、これはどうもご丁寧にとばかりにペコリと頭を下げ返す

「ええと、デユノア君はデユノアさんでした。ということでは
ああ……また寮の部屋割り組立て直す作業が始まります……
」

山田先生が愚痴を零す。どうやらため息の原因はこれらしい……
ってそういえば昨日シャルルとお風呂に入ったって……

「え？デユノア君って女………?」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは………」

「ちょっとまって！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!？」

ザワザワザワツ！教室が一斉に喧騒に包まれ、それはあつという間に溢れかえる。

ちよっ……僕は………

バシーン！教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く

「シンジいつ……!」

ドカンと登場したのは、ファン・リンイン 鳳 鈴音。その顔は怒りに燃えている。
ちよっ……

「死ね……!」

ISアーマー展開、と同時に衝撃砲『龍砲』がフルパワーで開放される

あ．．．死んだかも．．．

といつても、ATフィールド標準装備のシンジには当たらないのだが．．．それほどに鈴の怒りがすさまじかった

ズドドドオンツ！！！！！！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴が見える。まるで猫みたい．．．
つて僕まだ生きてる？

「．．．．．」

間一髪（でもなかったのだが）、僕と鈴の間に割って入ったのは．．
・ラウラ・ボーデヴィツヒさん。その体には黒いIS『シユヴァ
ルツェア・レーゲン』を纏っている。おそらく衝撃砲を得意のAIC
Cで相殺したのだろう。修理途中なのか、大型レールカノンがない。

「ご、ごめん、ボーデヴィツヒさん、助かったよ。もう、直ったんだ？早いね」

「コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

る。金魚みたい。なんて可愛いものとは裏腹に

「アンタねえええっ！！！！！」

この激昂。とても金魚じゃない。まるで虎。なんて考えてると衝撃砲が此方をロックする

「ま、待って！僕は……」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い！」

は、話を聞いてくれない……どうしようかと考えてると……

「その馬鹿者！勝手にISを起動させるな！」

廊下からの怒号に廊下に出ると、怒り心頭の織斑先生が立っていた

「で、でも……！！」

「でももストライキもない！さっさと戻せ！」

さすがの鈴もISを解除する

「全く・・・碇、怪我はないか？」

「は、はい」

「お前に客人だ・・・応接室に通してある。行って来い」

「あ・・・わかりました」

睨みつけてくる鈴にビビりながら駆け出す。後ろではスパアーンと小気味いい音が聞こえたので、苦笑してしまった

「失礼します」

応接室に着き、ノックしてから入ると、そこにいたのは

「おっそーい！何してんのよ・・・って何その格好!？」

「・・・碇君・・・おはよう」

式波・アスカ・ラングレーと綾波レイがそこにいた

「ええええ！？なんで二人ともここにいんの？」

「知らないわよ！気がついたらここにいたんだから」

「……そう、目の前が光ったら、ここにいたの」

「そっか……」

とりあえず……無事でよかった

「で……なんか、変な機械を動かさせられて、ここにいるんだけど」

「……私も……同じ」

「え……ということは……」

「うむ、こいつらも入学確定だ」

がちやりとドアが開けば織斑先生が入ってきてそう言い放った

「……ま、行く当てもないし、しょうがないわね」

「……碓君が、いいなら」

「え？ぼ、僕はいいけど」

「ならば、明日からこの生徒だ、今日から寮の部屋をあてがうからそこで生活することになる」

「……わかりました」

「ショーがないわね……」

「一応、自己紹介をしておこう、私は織斑千冬という。ここで教諭をしている。私的な時間以外は敬語で話す様に。わかったな？」

……従わないと……出席簿ではたかれてしまっからなあ

「わかりました」

「え……めんどくさあい……」

「……わかったな？」

織斑先生がアスカを睨む。こ、怖い……

「う……わ、わかったわよ……」

「それでいい、では、碓。お前は教室にもどれ。二人は私が案内するのでな」

「はい」

こうして・・・懐かしい二人がIS学園にやってきた

第十五章 告白と再会（後書き）

次回予告

IS学園にやってきたアスカとレイ

シンジの能力の高さに唾然とするアスカ

新たな女子に警戒を強めるラウラ

果たしてシンジを手に入れるのは誰か？（ちょっと違つよ？）

次回 シンジと女子の四重奏^{カルテット}

シンジの女難は終わることを知らない

第十六章 ≡ シンジと少女の四重奏（カルテット）≡（前書き）

えゝ・・・アスカとレイが登場しましたが・・・マリはどうしょ・・・
・からませ方がわからないなあ・・・といってもいつかは出させま
すw

アスカとレイのISは・・・少ししたら設定に書きます

第十六章 Ⅱ シンジと少女の四重奏（カルテット）Ⅱ

アスカとレイがこつちに来た翌日

朝・シンジの部屋

「ん……ふああ……」

今日もいい目覚め……と言ってもここからの五分のまどろみが至福の時間。この時間にもぞもぞと動きながら眠気を飛ばしていくのが僕の行動パターン……だが今日は少しちがった

脚を動かすと……どうにも窮屈である。まあ……昨日何かおいたのかな。邪魔に思ったので、押し返そうとすると

むにゅん

……あれ？……なんだこれ……僕はその物体を撫でてみる

「んっ……ううん」

その声に頭が急速に覚醒する。物は言葉を発しない。僕は布団を捲
つてみると

「んあ……朝か……？」

そこにはラウラが一糸纏わぬ姿で隣に寝ていた。

第十六章 シンジと少女の四重奏^{カルテット}

しかも仰向けに寝ていたので……何もかもが見えていた。ので、
シンジはすぐに布団をかぶせて

「ななななっ・・・何やってんだよ!!!??」

「ふむ・・・ただ『添い寝』を実践していただけだ」

悪びれることもなく、顔だけを出して答えるラウラ

「でも・・・ポーデヴィツヒさん・・・何も・・・」

「シンジ・・・ラウラだ」

「え・・・?」

「ラウラと呼ぶがいい。お前は私の嫁なのだからな」

「あ・・・うん、わかったよラウラ」

名前を呼ぶと実に満足そうに頷くラウラ。その笑顔がまた眩しい。

「でも・・・なんで素っ裸なの!??」

「ん?いつもこの格好だが?」

ラウラは首をかしげて僕を見る

「う……」

僕は咄嗟にさっきのラウラの肢体を思い出してしまつ。

「む……何を想像しているか！」

ラウラが投げた枕が僕の顔に命中する

「べ、別に……」

といいながらつつい視線がラウラの体に……

「き、貴様！別にといいながらその視線はいただけんな……」

「う……ご、ゴメン……」

「そんなに見たいなら……見せてやらんことも……」

「ただだつダメだよ！」

布団を捲ろうとするラウラの手を掴んで首を横に振ると、ベッド

のシートに足を滑らせて

「うわあっ！ー！ー！」

そのままラウラの上に覆いかぶさるようにつける。何とかラウラにぶつからないようにすることは出来たが・・・

「んっ・・・！？」

何の因果か二度目のキスをしてしまった・・・とそこに

「バカシンジっ・・・起きて・・・」

間の悪いことに、アスカにキスしているところを見られてしまった。しかも僕が上なので襲い掛かったように見えなくも・・・

「1」のっ・・・変態！ー！ー！」

ゴスツとアスカの飛び蹴りが顔面にクリーンヒット。僕の意識をこっさり刈り取っていった。どうやら、こういう攻撃に、ATフィールドは発動してくれない仕様……らしい……ガク

Side アスカ

「ん……よく寝た……」

私は今、IS学園というところの寮のベッドの上で横になっている確か……参号機の起動実験のときに意識を失って……気がついてたらこの学園の中庭に綾^{エコヒキ}波と一緒にいたそして、スーツをビシッと着こなした女性に見つかって……暫くしてシンジに会った

「ほんと……あのバカ……こんなところで何してんだか……」

バカシンジのことを考えると無性に胸が苦しくなる
あのエコヒキも好きみたいだし……まったく……バカシンジのどこがいいんだか……

と思うも……それだと自分もその問いに答えなければ成らないし……とても答えられそうにない

「……………アイツ起こしてこよ」

私は私服に身を包んでシンジの部屋に向かう。たしか……102
6号だったわよね

そういえば……シンジの制服姿……カッコよかったな……
と、私はだらしなく笑みを浮かぶ顔を必死に無表情に戻す

そんなこんなしているうちにシンジの部屋の前に立っていた
……服……こんなんで大丈夫だったかな……?んっ……

「バカシンジ……起きて……」

そこで見たのは……シンジが女子に……キス……を
……は?何それ……あのバカ、ここにきて何してんのよ……

「このっ、変態!」

気がついたら、とび蹴りをかましていた。でも……今はどうでも
いい。私はさめた表情でシンジに追撃をかけようとする

「まで、今ここで嫁を殺されてはかなわん。今すぐやめろ」

は・・・嫁って・・・

「何よ・・・嫁って？あんたバカシンジの何よ」

「む・・・私はアイツを嫁にすると決めたのだ。決定事項なのだ」

「はあ？わけわかんないし・・・」

「・・・まあ、一方的に通告しただけだからな」

「・・・ってことは、こいつもバカシンジのこと・・・」

「ん・・・ううん・・・」

やっと目を覚ましたわね・・・このバカシンジ

S i d e
シンジ

「ん・・・ううん・・・」

僕が目を覚ますと、そこにはアスカとシーツを体に巻いたラウラが立っていた

「やーっと目を覚ましたわね、バカシンジ」

「まったく・・・あの程度で気絶するとは・・・鍛えなければな

いや、あの蹴りはかなりのものだったよ・・・あたた

「で・・・何の用なのかな・・・？」

「私はアンタを起こしに来ただけよ。悪い？」

「いや・・・悪くないけど・・・」

相変わらずだなあ、アスカは

「ふむ、そろそろ朝食の時間だ。私は戻らせてもらおうか」

「じゃ、私も戻るわ。エコヒイキ起こさなきゃいけないし」

「うん、また食堂でね」

僕は着替えて、食堂に向かった。

アスカとラウラと廊下を歩いていると鈴と出会った

「おはよー、シンジ」

「おはよう、鈴」

「……誰？」

「ファン・リンイン 鳳 鈴音。中国代表候補生で、IS『カウリウ 甲龍』の操縦者だ」

なるほど……とアスカは頷いている。アスカとレイは基礎的なことは昨日、織斑先生から叩き込まれたようだった

「ふうん……アンタシンジの知り合い？」

「だったら何？」

「ふうん……」

鈴がアスカを舐めるように見ながら品定めをしている……よう
に見えた。

「アンタ……専用機持ち？」

「持っていないけど？」

「そう・・・ま、そうよねえ」

なぜか勝ち誇ったように笑みを浮かべる鈴
そして面白くないのはアスカだ

「ふん、今に専用機持ちになってやるわよ！」

「はいはい、がんばってね」

鈴は陽気に食堂に向かう

「・・・・・・・・なんなんだろ・・・・・・・・？」

「さあな・・・大方、敵情視察といった所だろう」

・・・ちんぷんかんぷんだ

「・・・・・・・・碓君」

「綾波、おはよう」

「おはよう・・・・・・・・碓君」

「・・・誰だ？」

「綾波レイ・・・私達と同じ組織の所属の人間よ」

「・・・そうか」

なにやら後ろでひそひそと話し声が聞こえてくるけど、気にしない食堂に着いて、みんな思い思いに食事を注文する。因みに僕は焼き鯖定食。

「ジンジク・・・ってまた知らない女が増えてる」

鈴はアスカを見たときと同じように見ている・・・と綾波は僕の後ろにひつついて隠れる

「ちよっ・・・シンジを盾にしないでよ！」

「・・・」

「綾波・・・ご飯食べないと・・・」

「・・・わかったわ」

僕の隣にラウラとレイ、向かい側にアスカと鈴が座った

「そういえば、アスカと綾波は今日からなんだよね？」

「そうね、まあ、ちゃっちやと追いついてやるわ」

「・・・頑張ってみるわ・・・」

「頑張つてね、わからないことがあつたら教えてあげるから」

「ちょっとシンジ！二人だけずるいわよ！私にも教えなさい」

「うむ、私も参加させてもらおう。わからないところを教えるのは嫁の務めだからな」

「二人は代表候補生なんだから大丈夫じゃないか！」

こうして、カルテット 姦しい四重奏は時間ギリギリまで続いたとさ

第十六章 〓 シンジと少女の四重奏（カルテット）〓（後書き）

次回予告

郊外特別実習期間を控え浮き足立つ1年1組

一夏とシンジはシャルロットとともに水着を買いに行く

それをつける鈴たち五人

果たして、その目的とは

次回 尾行と水着

一夏とシンジの運命は生か死か

第十七章 「尾行と水着」(前書き)

PV150000達成!

これからも末永くお付き合いくださいます

第十七章 「尾行と水着」

朝食を終え、教室に向かうとすでに織斑先生がいて・・・

「おはよう、諸君」

「「「「おはようございます」「「「「

みんな一様に礼儀正しく挨拶をして教室にはいる。それは僕たちも然り。因みにアスカとレイは後で来る予定。

と

すばぁん!!!

と小気味良い音が聞こえたので見てみると、珍しくシャルロットが一夏とともに織斑先生のお叱りを受けている。どうやら、遅刻しそうになったのでISを部分展開させて飛んて来たらしい。

「敷地内でも許可されていないIS展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……すみません……」

一夏とシャルロットは放課後、教室の掃除を言い渡されていた。

第十七章 尾行と水着

「さて、諸君。今日は通常授業の日だったな。IS学園とはいえお前達も扱いは高校生だ。赤点など取ってきてくれるなよ」

今日はISの授業はお休み。代わりに普通の授業である。

「それと。今日は転入生を紹介する……入って来い」

辺りがざわつき始める。それもそうだ……この3ヶ月で一年への転入は5人目なのだ。

扉を開けて入ってきたのはアスカと綾波。二人とも緊張はしてない。うらやましいなあ

かく言う僕は絶対に緊張すると思う。

「式波・アスカ・ラングレー。よろしく」

「綾波レイ……よろしく」

二人ともペコリと一礼すると歓迎の拍手をつける

「では、式波は碇の隣、綾波は織斑の隣でいいだろう」

言うや否やすぐに席は二人の転入生のために開けられる。

「まあたアンタと同じクラスね」

「はは、よろしくね、アスカ」

「俺は、織斑一夏だ、よろしくな綾波さん」

「……………よろしく。」

「さて、転入生の紹介も終わったところで、来週から始まる郊外特別実習期間についてだが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外し過ぎないように」

そう。七月の初頭に郊外特別実習……つまり、臨海学校がある。その初日が丸々自由時間ということで女子は先週からずっとテンションが上がりっぱなしなのである

「アンタ、水着どうすんの?」

「ああ、ISのデータ取りでお金もらってるから休みにでも買いに行くよ」

「あたしらも持ってないし……悪いけど、立て替えてくれない?」

「まあ……そういうことなら……でもあんまり高いのはダメだよ?」

「わかってるわよ」

「では、SHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉強に励めよ」

と、ここで、クラスでもしっかり者の鷹月静寂さんが質問を投げかける

「織斑先生、山田先生はお休みですか？」

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日替わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいなあ」

「ずるい〜！私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あ〜、泳いでるのかな〜。泳いでるんだらうなあ」

さすが・・・咲き乱れる十代女子。話題があれば一気に賑わう。織斑先生はそれを見て鬱陶しそうに

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」

はい。と揃った返事をする女子一同。チームワーク抜群だ

放課後

「式波、綾波、少し話がある」

「何………ですか？」

「………何ですか？」

アスカは普通に返事するも、相手が織斑先生とわかると、後ろに敬語を付け足した。綾波は普段通りである。

「じゃ、僕は先に………」

「気にするな……居とけ」

「は、はあ………」

まあ、居てもいいなら居とくかな

「式波と綾波には専用のISを用意することになる」

「ま、当然よね」

さも当たり前のように腕を組むアスカ

「……ありがとうございます……」

綾波は変わらず無表情でレイを言っている

「あのバカから連絡があつてな……二体のISの設計図が送られてきたそうだ……送り主は……赤木だそうだ」

僕と同じ……やっぱり赤木博士は何か知っているのだろうか？

「ふん……ま、何でもいいわ、でいつ届く……んですか？」

「早くて来週、篠ノ之のISとともに束本人がもって来るそうだ」

「……束というのは？」

「ISを作った張本人、篠ノ之束しののたばねのことだ」

ああ……そういえば篠ノ之さんのお姉さんって聞いたな……篠ノ之さんはどうも嫌ってるような感じだけど

「まあ、アイツも喜んでいるからな……フレームはともかく、コアまで送られてくるそうだからな」

「ふうん……いろいろやってんのね……」

「そういうわけだ……話は以上だ」

僕たちが一礼して行くところと思い出したように先生が呼び止める

「ああ、碇」

「はい？」

「おまえのISの機能特化専用パッケージが完成したから実習でテストをする……なかなかの出来映えだ」

「そうですね、ありがとうございます！」

「気にするな、ではな」

そう言っつて、織斑先生は去っていく

「……機能特化パッケージって何よ？」

「設計図に描いてあったんだよ。多分、追加装甲みたいな感じじゃないかな？」

「……そういえば……碇君、目の色が赤くなってる」

「そうそう、何それ？」

「え〜っと・・・話したら長くなるんだけど・・・」

シンジは使徒化した経緯を話した

「何？アンタ使徒になったわけ！？バツカじゃないの？」

「仕方ないだろ！綾波を助けたかったんだ」

「・・・・・・・・碇君」

綾波が頬を染めて俯く。はて、なんでだろ？

「ふん・・・まあいいわ、ISが来たらいつでも練習できるし、わからないことがあったら教えなさいよね」

「・・・・・・・・私も・・・」

「わかったよ」

翌日

「おー、よく晴れたなあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今僕は一夏とシャルロットとで臨海学校の準備のために町に繰り出していたが・・・・・・・・

「・・・・・・・・僕は夢が砕ける音を聞いたよ・・・」

シャルロットはご機嫌斜めです。

「・・・・・・・・あの・・・僕は別行動でもいいよ?」

「え?かまわねーって。なあ?シャル」

「え・・・あ、ああ・・・うん・・・」

空気呼んでよ!一夏・・・

「い、ごめんね・・・シャルロットさん」

「だ、大丈夫だよ……気にしないで……ね？」

その優しさがちょっと辛いかも……とは言えずにニコリ笑みを返す

「ま、まあ、今日は駅前の専門店ですパフェ奢るからさ……機嫌直してくれよ、シャル」

「パフェだけ？」

「け、ケーキもつけよう。ドリンクも」

一夏……大変そう

「ん、あと、はい」

一夏に手を差し出すシャルロット。どうやら手を繋いで欲しいみたい。
い。

「ああ、手を繋ぐのか、ほい」

一夏はさっと手を繋ぐ。シャルロットは照れているのか赤くなっている。一夏は……まあ、平然としている。鈍いのかな？

他人のことは少し鋭いが自分のことにはかなり鈍いのでシンジもど
うこう言えないのだが

「大丈夫か？シャル」

「ひゃあっ！？な、な、なにがっ！？」

「いや、シャルが。やっぱり帰って休むか？」

「う、ううんっ！いいっ、平気っ、大丈夫っ！い、行こっ！ほら、
シンジも！」

一夏の手を握ったまま、僕の手を握って歩き始める。僕と一夏は引
っ張られる様に歩き出した

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

駅前へと向かって歩き出す一夏達。その姿を物陰から見つめる二つ
の影があった。三人が青になった横断歩道を渡って人ごみに消える

と、頃合いとばかりに茂みから姿を現す二つの影。一人は躍動的なツインテール。一人は優雅なブロードヘアー。つまり、鈴とセシリアであった

「……………あのさあ」

「……………なんですか？」

「……………あえ、手え握ってない？」

「……………握ってますわね」

百人が見たら百人ともそう返すであろう言葉を発して、セシリアは引き彎った笑顔のまま持っていたペットボトルを握り締めた。ぶしっ！と音を立てて蓋が吹き飛ぶ。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。……………よし、殺そう」

握り締めた鈴の拳は、すでにISアーマーを部分展開していて準戦闘モードに入っていた。衝撃砲発射までのタイムラグはおよそ二秒とといったところである。

なんとも恐ろしい十代乙女の純情である

「ほう、楽しそうだな。では私も混ぜるがいい」

「「!?!?」」

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返る二人
そこに立っていたのは忘れもしない先月、鈴とセシリアが敗北を喫
した相手……ラウラだった

「なっ!?!?あ、アンタいつの間に!」

「そう警戒するな。今のところ、お前達に危害を加えるつもりはな
いぞ」

「信じられるものですか!再戦というのなら、受けて立ちますわよ
!?!?」

一度、二対一で負けているせいか、鈴とセシリアの懐疑心を強くし
ていた。がラウラはそれに動じずしれっと言いつつ

「あのことは、まあ許せ」

さらりとそう言われて、二人は一瞬何を言われたのかわからずに呆
けてしまう。だが、すぐさま持ち直して

「ゆ、許せつて、あんたねえ……！」

「はい、そうですかといえるわけが……！」

「そうか、では私はシンジを追うので、これで失礼するでしょう。ついでに一夏の様子も見ておこうか」

そういつて本当にすたすた歩き始めたので、今度は鈴とセシリアが慌てて引き止めた

「ちよっ、ちよっお待ちなさいよ！」

「そ、そうですわ！追ってどうしようといいますが……！」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさり言われて、逆にひるんでしまう二人。こうまでストレートに言われると、なんだかも悔しいのか羨ましいのかわからない

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決。そうですしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡ののち、三人の……一夏さん、シンジさんとシャルロットさんの関係がどのような状態にあるのか見極めるべきですね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、なんだかよくわからないうちにおかしな追跡トリオが結成された

「えーっと、水着売り場はここだな」

僕たちは今駅前のショッピングモール、その二階にいた。一夏によれば、交通網の中心でもあるここは電車に地下鉄、バス・タクシーと何でもござれの揃い踏み。市のどこからでもアクセス可能、そして市のどこへでもアクセス可能だそう

そして、駅舎を含み周囲の地下街全てとつながっているこのショッピングモール『レゾナンス』は食べ物も欧・中・和を問わずに完備衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。そのほかにも各種レジャーは抜きなく、子供からお年寄りまで幅広く対応可能。曰く『ここで無ければ市内のどこにも無い』といわれるほど。地味に……いや、派手にすげえ。

と、一夏の説明を反復してみたけど……すごいなあ、『レゾナンス』

「ところで、シャルも水着を買うのか？」

「そ、そうだね……あの、一夏はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

シャルロットが一夏に照れながら、それでも期待を込めた一言

「そうだなあ。せっかくだし泳ごうぜ。俺も海は久しぶりだから、結構楽しみなんだよ」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかな」

微妙にずれた一夏の台詞に見たいという解釈をしたシャルロット。
まあ、これでいいか

「じゃ、僕は先に行ってるね？」

「おう、わかった」

「また、あとでね」

シンジが二人と別れたころ

「む、別れたな・・・どうする?」

「わたくしは一夏さんを追跡しますわ」

「じゃ、ここからは別行動ね・・・」

「うむ、ではな。オルコット」

私と鳳はオルコットと別れ、シンジを追跡することにした

「ふむ、誰かと会うことも無いな、合流してもいいのではないか?」

「そうねえ・・・」

と言っていると、例の転入生が現れた

「あ、バカシンジ遅い!」

「おはよう・・・碓君」

「ごめん・・・待った?」

どうやら、待ち合わせしていたらしい

「・・・いなくて正解だったわね」

「うむ・・・三人は前から知り合いのようだ」

「ほんと?」

「ああ・・・全くの赤の他人という感じがしないのでな」

「・・・強敵ね」

と、シンジは店から出ている。どうやら二人は臨海学校までは水着を見せない魂胆らしい。

「あ、二人に呼ばれたわね・・・水着代、シンジ持ちなのかしら?」

「そのようだな。持ち合わせがないのだろうか?」

「お金持ってたならそれこそ悪女よ」

と、水着を受け取った二人は笑みを浮かべてシンジと別れた

「・・・要注意ね、あの二人は」

「む・・・そうか」

そろそろ、シンジに合流しようとしたとき

「あ、そのあなた、これ元の場所に直しておいて」

「え？・・・あの・・・自分で戻してください・・・」

ぐいっと相手に水着を押し返すシンジ。たまに、見ず知らずの男に命令する女性がいる。この世は女尊男卑の風潮が広がっているためにこういふことは、まま、あるらしい。

「ちょっと、私の言うことが聞けないの？」

「でも・・・僕が直す云われはないですし・・・」

「へえ、そういふこと言うの？自分の立場がわかってないみたいね」

そういつてはその女性は警備員を呼ぼうとする。この女尊男卑の社会では『いきなり暴力を振るわれた』なんて言われたらその時点で有罪確定という世知辛い世の中

「は・・・あの女、シンジに何絡んでるのよ！シメてやろうかしら」

鈴が飛び出そうとするのをラウラが止める

「さて……どうやらすぐに解決しそうだ」

「どういふこと？」

「まあ、見ている」

と、騒動の場に現れたのは、IS学園教師の織斑千冬その人である

「わが学園の生徒がどうかしましたかな？」

「あら、彼の担任かしら？もう少し躰をしてくださらないかしら？
生意気で困っちゃっわ」

シンジは特に生意気なことはしていないのだが、一部始終を見ていない千冬にはあることないこと言いふらす

「そうですね、こまりましたな……わがIS学園にそのような学生がいるとは……」

「……は？今、なんて……」

「彼はIS学園の生徒です。しかも優秀ときている。彼がキレたら……この辺り一帯は灰燼と化すでしょうなあ」

この台詞に女性はたじろぐ・・・そして

「・・・もういいですわ！まったく・・・」

一人憤慨して去っていった。結局その水着はシンジが直したのだが

「大丈夫だったか？碇」

「はい・・・ありがとうございます」

シンジは安堵の笑みを浮かべている。

「千冬さんが来るのわかってたの？」

「心配がしたのでな・・・」

どうやら二人は談笑に花を咲かせている

「今日は水着を買いにきたのか？」

「はい。先生もですか？」

「ああ、とりあえず、今は千冬でいいぞ」

「わかりました」

「……ふむ、碇には私の水着を選んでもらおうか」

「」「」「はあっ!?!」「」「」

つつといラウラと鈴は声を上げてしまふ。シンジも変に思ったのだろつか辺りを見回している。

「ふっ……ま、とりあえず行こうか」

「え?あ、はい……」

ラウラと鈴は互いに口をふさぎながら安堵のため息を漏らす

「まったく……いきなり声を上げるんじゃないわよ」

「む、それはお前もだろう」

言い争いもそこそこに店の内部を観察するために店の外から観察する

シンジと千冬が楽しみにショッピングを楽しんでいる。その様はまるで恋人同士のように

「くう……う、うらやましい……」

「む、教官と言えどもこれは……浮気だぞ……シンジ」

と、あまりに食い入るように見ていたのが拙かったのか、シンジと千冬が気付いた

「「あ……っ」「

千冬が手招きする。ここで逃げたら後が怖い。二人は大人しく二人の下に行く

「さて……何をしていたかは聞かないでおこうか……お前達の名誉のためにな」

「「あ、ありがとうございます……」「

二人は千冬に弱みを握られたようで落ち着かない

「さて、碇、どっちの水着がいいと思っ？」

片方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着

もう片方は対極の、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白水着

「え……っと……素直にいいですか？」

「ああ

「ぼくは……黒のほうがか冬さんに似合うとおもいますよ

「ほう……なかなか好きだな？ん？」

「へ！？あ、あの……そういうつもりじゃ……」

「気にするな、さて、一夏にも聞いてくるか」

わしゃわしゃとシンジの頭を撫でてその場を去っていく千冬さん

「……なんかラスボス登場って感じが……」

「どうしたの？鈴」

「なんでもないわ……はあ」

なんで鈴が落ち込んでるのかわからない・・・はて・・・？

と辺りを見渡すと、いつの間にかラウラがいなかった

ところ変わって・・・ドイツ軍のとある施設内

そこではIS配備特殊部隊『シュヴァルツエア・ハーゼ』・・・
通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた

ドイツ国内の総IS数は十機なのだが、そのうち三機を持っている
のがこの部隊である。

眼帯をした黒ウサギが部隊章であるこの隊は隊長のラウラを始め全
員がIS用補佐ナノマシン移植者である。元々、ラウラの眼帯は機
能制御装置であつたのだが、現在では全員が肉眼の保護と部隊の誇
りとして眼帯を装着している

「何をしている！現時点で三十七秒の遅れだ！急げ！」

そう怒号を飛ばしているのは服隊長であるクラリツサ・ハルフォー
フである。年齢は二十二。部隊の中では最高齢であり、十代が多い
隊員達を厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』

その専用機『シュヴェルツエア・ツヴァイク』に緊急暗号通信と同
義のプライベート・チャンネルが届いた

「・・・受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です」

『わ、私だ・・・』

本来ならば名前と階級を言わなければならないのだが、向こうの声
が妙に落ち着きなく、揺れているためクラリツサは怪訝そうな顔を
する

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

『あ、ああ・・・。とても、重大な問題が発生している・・・
』

その様子からただ事ではないと思ったクラリツサは、訓練中の隊員
へハンドサインで『訓練中止・緊急招集』を伝える

「・・・部隊を向かわせますか？」

「い、いや・・・部隊は必要ない。軍事的な問題ではないし・・・
向かったところで返り討ちにされるのが関の山だ」

「・・・では？」

『クラリツサ・・・私は・・・どうやら、教官と・・・決着をつけ
なければならぬ』

「・・・はい？」

わけがわからず、聞き返してしまう

『ど、どうやら、私の嫁は教官と予想以上に親密であるとわかった
のでな……』

「嫁というのは……碇シンジという方ですね？」

『う、うむ……今度の臨海学校で勝負に出たいと思うのだが……』

実はこの部隊。VT事件前まではラウラとは人間関係に多大な問題を抱えていた。しかし、VT事件後、ラウラの『好きな男が出来た』という相談をクラリッサに持ちかけたときに全てのわだかまりが解けた。

その時の話は割愛させていただくが……ラウラの間違った日本知識の元凶はクラリッサということは間違いない。

『そ、それで、だな、いま、その、水着売り場なのだが……』

「ほう、水着！そっいえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのよ
うな水着を？」

『う、うん？学園指定の水着だか……』

「何をバカなことを！」

『!?!?』

「確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くない。悪くはないでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だがしかし、それでは……」

『そ、それでは……?』

ごくり。ラウラが唾を飲み込む

「色物の域を出ない！」

『なっ……!?!?』

「隊長は確かに豊富なボディで相手を籠絡というタイプではありません。ですがそこで際物に逃げるようでは『気になるアイツ』から前には進まないのです!」

『な、ならば……どうする?』

「フツ。私に秘策があります」

クラリッサの目がキュピイインと光った……気がした

第十七章 「尾行と水着」(後書き)

次回予告

ついに訪れた臨海学校

青い海にはしゃぐ女子一同

豊満なボディでシンジに迫る千冬

果たしてラウラはシンジを振り向かせることが出来るのか!?

次回 臨海学校へドキッ!女の子だらけの白い砂浜へ

シンジは貞操を守れるのか?

第十八章 臨海学校へドキッ！女の子だらけの白い砂浜へ（前書き）

えへ、度々いただくご感想に励まされるばかりです。ありがとうございます……

第十六章の予告ではレイとアスカも尾行組に入っていたのですが、本文を見ると入っていませんでした……気づけよ俺w

という、私のボケっぷりの報告でした

因みに……

もう一個ISものを書こうかと思いますが……

主人公の性格はヒイロみたいなのにするかロツクオン（ライル）みたいなのにするか……皆さんならどっちがいいですか？

第十八章 臨海学校へドキッ！女の子だらけの白い砂浜へ

第十八章 臨海学校へドキッ！女の子だらけの白い砂浜へ

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中で、クラスの女子が声をあげる
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は
穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「え？一夏も？」

「ああ・・・大変な目にあっただけ、シャルが助けてくれなかったらと思うとゾッとするぜ」

「僕もだよ、幸い織斑先生が助けてくれたから助かったんだけど」

「そっぴやさ・・・千冬姉の水着選んだの・・・シンジなのか？」

「一夏が小声で聞いてくる」

「え、あ・・・うん、そうだけど・・・」

「俺がどっちがいいって聞かれて白って答えたら『黒だな』って普通にスルーされたんだ」

「僕は白より黒が似合うかなあって思って言ったただだよ？」

「ふん・・・シンジは信頼されてるんだな」

「そっかな？一夏もでしょ？」

「ん・・・おれはどっちかって言うとまだ頼ってる部分が多いからなあ」

その台詞に姉弟の絆が垣間見えた気がしたシンジ

「つか海きれいだよなあ、そう思わないか？シャル」

「……………」

シャルロットは左手首のブレスレットを見て悦に入っている。まあ、誰からの贈り物かはわかるんだけど

「……………シャル？」

「へっ！？あ、ああ、うん……キレイだねっ！」

普通に聞いてなかったね。これで確か7回目。

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

一夏からプレゼントされたであろう銀色のブレスレットを眺めては思い出すかのように笑顔になる。

「まったく、シャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

僕の後ろのセシリアが若干むすつとした顔で愚痴みたいな台詞を零した

「うん、そうだね。ごめんね。えへへ……………」

セシリアの言葉に明らかな生返事で答えるシャルロット。ご機嫌と言つか…………もう夢中と言った感じ

「昨日、途中で二人だけで抜けたと思ったら、まさかプレゼントとは…………不公平ですわ」

「あ……………。まあ、その、なんだ。セシリアにはまた今度の機会にな？」

「や、約束ですわよ？」

「おう。あんまり高いのは無理だけどな」

セシリアは満足したのか「それならまあ、許しましょう」「と言って引き下がった。一夏も大変だなあ

「……………」

そして、不思議なのがこのラウラ。バスに乗ってからずっと大人しくしている。と思ったら時折、挙動不審になって周囲をキョロキョロ見ている

「ラウラ？えっと・・・昨日からずっとそうだけど・・・大丈夫？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ラウラ？」

反応がないので顔を覗き込んでみる

「!？なっ、なんっ・・・・・・・・なんだ!？ち、近い!馬鹿者!」

「むぁ・・・・・・・・」「ゴメン」

顔を思い切り手のひらで押し返されて、たまらず変な声が出てしまつ。そのラウラの顔は妙に赤みがかっていた

「風邪でもひいたのかなって思ったからさ・・・大丈夫？」

「う、む・・・気にするな。しかしその心がけは嫁として殊勝だな」

「あはは・・・まあ、大丈夫ならよかつたよ」

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座れ」

織斑先生の一言で全員がさっとそれに従う。指導能力抜群である言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」

「「「「よろしくおねがいしまーす」「」「」

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶する。この旅館には毎年お世話になっていくらしく、着物の女将さんが丁寧に辞儀をした。

「はい、此方こそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

年齢は三十代くらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからか、その姿は女将という立場と逆にすごく若々しく見えた。知り合いののんべえな一佐とはぜんぜん違う

「あら、此方が噂の……?」

一夏と僕の二人と目があつた女将さんが織斑先生にそういつて尋ねる

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」

一夏がぐいつと頭を押さえられる。僕には無い。珍しい

「お、織斑一夏です。よろしく願ひします」

「碇シンジです。よろしく願ひします」

僕は恭しく、一礼する

「うふふ、う丁寧にござも。清洲景子（おとけいこ）です」

そういつて、女将さんはまた丁寧にお辞儀をする。すぐく様になつていて、そういう女性が近くにいないのでどうにも緊張してしまつ

「不出来の弟でござ迷惑をおかけします」

「あらあら、織斑先生つたら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので。こいつはまあまあやる男ですがね」

ぐくぐしと頭を撫でられる。や、やめて！人が見てる！

その様子をぼかんとした様子で見ると一夏。どうやら姉が頭を撫でるのがかなり珍しいようだ。他の女子も驚きの目で見ている

そして、女将さんというところ

「あらあら、まあまあ……うふふ」

口元を押さえて、なにやら、暖かな目で見守っている。止めてくださいよ

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館のほうで着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をするのでさすま旅館の中へと向かう。

とりあえずは荷物を置いてそこからなんだろう

ちなみに初日は終日自由時間。食事は旅館の食堂にて各自とるよう
にと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむぐ、しんちゃーん」

この呼び方は間違いなくのほほんさん（一夏命名）だ。僕と一夏が
振り向くと異様に遅い移動速度でこっちに向かってきた

「二人とも部屋どこ？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから
教えて〜」

その台詞で辺りが一瞬にして静まり返った。え、え……何？

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

いや、さすがにそれは無いと思っつよ

「わゝ、それはいいねゝ。私もそうしようかなー。あゝ、床つめた
ーいっつゝ」

さすがに女の子がそれはダメだと思うよ！
なんて思っていると、織斑先生が来た

「織斑、碇、お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

織斑先生に呼ばれたので僕たちはのほほんさんに「また、あとで」と言っつてその場を後にした

「えーっと、織斑先生、俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙って付いて来い」

一夏の台詞に取り付く間もなく返事を返してきた。・・・相変わらずな人だなあ

因みに旅館の中はかなり広くてキレイだった。一学年丸々収容できる規模の旅館というだけでもすごいが、その内装は歴史のある装飾と最新設備が見事に融合したものになっていた

「ここだ」

「え、こっつて・・・」

一夏が不思議がるのも無理は無い

ドアには『教員室』とでかでかとかかれた紙が貼ってある

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、とため息をつく織斑先生が続ける

「結果、私と同室ということになったわけだ。これなら、女子もおいそれと近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど……」

確かに、女子は来なくなるだろう。わざわざ怒られに行くようなものだ。だが……

「僕まで同室なんですか？」

「ん？いやなのか？」

「そういうわけじゃないんですけど……」

「なら、かまわんだろう」

どうやら、問答無用で決定してしまった。いいのだろうか？

「一応言うておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

こうして、部屋に入る許可が下りた。中は二人部屋だというのに広々とした間取りになっていて、外側の壁が一面窓になっている。そこから見える風景はこれまた素晴らしくて、海がぼつちり見渡せる。東向きの部屋だから、きつと日の出も抜群にきれいに見えるだろう。因みに、布団は三組用意されてある

「おおー、すげー」

「たしかに、すごいね〜」

それ以外にもトイレ、バスはセパレート。しかも洗面所まで専用の個室になっている。

「一応、大浴場も使えるが男のお前達は時間交代だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前達二人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋のほうを使

え

「「わかりました」」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「えっと、織斑先生は？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々ある。しかしまあ……」

ごほんと咳払いする織斑先生

「軽く泳ぐくらいはするとしよう。お前達がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですね」

少し笑みを零せば先生は照れくさそうに頭を掻く。一夏はほほえましそうに眺めている

コンコン

ノックの音に皆がドアのほうを向く

「織斑先生、ちょっとよろしいですかー？」

この声は・・・山田先生だね

「ええ、どうぞ」

その返事を聞いて山田先生がドアを開ける。そうすると、ちょうど入り口に立っていた一夏と目が合った

「わあっ、織斑君！」

「いや、そんなに驚かなくても・・・」

まあ・・・入る前には織斑先生のコエがして、入ってきて最初に見たのが一夏なら驚くかもしれない。しかも、ついさっきまで書類に目を通していたらしく、驚きが倍増していたようで

「ご、ごめんなさい。ついつい忘れていました。織斑君は織斑先生のお部屋でしたね」

「山田先生。確かこれはあなたが提案したはずだったか？」

「は、はいいいっ。そうです、はいっ。ごめんなさい！・・・あ、

でも、碇君の提案は確か、おりむ……」

「山田先生、あなたとは一度じっくり話し合いをしなければな」

そこには鬼神のごときオーラを出している織斑先生がいた

「ひ、ひえええっ！ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

あわれ、山田先生は確実に”何か”されるんだろうなあ

「さて、織斑、碇、私達はこれから仕事だ。どこへでも遊びに行つて来い」

「は、はい。それじゃあ早速、海にでも」

「うむ、羽目を外し過ぎないようにな」

僕たちは荷物から取り出したリュックサックに水着とタオル、替えの下着を入れて部屋を出る

「びびったな……千冬姉いきなり怒り出すんだもんな」

「でも、山田先生は何を言おうとしたんだろう？」

「さあな、それより、早く行こっぜー！」

「うん、わかったよ」

そして、教員室からは謎の悲鳴が上がったそうだが……聞かなかったことにした

「……………」

「……………」

「……………」

僕と一夏は別館にある更衣室に向かう途中で篠ノ之さんとぼったり出くわした。それ自体は特にいいのだが、問題は目の前の変な光景だった

道端に、うさぎの耳が生えているのだ。因みに、耳は生のものではなく、いわゆる『ウサミミ』といったもの。バーさんがしているアレ。ただし、目の前のウサミミは白色である。しかも『引っ張ってください』という張り紙がしてある

「なあ、これって……………」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

一夏が言い切る前に全否定した篠ノ之さん。なんでだろ？

「えーと………抜くぞ？」

「好きにしる。私には関係ない」

そういうと、篠ノ之さんはすたすたと歩き去ってしまう。

「のわっ！」

振り返ると、盛大にすっころんだ一夏がいた。そして、そこにセシリアが現れた

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。いや、今このウサミミを………あ」

一夏が声のほうに視線をやればその視線はセシリアのスカートの中に行くわけで………

「!?!、一夏さんっ!」

セシリアはスカートを押さええて後ずさる。まあ、当然だろうね

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えていて、それで……」

「は、はい?」

とその時

キィイン……………。

え、何?この何かが高速で向かっているかのような……………つて、うわぁ!

ドカーン!!!!

謎の飛行物体は盛大に地面に突き刺さった。その衝撃で僕は吹っ飛んだ、そして振り向くとそこには……………

「に、にんじん……?」

僕の呟きに一夏とセシリアが見事にハモった。しかも、イラストチツクなデフォルメにんじん。

「あっはっは！ひっかかったね、いっくん！」

ぱかっと思つ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのは一人の女性

「……一夏、誰？」

「篠ノ之束^{しののたばね}。ISのコアを作れる唯一の女性だよ」

「やーやー、自己紹介の手間が省けたよ、いっくんありがと〜」

「どうも……というか、お久しぶりですね、束さん」

なるほど……これが僕のIS作成者、篠ノ之束か……見た目はおっとりとした美人さん。だが、性格がそれをぶち壊している……
・気がするのは僕だけだろうか？

服装も青と白のワンピース。まるで不思議の国のアリスに出てくるアリス。だが、一夏からウサミミを受けとって、頭に装着する。まるで一人不思議の国のアリスである

「うんうん、お久だね。本当に久しいねー。ところでいっくん。篝ちゃんはどこかな？さっきまで一緒だったよね？トイレ？」

「えーと……」

一夏は答えに戸惑う。篠ノ之さんは東さんを避けてどこかいったらしいので、それを言えだせずにいた

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあね、いっくん。またあとでね！」

すったったーと走り去っていく東さんはすごく速かった。

一夏は今の人物についてセシリアに説明中

「一夏、先に行ってるね？」

「おっ」

僕は先に更衣室に向かった

シンジは今、男子更衣室で水着に着替えていた。

「うっ……この壁、薄すぎるよ……」

シンジは隣から聞こえてくる女子の黄色い声に参ってしまった

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの〜?」

「きゃあっ!も、揉まないでよっ!」

「ティナって水着だったーん。すごいいね!」

「そう?アメリカでは普通だと思うけど」

シンジにはたまらないー(恥ずかしい意味で) 時間だった

手早く水着に着替えてシンジは砂浜に繰り出した

「う、うそっ!わ、私の水着姿変じゃないよね!?大丈夫だよね!」
「?」

「わ、碇君、意外と体鍛えてるんだね」

「そうかな？よくわかんないけど」

更衣室から出てすぐに数人の女子と出会う。なかなか可愛い水着を着けていて、少し照れてしまう

「シーンージ！」

名前を呼ばれて振り向こうとしたら背中に飛びつかれてしまった

「うわぁ！……って鈴？いきなり飛びつかないでよ」

「いいじゃない。へるもんじゃなし」

心の純情が減っちゃっよ！

「アンタ、見た目の割には結構がっしりしてるわね」

そう言いながら鈴は体をベタベタ触ってくる

「り、鈴、くすぐりたいよ！」

「よいではないかよいではないか」

ちよっ・・・鈴ってこんなキャラだった!?!?!

「いーかげんにしなさい!」

スパアン!!!

「いったあ! って誰よ!」

気持ちよく頭をはたかれて、おもわず振り返る鈴。そして僕も振り返る。そこにはハリセンを肩に乗せたアスカがたっていた

「アンタねえ、シンジから離れなさいよ!」

「いーじゃん、もう少し・・・ってちよっと!」

抱きついていていたシンジから離される。その元凶であるレイがシンジと鈴の間に立つ

「・・・独り占めは・・・ダメ」

ちなみに、鈴の水着はスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白のストライプが入った物

アスカの水着は、赤一色のビキニで胸元にリボンがついている

レイの水着は、全体的に白であるが、ところどころに黄色い柄と黒色のラインが入っている

「みんな、水着似合ってるね・・・可愛いよ」

本当にそうおもったので、嘘偽りなく答えた

「そ、そうかなあ・・・えへへ」

鈴は予想以上にデレてしまっており

「あ、あたりまえじゃない！もうちょっと他に台詞はなかったの？
まったく・・・」

アスカは文句を言っているが、内心は、飛び跳ねるほどの喜びで

「・・・・・・・・・・あ、ありがと・・・」

レイに至っては俯いて恥ずかしそうにしていた

「お〜い、シンジー……ってなんだこりゃ？」

「あはは、こまったね……」

とりあえず、先に復活した鈴に話しかけた

「えっと……これからどうする？」

「あ、あたしは……ちょっと休んでくるわ……なんかふらふらするし」

「大丈夫？鈴？無理しちゃだめだよ」

「あはは、ありがとう」

そういつて木陰に向かって歩き出した鈴……大丈夫かな？

その実、木陰で休みながら、シンジの体の感触を反芻していた鈴だった

「じゃあ、シンジ、私達も向こうで遊んでくるわ」

「私は、碇君といる」

「はいはい、こっちいらっしやい」

そう言いながら、アスカは綾波を連れて他の女子に混じっていった

僕たちは時折、女子と遊びながら海を満喫していた

途中、一夏はセシリアに呼ばれてパラソルの方に行ってしまった。
その後すぐに奇妙な物体と一緒にいるシャルロットを見つける

「あ、シンジここにいたんだ」

「うん……ていうか、これ、なに？」

バスタオルを何枚も重ねて全身を隠している人らしきものを指を刺した

「ほーらー、出てきなって、大丈夫だから」

「大丈夫かどうかは、私が決める」

あ、この声はラウラだ。だけどいつものような自信に満ち溢れた声ではない

「せっかく水着に着替えたんだから、シンジに見て貰わないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー、そんなこといってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあるとおもっけどなあ」

そういえば、風邪の噂でシャルロットとラウラは同室になったらしい。色々あったけど、今はルームメイトとして仲がいいようだ

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕もシンジと遊びに行こうかなあ」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。シンジ、いこっ」

そう言うなり、手を掴んで僕を海へといざなう

因みにこの行為はラウラにバスタオルを取らせるためだけのものということは二人とも理解していた。これぞまさにシンクロ……
・・なわけないか（笑）

「ま、待てっ。わ、私も行くっ」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

そういうと、数枚のバスタオルをババツとかなぐり捨て、水着姿のラウラがその全貌を現す

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

ラウラの水着は、黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらった物で、一見すると、大人のセクシー・ランジェリー下着にも見える。さらに、いつも飾り気のない伸ばしたままの髪は左右で一對のアップテールになっている。僕は思わず……

「可愛い……」

「なっ……！」

「だよねえ。おかしなところなんてないよね、シンジ」

「うん……」

つい、かわいいと言ってしまった。それほどまでに……可愛かった。

そんな僕の言葉が予想外だったのか、ラウラは驚きに一瞬たじろいだ後そのままかあっと赤面した

「じゃ、社交辞令ならいらん……」

「え、今のはかなり素な発言だったとおもっよ？ねえ、シンジ」

「うん、そうだよ。本当にかわいいもの」

「そ、そうか……」

ラウラは赤面しながらゆっくりと頷いた

「じゃ、僕は向こうにいる一夏のところに行ってくるね」

「はい」

シャルロットは僕たちを残して一夏のところに行った

「少し木陰のところに行こう……熱い」

「わかったよ」

ラウラと一緒に木陰に行き、そこで二人並んで座った

「シンジ」

「何？」

「……本当に似合っているのか？……この水着」

「うん、すごく似合ってるよ。すごく可愛いし」

「そ、そうか……」

平静を装いながらも、心臓は苦しいほどに鼓動を打っていた

うっ……照れてしまう……だが……うれしいな、私を
一人の女としてみてくれているのか……

ラウラは頭をシンジの肩にのけてんと乗せる

「大丈夫？」

「うむ、しばらく、そうさせてくれ」

「うん」

傍目から見たら完全にカップルである。ラウラは静かな喜びをかみしめていた。と、そこに

「む、お前達か、休憩か？」

仕事をひと段落させた織斑先生がやってきた。あ、僕の選んだ水着を着てる

「はい」

「ふむ、碇、隣いいか？」

「あ、どうぞ」

僕は少しラウラの方に詰める。ラウラが顔を赤くしていたので問いかけると『なんでもない』と言われてしまった

「そういえば碇、好きな女はできたか？」

「ええっ！？ま、まだ・・・いませんよ？」

「なるほどな・・・そのラウラなんかどうだ？お前に一途だし、

お似合いだとおもっのだが」

「きよ、教官！」

スビシ！織斑先生のチョップがラウラの頭に入った

「っ……すみません……織斑先生」

「気をつけるよ」

「しかし、こうなると……私でも……ふむ」

織斑先生がなにやらぶつぶつと呟いている

ラウラはそこから何かしら感じ取ったのかシンジの腕を抱きしめて
言い放つ

「い、いくらきよ……織斑先生でも、嫁をやるわけにはいきま
せん……！」

「ほう……この私に宣戦布告とはな……くっくっく……」

その笑みはさながら『私に勝てるだけでも？』といった笑み。実際は
ここまで言うようになったラウラの変化に驚いての笑みなのだが、
イメージ故になかなか理解されない

「うむ、肝に銘じてお」

領く千冬。だがそれでも引かない人ということはラウラ自身がよく知っている

「ラウラー、ちょっといいかな？」

遠くからシャルロットが呼ぶ声が聞こえるラウラはシンジと千冬の顔を交互にみて

「行って来い、見てないところで掠め取ったりはせんよ」

「は……では、失礼します。シンジ、浮気はするなよ」

そういつてシャルロットのところに駆け出すラウラ

「浮気って……まだ付き合っていないんだけど」

「まあ、アイツもそれなりに必死なのだろうな」

その原因を自分が作っていると認識しているうえでの発言なのがこの人のすごいところだ

「で、どうだ、水着は似合っているかな？」

そういつて立ち上がる織斑先生

うう・・・水着だけでもセクシーなのに・・・これはすごい

ぼーっと惚けたように千冬を見上げるシンジ。その様子に千冬は

「ふふ、その表情は、どうやら似合っているようだな」

「えー？あ、は、はあ・・・かなり似合ってますよ」

ちらちらと大胆に開いた胸元に目が行ってしまう。シンジも男の子である

「いら、どこを見ているか、馬鹿者」

どうやら、バレたらしく軽くデコピンされて、先生は後ろを向いてしまうが、デコピンは痛くなく、先生の頬は若干赤みがかっている。

まあ、誰だって胸を見られたら恥ずかしいかな？

シンジも大概ニブいのである

「そろそろ、戻らなくていいのか？昼飯時だぞ」

「そ、そうですね・・・先生はまだ？」

「うむ、少し見回ってから戻るとしよう」

「じゃ、先に戻ってますね」

「うむ」

そう言い残し、僕は旅館へと戻った。

そして昼食を食べた後はいつもの専用機持ちメンバー+アスカとレイで久々の海を満喫した

だが・・・シンジと一夏の女難はまだまだ続く・・・

第十八章 臨海学校〜ドキッ！女の子だらけの白い砂浜〜（後書き）

次回予告

夜の旅館で夕食をとるシンジと一夏

だが、セシリアが脚を痺れさせてしまい一夏が食べさせることに

起こるブーイング

シンジにねだるラウラ

そして、シンジにせまる千冬の魔の手（？）

ラウラはシンジを守りきれるのか！？

次回 夜に巻き起こる恋の嵐

シンジは生きて帰れるのか（帰れますw）

第十九章 「夜に巻き起こる恋の嵐」(前書き)

え、こんにちは、ぐぎゆるです

以前言っていた次回作ですが、ヒロ系の性格で、つかまんまなキ
ヤラでいきます、機体は全身装甲のサバーニヤで(え

ま、お楽しみにといったところですか

第十九章 〓夜に巻き起こる恋の嵐〓

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

現在午後七時半。僕たちは今、大広間三つを繋げた大宴会場で夕食を取っていた。そしてみんなは一樣に浴衣姿である。この旅館の決まりらしい。普通逆だよね・・・

因みにメニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種、赤出汁の味噌汁とお新香。一夏によれば、この刺身はカワハギらしく、最近は高級魚らしい。確かに美味しい。小気味良い歯ごたえとクセのない味がいい。しかもキモ付きだと一夏は大層喜んでいた。一夏が年寄り臭く見えてきた・・・はは。

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

たしかに、この美味しさは半端じゃなく美味しい。わさびがほんのりと効いた感じがなんともいえない

つて、シャルロットが本わさの山を食べた。うわ……

「~~~~~!!!」

案の定、鼻を押さえて涙目になるシャルロット。まあ、そうなるよね……

そして一夏の反対側の隣の席では……

「~~~~~」

セシリアが苦手な正座に苦しんでいる

「大丈夫か？セシリア。顔色良くないぞ」

「だ……い……よう、ぶ……ですわ……」

いや、全然大丈夫じゃないし……見てるだけでも痛々しい感じがする

と、一夏がセシリアに食事を食べさせてあげようとしている。それをみた女子達が大ブーイング。にわか騒がしくなってくる

「シンジ」

「ん？なに、ラウラ」

「私にも食べさせるがいい」

え？

「えっと……まあ……いいけど」

幸い、一夏の起こした騒ぎで誰もこっちを見ていない。さすがに見られるのは恥ずかしいし、新たな騒ぎになりかねない

僕は箸でラウラの刺身を摘む

「はい、あーん」

「う、うむ・・・あ、あーん・・・むぐ」

「どう・・・かな？」

「う、うむ・・・なかなかだな」

だがその実、ラウラは味なんて理解できてない。シンジに食べさせてもらったということまで頭がいっぱいなのである

「どうにも、体力が有り余ってるようだな。それでは今から砂浜をランニングして来い。距離は・・・そうだな、五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！とんでもないです！おとなしく食事をします！」

そういつてみんなは各自の席に戻っていく。それを確認してから織斑先生が一夏に一言声をかけてこっちに来てきた

「ボーデヴィツヒ」

「は、はい」

「うらやましいものだな、ん？」

「あ、いや、その・・・」

まるで蛇に睨まれたカエルである

「誰が蛇か」

ゴスツと僕の頭に拳骨が落ちた・・・痛い・・・というかなんで心の
声がわかるのか

「まあ、二人ともほどほどにな」

「は、はい」

言うなり颯爽と去っていく先生。その姿がかっこいい

そして僕らは少しして食事を終えた。その途中でセシリアのテンシ
ョンがあがったりと、今日のセシリアは忙しいよね

食事の後、一夏と部屋にかえって、一夏は温泉に、僕は部屋のお風呂
呂入って今しがた出たところ。とそこに、部屋の主の織斑先生が帰
ってきた

「ん？一夏は風呂か」

「あ、はい」

「ふむ……お前でもいいか、すまんが肩を揉んでくれないか？」

「いいですよ」

織斑先生が椅子に座り、僕は後ろに回って肩を揉み始める

「あ、結構硬い、凝ってますね」

「ん……そうか？お前達には苦勞をかせさせられてるからな」

「あはは……面目ないですね」

ゆっくりと、強弱をつけながら揉んでいく

「なかなかうまいじゃないか……ああ、そこだ……んん……」

気持ち良さそうに声を漏らす先生にどうも落ち着かなくなる。その声が妙に色っぽいのである

「えつと・・・ここは？」

「っ・・・！いきなりは痛いだろう・・・とんだサディストだな」

「えつ・・・！？何を言い出すんですか！」

僕は顔を真っ赤にしながら反論する。ああ、もう！いきなり何を言
い出すんだこの人は！

「はっはっは・・・冗談に決まっているだろう。真っ赤になって可
愛い奴だな」

笑みを見せながら頭を撫でてくる先生。全く・・・もう・・・

「む・・・ちょっとまって」

先生が音もなくドアに近づき・・・ドアを思い切り開ける

「へびっ！！！！」

とても女の子の発する言葉とは思えない声を出してよろめくのはラ
ウラ

「まったく・・・盗み聞きとは関心せんな」

「い、いえっ！あ、あ、あの・・・」

「まあいい・・・入っていけ」

「は！？え・・・っ・・・はい・・・」

戸惑いながら部屋に入るラウラ、その顔は困ったような恥ずかしいようななんとも言いがたい表情だった

「あ、ラウラ、いらっしやい」

「う、うむ・・・そ、そういえば・・・さっきまで教官と何をしていた？」

「え？肩をもんでたんだよ。結構凝ってたみたいだし」

「なんだ・・・そうか」

なにかホツとした表情で胸を撫で下ろすラウラに首をかしげる僕

「私は少し見回りをしてるのでな、後は頼んだぞ、ボーデヴィック」

「りょ、了解しました！」

少し苦笑して部屋を後にする先生。そして……

「……………」

「……………」

無言。というか……すごく、気恥ずかしくなってきた……

ラウラもずっと俯いたまま、指を絡ませてもじもじしている

「え、えっと……飲み物入れてくるよ、何がいい？」

「う、うむ……では、ココアをもらおうか」

僕は頷いて、ラウラのホットココアと僕のブラックコーヒーを入れて戻る

「はい、ラウラ」

「うむ、すまないな」

ラウラにホットココアの入ったマグカップを手渡すと、早速ずずずと一口飲む

「ん・・・少し苦めだがうまいな」

「よかった、口にあって」

僕もコーヒーを一口啜る。ラウラはココアをペロペロと舐め飲む。猫みたいで・・・カワイイなあ

「うん？なんだ？」

「あ、いや・・・なんでもない」

見とれてた、なんて言える訳ないよ

「今日はなかなか楽しめたな」

「そっだね」

「明日はISの各種装備試験運用とデータ取りで一日つぶれるからな」

「うん、僕は機能特化専用パッケージが来るらしいし」

「なに？シンジのパッケージは『オートクチュール』なのか？」

「え・・・？何、そのオートクチュールって」

ラウラによれば、オートクチュールとは機能特化専用パッケージのことを指す言葉で、その専用機専用のパッケージのことらしい

「ふうん・・・そうなんだ」

「うむ。それだけシンジのISが特別なのだろうか」

「そうかなあ？よくわかんないけど」

ラウラが僕を見て笑みを零す。その笑顔が眩しくて頬を染めてしまう

「ふむ、なかなか仲のいいことで妬けてしまうぞ？」

いつの間にか部屋に帰っていた先生に僕たちは「わあっ」と言ってしまう

「い、いつからいたんですか！？」

「碓のISの話からだな」

「帰ってきたなら一言行ってくださいよ」

「はは、驚かそうとおもってな。どうやら成功したようだな」

屈託なく笑みを浮かべる先生。こんなに笑みを浮かべる先生も珍しい

「そろそろ就寝時間だ。織斑も戻ってくるだろう。ボーデヴィツヒは部屋に戻れ」

「はい、シンジ、ではまた明日な」

「うん、またね」

「では、私はもう一度見回りに行っておよう。大人しく寝ているよ」

二人は部屋を後にし、僕は三人分の布団を敷く。そこに一夏が帰ってきた

「おっ、布団強いてくれたのか、すまないな」

「うん、早く寝ようよ、暫くしたら先生帰ってくるし」

「そうだな、鬼を怒らせてもいいことはないしな」

またそんなこと言って・・・怒られても知らないからね

僕は一夏は布団にもぐりこむ

しばらくして・・・

シンジと一夏は夢の中

そのシンジの布団に侵入する影が一つ

その侵入者が動く度に体を回転させて寝苦しそつにするシンジ

「んゝ・・・なに・・・むぐっ!?!?」

僕は急に口をふさがれて驚き、そして目の前に人物にさらに驚く

「お、織斑先生!?!?」

小声だが驚くように声を上げて布団に入ってきている先生を凝視している

「どつだ、驚いたか？」

「お、驚きますよー！」

焦りながら喋るシンジ。因みに全て小声で話している

「たまには、こういうのもいいだろう」

いや、たまにはって・・・僕はここまで密着されたのは初めてなんですけど

因みに布団の中なので、互いの吐息がかかるほどの近さである

「ん？ラウラに抱き疲れても文句を言わなかったのに私が布団に入れば文句を言うのか？」

「え・・・そ、そういうわけじゃ・・・」

「ん、ならばいいだろう？」

千冬さんがぐいっと僕を抱き寄せせる。ちょうど顔が胸元に当たってしまつ。ちょ、ちょっ・・・！！！！

「静かにしろ、侵入者だ」

「え．．．？」

なにか、カチャカチャと音がして．．．

カチャリ

鍵が開く

ドアが開き、そして閉まる

足音はしない

「どつちやら、プロの様だな．．．忍び足とはな」

そして

どつちどつち．．．

「え……！？むぐっ」

布団に入ってきた侵入者に声を上げてしまつても、胸元で口をふさがれてしまう

「……誰だ？貴様」

先生が怒気を含んだ声で威嚇する

「なっ……教官！？」

その声に、僕も先生も驚いた

「ラウラ！？」

「ボーデヴィツヒか！？」

なんと、侵入者はラウラだった。どうやら最近千冬とシンジが親密なのを危惧しての行動らしい

「きよ、教官こそ、シンジと何を……？？」

「あ……う、これはだな……」

珍しくドモる千冬。その様子を冷ややかな目で見るラウラ

「まあ、いいでしょう。では今日はこのまま寝ますので教官は出ていただきます」

ぐいっとシンジを抱き寄せるラウラ。ちよっ……まっ

「おいおい……私だけ仲間はずれは関心せんな。三人で寝ればいいだろう」

千冬はラウラごとシンジを抱き寄せる

「あ、あの……僕に拒否権は……?」

「」「無」

あはは……はあ……

こうして、僕は一人に挟まれたまま、眠れない夜を過ごしたのだっ
た

第十九章 Ⅱ夜に巻き起こる恋の嵐Ⅱ（後書き）

次回予告

ついに始まるISの装備運用試験

そこに現れる篠ノ之束

姿を現す『赤椿』

そして『二号機』と『零号機』

さらに、鳴り響くアラーム

その時、『銀の鐘』が鳴り響く

次回 シン・レッド・ライン

新たに手にした力で少女は何を求めるのか

第二十章 ≡ シン・レッド・ライン ≡ (前書き)

ううう……こっちの更新が遅くなってしまった……陳謝です……

第二十章 「シン・レッド・ライン」

合宿二日目

今日はISの各種装備試験運用とデータ取りの追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているので大変だ

「ようやく全員集まったか。……おい、遅刻者」

第二十章 シン・レッド・ライン

「は、はいっ」

意外や意外、その人物はラウラだった。どうやら途中で自分の部屋に帰ってから再び眠って……寝坊してしまったらしい

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換の止めのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャンネルとプライベート・チャンネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『シェアリング非限定情報共有』をコア同士が各自に行うことで、さまざまな情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは製作者の篠ノ之博士が自己発展の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めてないとのことですよ」

「さすがに優秀だな・遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、ふうとため息を吐くラウラ。まあ、拳骨を食らうよりはましだよな

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

「はい、と一同が返事をするさすがに一年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。

因みに現在位置はIS試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ドーム上になっていて、どこか学園のアリーナを連想させる

ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的
当然ISの稼働を行うので、全員がISスーツ着用姿だ。海だとま
すます水着に見えたり

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた篁は、織斑先生に呼ばれてそちらに向かった。なんだろ？

「お前には今日から専用……」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

ずどどどど……!と砂煙を上げながら人影が走ってくる。ものすごく速い。よく見るとISっぽい何かをつけている。よく見ると昨日、海に行く前に出会った人だ、たしか……

「…………束」

そう、篠ノ之束さん。ISの製作者で、一夏が言うには『その才能は天井なし。天才の中の天才。自称一日を三十五時間生きる女』とか。まあ…………とりあえず、すごいってことはわかった

その天才が立ち入り禁止のはずの臨海学校に堂々乱入してきた

「やあやあ、会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ…………ぶへっ」

跳びかかってきた篠ノ之博士を片手で掴む。しかも顔面。いわゆる『アイアンクロー』。親しき仲にも容赦なし

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ…………相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

するりと拘束から抜け出して、「よっ」と言っって着地する。す、す、す…………

と、今度は篠ノ之さんの方を向く

「やあ！」

「……………どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おツきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ！」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……………。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！篝ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙目になって訴える篠ノ之博士。明らかにあなたが悪いと思う…………。

「え、えっと、この合宿は関係者以外……………」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ISの開発者というなら、一番はこの私おいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……………」

山田先生、完全に言いくるめられた感じだ

「なるほど、つまりは何かしら篠ノ之博士でないとダメな作業があるから来たんですね。つまり、”遊びに来た”わけではないと」

瞬間、篠ノ之博士の眉がピクンと反応した。どうやら、図星らしく、織斑先生もやれやれといった表情

「や、やあやあ、面白いこと言うね君……………もしかして君が……………」

「そっだ、碇シンジだ」

篠ノ之博士と僕の間には織斑先生が割り込んでくる

「ふ〜ん……………まあ、君は後にするとして……………」

何か、スイッチの付いた小さい箱を取り出して

「それで、頼んでいたものは……………?」

「はいはい、すでに準備済みさ。さあ、大空をご覧あれ!……………ポチツとな」

古っ！！！！・・・と心の中で突っ込んでしまった

みんなが空を見上げると・・・

ズズーンッ！！！！

空から三つの金属の塊が落下してきた。銀色をしたそれは、正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を見せる

一つは全身が赤色のIS

一つは赤色に黄色や黒の色が映えるIS

一つは黄色に黒のラインがイカすIS

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『あかりはき赤椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！あ、あとはついでにちよちよいと作ったIS二機だよ」

綾波とアスカのISの紹介がおざなりに・・・ってさっき全スペックが現行ISを上回ってるっていつてなかったかな？

「さあ、篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん ああ、あと、綾波と式波とかいう奴も来てよ〜」

「……………私達の扱いがすごく不当に感じるのは気のせいかしら？」

「……………私もそう思うわ」

二人が不満そうにぼやく。やっぱりそう思うよね

ピッ、とりモコンのボタンを押すと、三機の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る。しかも自動的に膝を落として、乗り込みやすい姿勢にと変わった。なんか、すごいなあ

「篝ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから、後は最新データに更新するだけだね。ああ、そっちの二人のデータもいれてあるからちよつとまっつてなよ〜つと、さて、ぴ、ぽ、ぱ」

コンソールを開いて指を滑らせる篠ノ之博士。さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出して膨大なデータに目配りをし始めた。見えていてわかるけど……………恐ろしくすごい

「碇、お前は二人の補佐に回れ。私も手を貸そう」

「え？……………わ、わかりました……………」

僕は言われるままにアスカの隣に行って、フィッティングとパーソナライズを始める。そして僕の補佐に織斑先生が付く

が、それを良しとしなかったのが……篠ノ之博士だ

「ちーちゃん！？そんな奴の補佐に付くなら私の……むぎゅっ」

「そんな奴……だと？」

再びアイアンクロー炸裂。しかも心なしか先ほどより威力が上がっている

「むぐぐ……い、いたい〜ゴメンよ〜ちーちゃん」

「ふん……」

一回睨みつけ、篠ノ之博士を解放する

「うっ、いっっ……」

「さっさと、作業を進めろ」

「あいあいさー」

ケロッとして再び作業を始める篠ノ之博士。タフだ

「バカシンジ！アンタも作業進めなさいよ！」

う、怒られてしまった

結局、僕はアスカの分を済ませたときには篠ノ之博士が篠ノ之さんと綾波の分を終わらせていた

「やっぱり速いですね、博士は」

「むふふ、もっと褒めるがよい」

「気にするな、アレしかとりえのない女だ、お前もなかなかだったぞ」

また撫でられた……どうも一部の人の視線が気になるけど……
・やっぱり恥ずかしい……

「あー！ちーちゃんが異常に優しい……あ、ありえない……」

ばたりと倒れてしまう博士

「あゝ・・・んんっ、お前達、手が止まっているぞ」

こちらを見ている生徒に作業を促す織斑先生。なんとなくごまかそうとしている気が？

「でも・・・身内っただけで専用機もらえるなんて・・・なんかズルイ」

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等だったことは一度もないよ」

倒れたまま顔だけをグリーンと向けてピンポイントで答える篠ノ之博士。それが聞こえて慌てて作業に戻る女性徒

とそこに

「たっ、た、大変ですっ！お、おお、織斑先生っ！」

いつも以上に慌てている山田先生に織斑先生も怪訝な顔をして振り

向く

「どうした？」

「いっ、いっ、これをつ！」

渡された小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇る

「特務任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動していた……」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

織斑先生がなにやら小声で話をしている。何人かの視線に気付いたのか、会話を止めて手話でやり取りを始めた。聞かれるとまずい何か緊急な事でも起こったのだろうか？

「そ、そ、それでは、私は他の先生に達にも連絡してきますのでっ」

「了解した。……全員、注目！」

山田先生が去った後に、織斑先生はパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日の稼働テストは中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え………？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って………」

「状況が全然わかんないんだけど………」

ざわざわと辺りがざわつき始める。いきなりで無理もないことなのだが、業を煮やした織斑先生がの聲が一喝した

「さつさと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな……！」

「……はっ、はいつ……！！」「……」

全員が慌てて動き始める。装着していたテスト装備を解除、ISを

起動終了させてカートに乗せる。その姿は今まで見たことの無い怒号に怯えているかのようであった

「専用機持ちは全員集まれ！碇、織斑、オルコット、デユノア、鳳、ポーデヴィツヒ！・・・それと、篠ノ之、式波、綾波も来い」

「はい！」

篠ノ之さんの返事が妙に気合が入ったものになっている。その顔はどこか嬉しそうに見える。そしてそれを見て怪訝な表情を見せる一夏・・・どうしたんだろうか？

そんな一夏の表情に僕は一抹の不安を覚えた

旅館・風花の間

Side 一夏

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、俺達専用機持ち全員と教師陣が集められた

照明を落とした薄暗い室内に、ぼうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御化を離れて暴走。監視空域から離脱したとの連絡が入った」

いきなりの説明に、俺は面食らつてばかんとしてしまう。……

・え？何？軍用IS？それが暴走？なんで俺達に連絡が？

軽い混乱に見舞われた俺は、他のメンバーの反応が気になって周囲に視線をやる

「……………」

全員が全員、敵しい顔つきになっていた

特に俺が驚いたのが、シンジ、式波さん、綾波さんだ。この三人、最初驚いたようだったが、すぐに真剣な表情になった。まるで、この状況に慣れている感じだった。それにしても順応が早すぎだろ

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続ける千冬姉。その次の言葉は思っても見ない言葉だった

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

は、はい？つまり、暴走した軍用ISを……俺達で止めろって！？

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは挙手するように」

「はい」

早速、手を上げたのはセシリアだった

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁

判と最低でも二年の監視をつけられる」

「了解しました」

未だに状況を飲み込めずにいる俺に対して、セシリアを始め、専用機持ちの面々と教師陣は開示されたデータを元に相談を始める

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISSと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね。しかも、スペックでは上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は厳しい気がするよ」

「……私達のフィールドなら防げるわ」

「何言ってるのよ！私達のフィールドは耐久力つきなの。防げるけど、壊れるの。わかる？」

「……確かにそうね、御免なさい」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャル、ラウラ、それに綾波さんと式波さんも意見を交わしている。俺は、混乱は収まったのについて行けなかった。正直、情けない

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が俺の方を見る

「え……?」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は……」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！お、俺が行くのか!?!」

「『『当然』』』」

四人の声が見事に重なった

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

.....

千冬姉にそう言われて、俺はわずかに及び腰になっていた自分を蹴り飛ばす

「やります。俺が、やってみせます」

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる期待はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

全てのISにはこの『パッケージ』が呼ばれる換装装備を持っている
パッケージとは単純な武器だけでなく、追加アーマーや増設スラス

ターなど、装備一式を指し、その種類は豊富で多岐にわたる。

これを装備することによって機体の性能と性質を大幅に変更し、様々な作戦が遂行可能になるというものだ。因みに、俺も含めて一年の専用機持ちは今のところ全員がセミカスタムの標準^{デフォルト}装備である

あ、シャルだけはフルカスタムのデフォルト……って紛らわしいな

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それならば適任……」

だ、な、と言おうとした千冬姉の声を、いきなり底抜けに明るい声が遮る

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

しかも、声の発生源はどこかというと、天井からだ。全員が見上げると、部屋のご真ん中の天井から束さんの首が逆さに生えていた

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……………」

「とっつ」

くるりんと空中で一回転して着地。その鮮やかな身のこなしはサーカスのピエロも顔負けだ。どこまででたらめなんだ、この人は……

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にノウ・プリンティング！」

「……………出て行け」

頭を押さえる千冬姉。山田先生は言われた通りに束さんを室外に連れて行くとするが、するりとかわされてしまう

「聞いて聞いて！ここは断・然！赤椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「赤椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動が出来るんだよ！」

束さんの言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬姉を囲むよ

うにして現れる

「赤椿の展開装甲てんかいそくじゅうを調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでス
ピードはばっちり！」

展開装甲……つてなんだ？
と知っている、横から意外な人物が割り込んできた

「それなら……僕のISに『F型装備』をつけてもいけるん
じゃないですか？」

それはシンジだった

Side シンジ

僕は、前に一歩出て口を挟んだ

「僕の『F型装備』の初号機なら赤椿やストライク・ガンナー装備
のブルー・ティアーズと最高速度は互角。後は戦闘経験ですが、篠
ノ之さんはセシリアや僕に比べたら圧倒的にIS戦闘の経験値が少

ないと思います。だから、この作戦は僕がセシリアが良いと思います」

「……………なるほど、確かに碇の言うことも確かだな」

「え〜？でもでも、よく見たら、まだ不完全なのか『F型装備』の初号機の稼働可能時間は二〇分だよ？」

「……………確かに……………これでは万が一のときに困るな……………」

この時の初号機は『S2機関』を搭載してないため、『F型装備』での稼働可能時間が恐ろしく短かったのである

「あ……………ほんとだ……………」

僕は驚きながら見入った

「珍しいわね、バカシンジが積極的に戦闘に関わろうとするなんて」

「あ、ああ……………たまにはね……………」

本心は、篠ノ之さんがどうも気になる。好きとかそうじゃなくて、何か戦いに行きたそうな雰囲気だからだ

「ただ、同じ速度を出せるのなら経験上、オルコットが適任だが・・・」

「んとう・・・それ、インスタール量子変換済んでるのかにゃ？」

「そ、それは・・・まだですが・・・」

「因みに赤椿の調整時間は七分あれば余裕だね」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目的の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三〇分後。各員、直ちに準備にかかれ」

その後、篠ノ之博士から赤椿についての説明で第4世代型ということとがわかり、皆を驚かせたり

篠ノ之さんと話していた一夏が織斑先生に拳骨食らったり

セシリアが一夏にレクチャーしようとしてみんなに先を越されて拗ねたりと

いろいろしている間に時間となった

時刻は十一時半

「来い、白式」

「行くぞ、赤椿」

二人がISを呼ぶ。やはり、篠ノ之さんが嬉しそうに見える。悪く言えば浮かれている

二人の会話の内容を聞いても、やはり篠ノ之さんは浮かれているように見える

織斑先生が二人に話をしている。僕はその間に量子変換した『F型装備』の最終チェックを済ませる

『では、はじめ!』

織斑先生が号令をかけ、こちらにやってきた

「何をしている?」

「一応、準備を。万が一がある可能性がありますから」

「……篠ノ之のことか」

やっぱり、先生も気がついてたのか

「はい。妙に浮かれてる感じがしたので……」

「専用機を手にいれて喜ぶのはいいがな……一応待機しててくれ」

「はい」

そして、作戦失敗の連絡が入ったのは暫くしてからだった

第二十章 「シン・レッド・ライン」 (後書き)

次回予告

銀の福音の撃墜に失敗し大怪我を負った一夏

項垂れる箒

箒に激昂する鈴

そして現れる使徒

この状況を切り抜けられるのか

次回 ドレッシィ・ホワイト
雪羅

白き鎧をまとつ少年が仲間を守るため飛翔する

第二十一章 〓 雪羅 (ドレツシイ・ホワイト) 〓 (前書き)

どうやら東さんはシンジを敵とみなしたようですね

がんばれシンジ (ナニヲ

第二十一章 Ⅱ 雪羅 (ドレッシィ・ホワイト) Ⅱ

第二十一章

ドレッシィ・ホワイト
雪羅

それは一夏がまだ小学二年だったころの事だ

千冬に付き合わされる形で始めた剣道も一年が経ち、それなりに様になっていた

ったくよー。あいつはー……………

道場の娘で同い年の女子とは、どうにも馬が合わない。今朝も朝練で衝突して試合に発展、胴薙ぎ一本で負けた日だった

あーくそー……………。勝てねえかなあ……………勝ちてえなあ……………

そんなことを考えながら、一夏はぶすつとした顔で教室の掃除をしていた。放課後の夕焼けが眩しい

自分以外のクラスメイトはサボって遊びに行っているのを知ってはいたが、別にどうとも思わない

誰かがやらなければいけないなら、自分がやるだけだ、と

「おい、男女。きょうは木刀持ってないのかよ」

「………竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな」

「………」

「喋り方も変だもんな」

女子は、答えない

三人の男子が取り囲んで一人の女子をからかっている

そんな状況の中で、けれど少女は凜とした眼差しで相手を睨み、一歩も引こうとはしない……その女子の名前は、箒といった。

「やーいやーい、男女」

「……………うつせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

いい加減、無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に向かってそう言い放つ

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、おまえこの男女が好きなのか？」

古今東西、子供のからかいというのは度し難い
そしてそれは、たとえ同じ年であろうとも一夏には不快極まりなかった

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。真面目に掃除なんかしてよー、バツカじゃねーの……………
おわっ!？」

いきなり、箒が男子の胸倉を掴んだ。その手は小学二年生とはいえ、
日々の鍛錬で鋭く鍛えられている

本気で殴り合いをしたら、おそらく男子三人でも負けはしない

けれど、何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉にだけは
反応した

「真面目にすることの何がバカだ？お前らのような輩よりはるかにマシだ」

「な、なんだよ………何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」

強靱な腕で締め上げられてもがく男子とは別に、残りの二人はまだニヤニヤと笑いをうかべている

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

うわ、出た。夫婦夫婦って、こいつらそついうの好きだなー。あきたつつうの

箒の道場に通うようになってから、そう言われたのは別に一度や二度ではない。

そもそも、両親がいない………つまり夫婦の概念が希薄な一夏にとっては痛くも痒くもない

「だよなー。この間なんか、こいつりボンしてたもんな！男女のくせによー。笑つちま……ぶごっ！？」

今度、一夏が怒りをあらわにした。それだけでは済まず、顔面に拳を叩き込む
ぼかんとしている男子をよそに、一夏は倒れた相手を片腕で立たせて締め上げた

「笑う？何がおもしろかったって？あいつがりボンしてたらおかしいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？何とか言えよボケナス」

「お、お前っ……！！先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る」

それは三人相手に大立ち回りをした一夏が、騒ぎを聞きつけてやってきた教師に取り押さえられて終わった

普段から剣道だけでなく千冬に体術をならっているせいもあって、三人相手でも一夏は引けを取らないどころか圧勝だった

しかし、それがまずかった

馬鹿な子供の親は馬鹿というのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎ立てる馬鹿な生き物が三匹いた

一夏は気にも留めなかったが、そのせいで無意味に千冬が頭を下げさせられているのが許せなかった

『問題を起こせば千冬姉の迷惑になる』

そのことを学んだ一夏は以後暫く穏便な方法で馬鹿な男子を撃退した

「……………おまえは馬鹿だな」

「あん？何がだよ。馬鹿じゃねえよ馬鹿」

数日後、放課後の修行を終えて顔を洗う一夏に、珍しく箒が話しかけてきた

「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか？」

「ん？ああ、あのことがそうだな、考えねーな。許せねえ奴はぶん殴る」

それで一度、千冬からひどくお叱りを受けたことがあったが、けれどこれは曲げられないことだった

それが幼い一夏びただひとつある譲れないことだった

「大体、複数でっていうのが気にいらねえ。群れて囲んで陰険なんざ、男のクズだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから、お前も気にすんなよ。前にしてたりボン、似合ってたぞ。またしろよ」

「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

腕を組んでそっぽを向く筈に、そーかと返事をしてまた顔を洗う一夏。この冷たく心地よい井戸水で練習の汗を流すのが、たまらなく好きだった

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ之」

「・・・・・・・・だ」

「うん？」

「私の名前は筈だ。いい加減、覚える。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」

「わかった。俺は割りと、身近な奴の指図は受ける。・・・・・・・・じやあ、一夏な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。織斑は二人いるから、俺のことも一夏って呼

べよな
「

「う……む

「わかったか、篝

「わ、わかっている！いい、いい、一夏！これでいいのだろう！？」

「おう、それでいいぜ。……指図じゃなくて頼みならちやんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

最後に強がりを残して立ち去る篝を、一夏はおかしな奴だなあと思
いながら見送った

季節は六月。もう夏はそこまで来ていた

S i d e 篝

旅館の一室。壁の時計は四時を指している

ベッドで横たわる一夏は、もう三時間以上目覚めないままだった

その傍らに控えている箒は、もつずっとこうして頂垂れている
リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちを表しているようだ
った

一夏と箒が撃墜に向かったのだが、失敗。それだけならまだしも、
封鎖したはずの海域に密漁船がいた

一夏がそれをかばい、エネルギー切れを起こし、さらに赤椿もエネ
ルギーが切れ、福音の攻撃から箒を庇い、重傷を負い、今に至る

私のせいだ……

不意に思い出した思い出の中でも、一夏は笑っていた

けれど、その笑顔は今はない。ただ力なく横たわっているだけだ

ISの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれて、一夏の至
る所に包帯が巻かれている

私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に……!!

ぎゅっととスカートを握り締める。その拳は白く色を失うほどに強
く、強く握り締めた

自らを戒めるように、強く、ただただ強く

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』

私は……………どうして、いつも……………

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう

それを使いたくて仕方がない

沸き起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある

何のために修行をして……………

箒にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった

……………
枷シミスター

自らの暴力を押さえ込むための、抑止力

けれど……………それは非常に危うい境界線なのだと思います

薄い氷の膜の様に、ほんのわずかな重みで壊れてしまう

私はもう……………ISには……………

一つの決心をしようとしたときに、突然ドアが乱暴に開く
バンツ！という音に一瞬驚いたが筈だったが、その方向に視線を向
ける気力はない

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

遠慮なく入ってきた女子は、項垂れたままの筈の隣までやってくる。
その声は………鈴だった

「……………」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど筈は答えない。答え、られない

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんですよ？」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態
になっている

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、
同時にISの補助を深く受けた状態になる
それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚まさ
なくなってしまうのだった

「・・・・・・・・・・」

「で、落ち込んでますってポーズ？・・・・・・・・つぎけんじじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、頂垂れたままだった箒の胸倉を掴んで無理やりに立たせる

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私は、もうI Sは・・・・・・・・使わない・・・・・・・・」

「つ・・・・・・・・！！！」

バシッ！

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる

そんな箒を再度鈴は、締め上げるように振り向かせた

「甘ったれてんじゃないわよ・・・・・・・・。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママ許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは・・・・・・・・」

鈴の瞳が、篝の瞳を直視する

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情

「戦うべきに戦えない、臆病者が」

その言葉で篝の瞳、その奥底の闘志に火がついた

「……………ど……………」

口から漏れた細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

「どつしろと言つんだ！もつてきの居場所もわからない！戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意思で立ち上がった篝を見て、鈴はふうつとため息をついた

「やっとやる気になったわね……………あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ・今ラウラが……」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はニヤリとした顔で迎える

そして、その会話を盗み聞きする影が二人。それに気付かない二人は会話を進める

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前のほうはどうなんだ。準備は出来ているのか？」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら……」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた

「で、あんたはどうするの?」

「私……私……私……」

ぎゅっつと拳を握り締める箒。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった

「戦う……戦って、勝つ!今度こそ、負けはしない!」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う

「じゃあ、作戦会議よ。今度は確実に落とすわ」

「ああ！」

とじじい、ラウラが気付く

「……………シンジはどっした？」

Side 一夏

びあ……………びああん……………。

ここは……………

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかぬ砂浜の上を一人歩いていた

足を進めるたび、さく、さく、と足元の白砂が澄んだ音を立てる

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。

それに心地よい涼風と、じりじり照りつける太陽

夏・・・・・・・・なのか？今は・・・・・・・・

ここがどこで、今がいつなのかわからない

俺はなぜか制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素
足のまま砂浜を歩いていた
手には、いつ脱いだのか、靴がある

「・・・・・・・・。。・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと、歌声が聞こえた

とてもきれいで、とても元気な、その歌声

俺は何だか無性に気になって、声の方へと足を進める

さくさく

さくさくと

足元の砂が軽快に鳴る

「ラ、ラ、ラララ」

少女はそこにいた

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る
そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩しいほどの白色

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った

ふむ……

俺はなぜだか声をかけようとは思わず、近くにあつた流木へと腰を下ろす

その木はずいぶん前に打ち上げられたのか、樹皮は剥げ落ち、色も真っ白になっていた

白いいびつなソファに座って、俺はぼーっと少女を見つめた

ざあざあと波の音が聞こえる

ときおり吹く風は心地よくて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた

Side シンジ

『目標はここよ、さっさと片あ付けなさいよね、F型装備なんだからさ。一応私達もそっちに行くから』

『……待ってて、碇君』

「わかった、ありがとう、アスカ、綾波」

『ふ、ふん……礼は終わってからでいいわよ』

『……私も……それでいいわ』

「うん、そろそろ接敵するからあとでね」

通信を切り、僕は『全領域兵器・マステマ』を展開、『銀の福音』に向かってN2ミサイルを放つ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

海上二〇〇メートル。そこで静止していた『シルバリオ・ゴスヘル銀の福音』は、まるで胎児のような格好でうずくまっている

膝を抱くように、丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む

・・・・・・・・？

不意に、福音が顔を上げる

次の瞬間、飛来したミサイルが頭部を直撃、大爆発を起こした

「よし・・・・・・・・攻撃続行！」

マステマのガトリングを構えて福音が反撃に出るより先に攻撃を行う

だが、その攻撃をかわしながら煙から福音が飛び出す

『敵機 A を確認。これより排除行動に移る』

福音が砲撃を開始し、シンジもガトリングを掃射する

福音は、巧みに攻撃をかわしながら砲撃を行う。シンジもかわしながら攻撃するも、フィールドが徐々に削られていき

「くっ……この砲撃……」

ついに、フィールドが破壊される

「っ……ならば！」

背中のビットを全て放出する

シンジはガトリングを掃射しながらビットが縦横無尽に飛び回り、ビームの雨を降らせる。

これにより、福音はじりじりと消耗していく

と、その時

『ビーツ！……！ビーツ！……！ビーツ！……！』

「なっ……！！？これは……！！」

使徒がシンジの前に現れた

シンメトリックなオブジェのような身体の第7使徒とエヴァ3号機に寄生していた姿と同じ第9使徒が姿を現す

シンジはビツトで福音、第7使徒、第9使徒に攻撃を仕掛ける

福音、第7使徒、第9使徒は同時に攻撃を仕掛ける。まさにかわす隙間もないほどの攻撃に焦るシンジ

「くうう……！！！」

かわし続けるも、第7使徒と福音の砲撃に囲まれる

「しまった……!!!!!!」

もうだめかと思った瞬間

「やらせないよ!」

オレンジのISがシンジの前に割り込み防御する

「シャ、シャルロット……」

「もう、シンジってば……独断専行だよ?」

ウインクしながら言い放つシャルロット

「福音は任せてくださいな!シンジさんたちは使徒を!」

「セシリア!」

「早く行きなさいよ、シンジ。文句は終わってからにしてあげるか
」
「う」

「鈴……」

僕の横をセシリアと鈴が駆け抜ける

「シンジ」

「あ……ラウラ……」

最後に黒いISを纏ったラウラが現れる。その表情は厳しい

「まったく、大人しいと思っただけなのかな。きかん坊じゃないか、ん？」

口調は同じだが、表情は変わらない

「……ごめん、ラウラ」

「言い訳は後で聞く。先にこいつらを片付けねばな」

ラウラとシャルロットが福音に向かっていく。僕はアスカと綾波の居るところに向かい

「……ボロボロじゃないのよ。無茶しちゃってね」

「碇君……」

「ごめん、二人とも」

「別にいいわよ。とりあえず、こいつらを殲滅するわよ」

「うん。二人は青い方を頼むよ。僕は……あの使徒をやる」

シンジは第9使徒を睨む

「了解、ちゃっちゃと片付けるわよ、エコヒイキ」

「……了解」

アスカと綾波は第7使徒に向かい突撃する

シンジも第9使徒に向かい飛翔する

同時に、第9使徒が両腕を伸ばし、攻撃してくる

それをかわし、ビットを向かわせ、ガトリングを掃射させながら同時にビットを攻撃に参加させる

ガトリングをかわす使徒。だがその先にはビットが待ち受けており、一斉にビームを発射、一斉攻撃をまともに食らい……

第9使徒は爆散し、その空に虹を描いた

「一回やった相手だけど……相変わらず厄介ね！」

「……来る！」

アスカとレイは第7使徒に挑んでいた

使徒の無数の触手攻撃をかわしながら、アスカは洋弓銃、レイはポジットロン・ライフルで攻撃するも、ATフィールドに阻まれる

「くっ……先に触手をどうにかするわよ！」

「了解」

触手をかわしながら、レイがプログ・ナイフでフィールドを切り裂き、アスカが矢を放つ

この連携で、使徒の顔が消し飛ぶ

「やったわ……」

「まだよ！エコヒイキ」

一旦崩れかけていた体がコアを内在させる本体が上に来れば、再び体を形成する

「はっ！」

アスカが矢を連射する

矢が当たることフィールドが発生し防御する

「はあっ！ふっ！どおりやあああああ！！！！！」

空中で錐揉み回転し、さらに月面宙返りし、防御されている一番上の矢にキックを放つ

矢に当たればフィールドで防御されるも

一番上の矢が下の矢を突き破りながら最後のフィールドにたどり着き……

ドスッ！……バシャアッ……ドゴオオオオン！！！！！！

ラウラたちは奇襲・戦術・奇策を用いて福音を追い込んだ、そして
第一撃で海面に落ち、撃墜した……かに見えたが

福音は『セカンド・シフト第二形態移行』を行い復活してきた

そして、叫んだラウラの声に反応したかのように福音はラウラに飛
びかかる

「なにっ!?!」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる

そして、第一に切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで
蝶が蛹から帰るかのようにエネルギーの翼が生えた

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃
を行う

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められてしまった

「よせ!逃げろ!こいつは……」

その言葉は最後まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれる
刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をずたずたにされてラウラは海へと落ちた

「ラウラ！よくもっ……………！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンコールを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた

ドンッ！！

しかし、その爆音はショットガンのもではなかった
胸部から、脚部から、背部から、装甲がまるで卵のようにひび割れ、小型のエネルギー弾が生えてくる
それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした

「な、何ですの！？この性能……………軍用とはいえ、あまりにも異常な……………」

再び高起動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。

イケニッション・ブースト
『瞬時加速』

それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発加速だった

「くっ!?!」

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう
そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた

「私の仲間を……よくも!」

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける
展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる

「うおおおおっ!?!?!」

互いに攻撃と回避を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく赤椿に、わずかに福音が押され始める

いける！これなら！

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし……

キュウウン……

「なっ！また、エネルギー切れだ！？……ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる
そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった

すまない……一夏……！

ざあ、ざあん……………。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた
その歌は、その踊りは、なぜだか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる

あれ……………？

ところが、ふと気がつくとき少女の歌は終わっていた
踊りも止めて、少女はじいっと空を見つめている

俺は不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう

ざあ、ざあ、と

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす

「どっかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこには少女の姿はなかった

……あれ？

きよるきよると左右を見るが、もう人影は見当たらない。歌も、聞こえない

ざあざあと、ざあざあと、波の音だけが

「うーん……」

俺は仕方なく木のソファに戻ろうと体を反転させる
すると……背中に声を投げかけられた

「力を欲しますか……？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中……膝下までを海に沈めた女性が立っていた

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった
大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている
その顔は目を覆おうガードに隠されて、下半分しか見えない

「力を欲しますか……？何のために……」

「ん？んー……難しいことを訊くなあ」

「ざあ、ざあんと

波だけが俺と女性の間にある

「……そうだな。友達を……いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけない
いだろ？単純な腕力だけじゃなくて、いろんなことさ」

俺は、イマイチ自分の中でもまとまっていけないことなのに、妙に饒
舌に喋っていた

話しながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつ
つ、言葉は続いていく

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない

暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う……仲間を」

「そう……」

女性は静かに答えて頷いた

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた

人懐っこい笑み。無邪気なそんな顔で、じいっと俺を見つめている

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑みかけられる

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、「ああ」とうなずいた

すると、いきなり変化が訪れた

「な、なんだ？」

……空が、世界が、眩いほどの輝きを放ちはじめ

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく

夢の終わり、なんて言葉が不意に浮かんだ

ああ、そういえば……

あの女性は、誰かに似ていた

白い……騎士の女性

S i d e 箒

「ぐっ、ぐっ………！」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる
福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと
進化した『シルバー・ベル銀の鐘』が赤椿の全身を包んでいた

これまでか………なさけない………

ぼつと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みが始まる
中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた

………会いたい

………一夏に、会いたい

………すぐに会いたい、今会いたい

………ああ、ああ、会いたい

「いち、か……………」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた

「一夏……………」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めて瞼を閉じる

イイイイインツ……………!!

『!?!?』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けたときに見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ばす福音の姿だった

な、何が起きて……………

戸惑う筈の耳に届いたのは、さっきからずっと願っていたやまない声だった

「俺の仲間には、誰一人としてやらせねえ！」

筈の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある

「あ……あ、あつ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ

わずかに潤んだ視界に見えるのは、『白式第二形態・雪羅』を纏った一夏だった

「一夏いち、一夏なのだな！？体は、傷はっ……………！」

慌てて声を詰まらせる筈の元へと飛んで、俺は答える

「おう。待たせたな」

「よかつ…………よかつ…………本当に……………」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐくぐしと目元を拭う筈に、俺は優しく頭を撫でてやる

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなごっ……………」

どうも強がりばかりが出てくる様子の筈らしい。俺は頭を撫でながら、ポニーテールではないその髪型がやっぱり気になった

「ちようどよかつたかもな。これ、やるよ」

「え・・・・・・・・・・？」

俺は持ってきたものを箒に渡す

「り、リボン・・・・・・・・・・？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ・・・・・・・・・・」

七月七日。今日が箒の誕生日
とはいえプレゼントに何を買っていいのか迷った俺は、シャルに買
い物を付き合ってもらったわけなんだが

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

「じゃあ、行ってくる。・・・・・・・・・・まだ、終わってないからな」

言うなり、俺はこちらに向かってきていた福音へと急加速、正面か
らぶつかった

「再戦と行くか！」

『雪片式型』を右手だけで構え、斬りかかる

それをひらりと仰け反ってかわした福音を、左手の新兵器『雪羅』で追った

第二形態へ移行したことで現れたこの装備は、状況に応じていくつかのタイプへと切り替えられるらしい。

俺のイメージに答えるように、その指先からはエネルギー刃のクローが出現する

「逃がさねえ!!!」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音を捉えていた

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃が始まった

「そう何度もくらつかよ!」

俺は避けようとせず、左手を構えて前に出す

……雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始

キンツ！という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから、光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく

そう、これはつまり、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド

当然エネルギー消耗は激しいが、完全の攻撃を無効化できる以上、圧倒的にこちらが有利になった

福音に実弾兵器はないのは、スペックカタログで確認済みだ

「うおおおおつ！！！」

強化され、大型四機のウイングスラスターが備わった白式・雪羅は、ダブル・イグニッション・ブースト二段階瞬時加速を可能にしている。複雑な動きをする福音も、最高速での回避が可能なわけではないのだから、これで十分に追いつける

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を自身へと巻きつけはじめる
それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった

……まずい、嫌な予感がする

それは、最悪なことに命中した

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。

それはつまり、ダメージが回復しきってない鈴たちにも攻撃が及ぶということだった

くっ！守りきれるか………！

俺はすぐさま仲間の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声により蹴飛ばされる

「何やってんのよ！あたし達は腐っても代表候補生よ？余計な心配してないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！」

「鈴………わかった！」

仲間を信じる。今の俺にはそれしかない。だったら、どこまでも信じきってやる。

俺は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出して、再度福音へと飛び込んだ

Side 篇

一夏が駆けつけてくれた……！！

それはもう、嬉しいを、飛び越えていた

そして、戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った

私は共に戦いたい。あの背中を守りたい！

強く、強く願った

そして、その願いに応えるように、赤椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す

「これは……?」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのがわかる

『けんらんぶどう絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……
完了

まだ、戦えるのだな？ならば……

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る

ならば、いくぞ！赤椿！

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮れの空を裂くように
駆けた

「ぜらあああつー!!」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断ち切る

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても一撃目を回避されてしまう。そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた

「くっ!!」

.....エネルギー残量二〇%。予測稼働時間、三分

くそっ!!このままじゃ.....

リミッター無しの軍用ISがどれほどのエネルギーを持っているのか、検討もつかない
対して自分の機体は稼働限界が近づいてきている。それは焦燥へと変わって、じわじわと俺の心を焼いていく

「一夏！」

「箒！？おまえ、ダメージは……………」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

箒の……………赤椿の手が、俺の白式へと触れる

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた

「な、なんだ……………？エネルギーが……………回復！？箒、これは……………」

「今は考えるな！行くぞ、一夏」

「お、おう！」

意識を集中させ、雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。
巨大な光の刃を、俺は両腕で支えて振るった

「うおおおっ!!」

福音は俺の横薙ぎを縦軸一回転して回避、こちらを再び視界に捉えると、同時に光の翼を受けてくる

………かかった!!!

「篤!!」

「まかせろ!!」

俺のほうに向けられた翼を、赤椿の二刀が並び一断の斬撃で断ち切る

「逃がすかあぁっ!!」

さらに脚部展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りが福音の本体に入った

予想外の攻撃に大きく体勢を崩した福音を、俺は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す

そして、最後の一突きを繰り出そうとする俺に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行ってきた

ここまできたら、もう引かねえ!!

全身にエネルギー弾を浴びながら、俺は福音の胴体へと零落白夜の刃をつきたてた

「おおおおっ!!!!」

エネルギー刃特有の手ごたえを感じながら、さらに俺は全ブースターを最大出力まで上げる

押されながらも、俺の首へと手を伸ばす福音。その指先が喉笛に食い込んだところで、銀色のISはやつと動きを停止した

「はあっ、はあっ、はあっ……!!」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと落ちていく

「しまっ……!?!」

「………ったく、ツメが甘いよ、ツメが」

ようやくダメージから回復したらしい鈴が、海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした

同じく、シャルとラウラも無傷とはいかないが無事のようにだ

「終わったな」

「ああ………。やっと、な」

俺は篝と肩を並べて、空を見た

アレほどまでの青さを誇った空はもうすでになく、夕闇の朱色に世界は優しく包まれていた

第二十一章 Ⅱ 雪羅（ドレッシィ・ホワイト）Ⅱ（後書き）

次回予告

ようやく銀の福音を倒した一夏

旅館に戻り作戦終了の報告に行く面々

だが、待っていたのは反省文と懲罰だった

夜の海で出会う一夏と篝

そして近づく二人の距離

シンジの出番はあるのか

次回 篝と一夏

果たして主人公の出番はあるのか

第二十二章 第二夏（前書き）

最近更新が遅くなってきましたが、頑張って更新させていきます

というわけで、今後ともよろしくです

第二十二章 第二夏

第二十二章 第二夏

「作戦完了………といたるところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「………はい」

戦士たちの帰還は、それはそれは冷たいものだった

腕組みで待っていた織斑先生に僕たちはきつく叱られて、イマイチ勝った感じがしない

今は大広間で全員正座。この状態からもう三十分は経った気がする。セシリアの顔が真っ青になってきた。そろそろ限界点突破しそう

「あ、あの、織斑先生。もうその辺で……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はおろおろとしているさつきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと大忙しである

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうかちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。……あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、碓君、織斑君！？」

僕はその言葉に慌てて頷いた。山田先生の言うことはたまに突拍子ないので困る

そして、女子は『脱いで』の辺りで皆、一様に体を隠していた。見ないってば……（汗）

「それじゃみなさんまずは水分補給をしてください。夏はその辺りも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

はいと返事をして、僕たちはそれぞれスポーツドリンクのパック

を受け取る。どうやら少しぬるめにしてある。「この心遣いに癒される

「いたっ・・・あ・・・口ん中切れてるよ・・・」

ぼやきながら、切れているところを舌で撫でる。ジンジンして痛い・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっと・・・なんですか？織斑先生」

じいっと睨んでいたの、気になって声をかけてみた

「・・・・・・・・ん、まあ・・・よくやったな。全員、よく帰ってきたな」

「え？・・・・・・・・あ・・・」

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられてしまったのでよく見えなかった

なんだかんだ言っただけで心配してくれていたのだ。僕は口には出さずに感謝した

「・・・・・・・・・・」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ん？なんだかみんながこっちを見てるような……？

「あの、碓君、織斑君？みんなの診察をしますから、ええと……」

「……………」

六人（綾波は黙ったままでいた）の声に押されて、僕たちは慌てて廊下に飛び出した

「あゝ、びっくりした」

「まったくだな。じゃ、俺はそこら辺ぶらついてくる」

そう言い残して一夏はこの場を去っていく

『福音事件』は一応の解決を見た……が、なぜ暴走したのか、事故か故意か……その辺りはまだわかっていない

でも……もし故意なら、一体誰が？

だがそれは今考えてもしようがないことだ。僕は忘れるように頭を横に振って、部屋に戻った

夕方

例によって、大宴会場でクラス全員が夕食を取っていた

隣はアスカと綾波。そしてアスカの隣がラウラ、綾波の隣が鈴と何だか妙に空気が重い

「ちょっと、アンタ席変わりなさいよ」

「いや」

「くっ……はつきり言うわね、おとなしくせよ」

鈴は大人しい外観とは裏腹にはつきりと意思表示する綾波にたじろいでいた

「ん〜 今日の刺身も美味しいわねえ」

「式波、今回は譲るが、次はこうはいかないからな」

「何度でもいらっしやい！まあ、次も私が勝つでしょうけど」

アスカとラウラは互いに火花を散らしていた

「やめなよ……二人とも」

「「アンタ（おまえ）は黙ってなさい（いろ）」」

ええ〜……怒られちゃったよ
しょうがないのでほっといてご飯を食べる。あ、このお新香美味しいな

「……碇君」

「何？あやな……むぐっ！」

綾波に呼ばれたので振り向くと、いきなり口に何かを突っ込まれた唐突過ぎて、びっくりしたけど・・・よく噛んでみると、マグロの刺身だった

「・・・美味しい？」

「へっ？あ・・・うん、お、おいしいよ」

「そう」

ほっとしたように微笑む綾波の笑顔はすごく眩しくて、少し赤くなっていた

「ちょっと、シンジ！あんた何やってんのよ！」

と、激昂するのは綾波の隣に居た鈴

「え！？何って・・・言われても・・・」

「あたしにも、食べさせなさいよ！」

「そんなあ」

助けを求めようとアスカのほうに顔を向けると……

「……………あーん」

「な、何やってんだよ……………」

「食べさせなさい、シンジ」

「ええ……………やだよ」

「ぬわんですってえ!?!」

「別にいいじゃないか、僕が食べさせなくても」

「あ、あんたねえ!?!」

バシーン!!!

僕とアスカに懐かしき衝撃が見舞われた

「こ、この攻撃は……………」

「騒がしいぞ、お前達」

「お、織斑先生……………」

後ろに織斑先生が仁王立ちしていた

「まったく……碇、これでは砂浜を走ってきてもらっしかないな」

「そ、そんなあ！」

「……仕方がない。説教だけで済ませてやるから後で部屋に
来い」

「はい……」

僕はぐったりと肩を落としながら箸を進めた。心なしか美味しく感じない

「ふ、ふん、いい気味だね。……だからさっさと食べさせてたら……」

アスカが何かぶつぶつ言っているけど、耳に入らない

はあ……びびり

「ふうっ……」

海から上がって、俺はとんとんと頭を叩く。右に左に首を傾けて耳の中の水を抜くと、俺は近くの岩場に腰を下ろした

さっきの夕食の時間を思い出す

「なんか……気まずかったな……」

篝の様子がおかしかったので問いかけたら微妙に変な受け答えではぐらかされてしまった。なんなんだろうか??

満月の今日は、真夜中であっても明るい。俺は穏やかな波の音を聞きながらぼんやりと空の月を見上げた

そういえば俺、夕方になんか夢を見た気がするんだが……
どんなんだっけ?

起きたころにははっきりと覚えていたような気もするのに、今は内容さえ怪しい

夢らしいと言えはそうなんだが、何だかとても大事なことだったように思えて、「もやもやとしたものが胸の中に溜まっていた

「い、一夏………?」

突然名前を呼ばれて、俺は振り向く

月明かりに照らされて姿が浮かんだのは、水着姿の箒だった

「箒………?そういえば、昨日海で見かけなかったけど………」

「あ、あんまり、見ないで欲しい………。お、落ち着かないから………」

「す、すまん」

慌てて、体の向きを元に戻す

数秒だったがはっきりと見えた箒の水着姿は鮮烈で、脳裏に焼きついている

白い水着……それも、箒にしては珍しいというか、絶対に着なさそうなビキニタイプ

縁のほうに黒いラインが入ったそれは、かなり肌の露出面積が広く………なんといか、その、セクシー………そう、セクシーだった

い、いかん、これはかなり気恥ずかしい……

ひどく落ち着かない気分をどうにかごまかそうとするが、あまりうまくはいかない

さらに一メートルほど間を開けて隣に座った筈が、気になってしまつて意識はますます乱れていった

「……………」

「……………」

「え、えーと……………だな」

「う、うん……………」

なぜかドキドキと高鳴ってしまう胸を極力意識しないようにしながら、俺は他愛もない話をしようと考える

それなのに、出てきた言葉は考えていたものとはかなり違っていた

「そ、その水着、似合ってるな……………うん、いいんじゃないかな
いか？」

「……………」

びくつと篝が身をすくませたのがわかる。ちらりと顔を盗み見ると、かーっと赤く染まっていた

「う、う、これは、その……い、勢いで買ってしまった……い、いざ着ようとする、はずかしくて……だな……」

初日の自由時間に見かけなかったのは、どうもそういうことらしいそれにしても、向こうもこっちも見て話すのは恥ずかしいのか、俺と篝は背中を向き合わせたような格好で会話を続けた
闇に浮かぶ月が、煌々と俺達を照らしている

「……なあ、篝」

「な、なん……です、か？」

「いや、その変な敬語はどうしてなんだ？普通に喋ろうぜ」

「う……」

とりあえず夕飯からずつと気になっていたことを聞いてみた
篝は暫く黙っていたが、言いづらそうにしながらもぽつぽつと話し始めた

「お、お前が……おしとやかな女が良いと言っからだろっ……」

……うぐ、しまった。それが……

「いや、まあ、なんだ。箒はいつも通りの方がいいと思うぞ。そんなに無理してあわせることないだろ、な？」

「う……む」

渋渋といった様子ではあったが、箒はごほんと咳払いをしておしとやかモードを解除した

「こ、これでいいか……？」

「おう、いつもの箒だな。そういえば、髪大丈夫だったか？ちよつと焼けただろ」

「あ、ああ。リボンが無くなっただけで、大事無い。そ、それに、リボンも……その、新しいのをもらったしな……」

「お、おう。改めて、誕生日おめでとうな」

「う、うむ……。あ、あ……ありが……とう……」

最後のほうはかなり小さな声になって聞こえなかったが、いいたいことはわかっている
それにしても……うん。やっぱり筈には、ポニーテールがよく似合う。

「そ、その……だな。お、お前こそ大丈夫なのか？その、怪我をしていただろう」

「ん？あー、なんか、治ってた」

「な、なに？」

「えーと、目が覚めたらIS起動して、気がついたら治ってたぞ」

「ば、馬鹿なことを言うな！そんなことがありえるわけ……」

そう言っただけは俺の肩を掴むと、ぐいっと背中を月光へ向ける

「消えている……。本当に、何も無いのか……？」

「ああ、うん。治った。えーと、ほら、アレじゃないか？ISの操縦者保護機能」

「あれは保護するだけだろう。傷が治るなど、聞いたことが無いぞ……」

おそろおそろの箒は俺の背中に触れ、そこに傷が無いことを指先で何
度も確かめる

そのたびに「おかしい、おかしい」とつぶやいていたのが、なんだ
かおかしかった

「まあ、治ったしいいじゃないか。な？」

「よ、よくない！私のせいで、お前が……一夏が怪我をした
というのに……」

「なんだよ、治らないほうがよかったのか？」

「そ、そうではない！」

言うてから、自分の大声にはっとする箒

「そうではない……そうではないのだが……。こんな
風に簡単に許されると、困るのだ……」

その声がひどくしょんぼりしていて、俺はどうしたもんかなあと
考える

どうも、俺が負傷したことに責任を感じているらしいのだが、それ
が傷が消えてしまったことによって特にお咎め無く許されるのもイ
ヤなようだ

なんというか・・・難しい奴だなあ
けどまあ、本人がすつきりしないようだし・・・

仕方ない。俺は箒に罰を与えることにした

「じゃあ箒、今から罰をやる」

「う、うむ・・・」な

俺は箒のほうに向き直って、その顔を直視する

ぎゅっと閉じた瞼が、覚悟を表していた

しょうがないなあ、こいつは

俺は、その額をびしりと指で弾く

「っ・・・！！？」

「ほい、終わり。これに懲りたら、自信過剰と独断専行は控えろよ」

「な、なに？」

困惑顔の箒が、二回瞬きしてから、真っ赤になって俺に詰め寄った

「ば、バカにしているのか!? あ、あんなデコピンぐらいで……」

「まあまあ、落ち着け。興奮するな」

「だ、黙れ！ 私は武士だ！ 誇りを穢されて黙っていられるなど……」

「いや、その……一回離れないか？ えーと、当たっているんだけど……」

胸が

「!!!!!!」

かなり密着していることに気付いた箒が、ばばっと俺から離れるそして、距離を置いてから、胸を抱くように腕を組んで、混じりっ気なし抗議100パーセントの眼差しを送ってくる。うわあ

「お、お前は……！ 人が真面目に話しているというのに、ふ、不埒だぞ！」

はい、そうですね。男に生まれてきてすみません

「……………その、なんだ……………い、意識するのか……………」
「？」

「はい？」

「だ、だからだな！」

がしっ！と腕を捕まえられて、そのまま……………んなっ！？む、胸の谷間に引っ張られてしまっ。

……………あの、篝さん……………？

「い、異性として意識するのか、聞いているのだ……………」

さっきまでの威勢のよさと違って変わって、ぼそぼそ声で言うてる篝。

その顔は耳まで真っ赤になっており、恥ずかしそうにしている

「う、ん……………」

勢いに押されたわけではないが、ついつい肯定してしまっ

けれど、近く遠くに聞こえる波の音、目の前にはセクシーな水着姿の幼馴染み、空から降り注ぐ月明かりとくれば雰囲気にくらりと来てしまっても不思議ではないと思う

それに……なんていうか、その………箒は、正直可愛
いと思う

「そ、そうか………そう、なのだな………」

租借するように何度も言葉を噛み砕いては、それを飲み込む箒
密着した状態で、相手の体温が伝わってくる

つい、自分の胸の鼓動が聞こえてしまわなかなんて心配してしま
うほど、俺と箒は近い距離にいた

「………」

ドキドキと、うるさいくらいに自分の心臓の音が響く

ふと、俺と箒の視線が合った

あ………

見とれて、しまった

その月灯りに照らされた顔が、あまりにもきれいで

ま、まずいよな………？うん、まずい………ぞ？

そんなことを考えながら、ますます胸の鼓動は高鳴って

「え……せ、セシリア？な、なんでこんなところに………
？」

「シャルロットさんこそ………！か、勝手に旅館を抜け出して、
怒られても知りませんわよ」

ドキイッ！！

い、い、今の声は、間違いない。シャルとセシリアだ

声の大きさからしてまだちょっと距離があるが、このままここに
いたらすぐに見つかってしまう

しかも、今は箒と二人きりなのだ。何を言われるかわかったもんじ
やない

「ほ、箒………向こうに行こう」

「え？きやっ………」

すぐ近くまでやってきていた声から逃げるように、俺は篝の手を引いて岬のほうへと向かう

大きな岩石の上を俺と篝は渡っていく

ふう………。少しここで隠れているか。ちよつとしてから旅館に戻れば大丈夫だろう

「い、一夏………。いきなり、だな……。その、人気の無い場所につれて……。わ、私とて、困る……。」

「うっ。」

篝がぼそぼそ言っていたので、そちらに顔を向ける。

「ん……。」

……え。

えええええっ!? ほ、篝さん!? 何で目を閉じて、やや唇を上向きに突き出すんですかね、出すんですかね!?

「……。」

静かに待っている筈の顔は、やっぱりきれいだった

．．．．．う、まずい．．．．．。まずい、まずい．．．．．。

やばい．．．．．これは、引き込まれる．．．．．

俺が肩に触れると、びくんと筈が一度震える

それから改めて身を預けてくる筈に、俺はゆっくり顔を近づけて．．．
．．．．．

じじっ

．．．．．ん？なんだ？

改めて顔を近づけて．．．．．

じっ

ああもう、さっきからなんだよ。何が額にぶつかってんだよ

そう思っで目を開ける。 開けなきゃよかった

待っていたのはフィン状の浮遊物体。その先端が四角いスリットに
なっている

「 ブルー・ティアーズ 」

その、ビット

それが俺の額に砲口を押し付けている

キュイイイ

「ぬああああっ!?!」

ズバシュツ!!

間一髪、Bレーザーが仰け反った俺の髪を焼ききる。そして振り返ると

「一夏……?何を、しているのかな……?」

「ふふっ、うふふふふっ」

ISを展開させて黒い笑みを浮かべるシャルとセシリアが立っていた。危険度は200パーセント

「ほ、篝っ!逃げるぞ!」

「えっ、あっ、きゃあっ!?!」

いきなり抱きかかえられて悲鳴を漏らす篝だが、ええい、構ってられない

俺はすぐさま脱兎へとジヨブチェンジ。シャルとセシリアから逃げ出す

ああ………何でこんなことに………

そんなことを思いながら逃げる俺に銃声が迫る。死ぬ！死ぬからあ
あああ！？

Side シンジ

「まったく……少しは自覚があるのか？お前は」

「………すみません」

一夏が筭と逢引しているころ、シンジは千冬に説教を受けていた。
始まってかれこれ一時間。どうやらお酒を飲んでいたらしく、途中
から愚痴になっていた

………まだかなあ……

僕は正座させられていたので、そろそろヤバイ感じがしてきたので
そう思い始めた

「聞いているのか！シンジ！」

「うえ！？は、はい！」

ん？今シンジって言った？

「まったく・・・お前はいつもそうだなあ、私はほったらかしで他の女といちゃつきおって・・・ひっく」

「べ、別にいちゃついてなんかいいですよ！？」

「どうだか・・・」

そう言いながらお酒（ビール）をぐびぐび煽る織斑先生。なんか、知り合いに似てきた気が・・・

「もう、そろそろやめたほうがいいですよ」

そういつて僕は織斑先生からビールをひったくる先生の周りには空の缶が五、六個転がっていた

「む・・・今度は嫌がらせか・・・とことんサディストだな・・・」

「ちよっ……何いってんですか！心配だからやってるんじゃないですか……」

「う……む……。そう……か……」

おとなしくなった先生を見ながらゴミを片していく

「では、今度デートに付き合ってもらおうとするか……シンジ持ちでな」

「僕持ちって！？……ってデートですか？生徒と教師はまずいんじゃない……」

「……」

じっと見てくる先生。その表情は構って貰えない子供のようで。……はぁ、まったく

「わかりましたよ」

「そ、そうか……！」

珍しくうれしそうにする先生を見て、自然と笑みがこぼれてしまう

「まあ、今回の作戦の報酬と思えばいい」

いきなり、そんな事を言い出す先生。さっきのうれしそうな表情から無表情な表情に戻っている。・・・忙しい人だなあ、一番喜んでいくせに

「違反したとはいえ、事件を収束させたんだ。私としては誉めてやりたいところだからな」

ぐりぐりと頭をなでてくる先生

まあ、誉められたので恥ずかしいけどおとなしく受けていた・・・
・が

「ちーちゃん、いる〜?」

天井がばかっとないて篠ノ之博士が現れた。僕たちはそろって見上げると

「えええええっ!?ちーちゃんが・・・ナデナデしてる!私にもしてえ!!!」

篠ノ之博士が織斑先生に飛び掛った。が、そのまま流れるように顔

を片手でつかんでそのまま床に叩きつける

うわ……さすがにやりすぎじゃ……

「うう、相変わらず愛情表現が激しいねえちーちゃん！」

「ばか者、愛情表現と言うのはな……」

「えっ……むぐっ!？」

おもむろに僕を抱き寄せた織斑先生が僕に唇を重ねてきた

「あゝ!!!なにやってんだよ!!」

「こづいつことをいうんだ」

「何やってるんですか!先生!？」

「キスだが?」

あまりにもしれつと言いつつ先生に僕も博士も何も言えなかった

「で、なにか用事だったんじゃないのか?」

「え？ああ、そろそろ行くからちーちゃんに会っていいことと思ってさ」

「そうか」

「そうそう、赤椿の稼働率は絢爛舞踏も含めて四十二パーセントだったよ」

「まあ、初陣ではそんなものだろう」

篠ノ之博士はディスプレイを呼び出す。そこには白式第二形態の戦闘映像が流れていた

「は〜。それにしても白式にはおどろくなあ。まさか操縦者の生態再生まで可能だなんて、まるで……」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

語り合うその姿は、昔からの旧友のように自然だった。それはまるで、前に見た葛城ミサトと赤木リツコのように。シンジはそう思った

「ところで、ちーちゃん、問題です。『白騎士』はどこにいったんでしょうか？」

「……『白式を』しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう

「？」

「……………え？」

「ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

「白式のコアってももとは別の機体のコアだったんですか！？」

「……………そういうことになるな」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した

そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやりとりしていたとするよね。一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』くれはくわんが。そうしたら、もしかしたら……………」

「同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は、答えない。シンジも余計なことは言わない

しかし、そんな反応はお構いなしに、束は続ける

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだ」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである

それは、束にとっても同じ

しかし、束は別にわからなくても問題はない

「……………。私も一つたとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいね」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、そのときだけ動かせるようにする。そうすると本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん？でも、それだと継続的に動かせないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ、飽きるからね」

「……で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わっていないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用気持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才もいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピユーターを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した、天才がな」

「まさか・・・今回の事件の原因も・・・？」

「それは違つだろう。まだ首謀者はわからんが、こいつはそんな面倒なことはしない」

「そう・・・ですか」

「心配性だな、そんなことをしてたら私が裁いているさ」

「そうだよ〜そして私はそんなことに、興味はないのだよ」

「ごめんなさい、博士」

「だいじょうぶさ〜。・・・ところで、ちーちゃん、今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

束は頷き、じゃあと行って部屋を後にした

束に同じ質問をしたらどう答えるのだろう？そう思ったシンジであった

翌朝。朝食を終えて、すぐにIS及び専用装備の撤収作業に当たる。そうこうして十時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別のバスに乗り込む。昼食は、帰り道のサービスエリアで取るらしい

「ん〜、もう帰るのかぁ・・・名残惜しいなあ」

「また、いつか来ればよからう」

「時間はたくさんあるんだからさ」

「・・・そうだね」

ラウラと鈴の言葉に頷く僕。一夏は・・・ぐったりしていた。大丈夫だろうか？

その後、一夏が美人にキスされて、怒った箒とセシリアとシャルロットにペットボトル×3を投げつけられていたが・・・とりあえず、助け舟は出せなかった

だって、3人が怖かったんだ……

こうして、シンジたちは学園への帰路についた

第二十二章 Ⅱ 第と一夏Ⅱ（後書き）

次回予告

臨海学校から帰ってきたシンジ

もうすぐ夏休み、しばらくは休める日々が続く

だが、その考えを警報が遮る

現れた第8使徒

そして・・・同時に現れたのは・・・？

次回 奇跡の価値は

シンジは奇跡を掴み取ることができるのか

第二十三章 〓 奇跡の価値は〓 (前書き)

え〜ど〜も〜おゆるです

前の回では普通にシ〜ジ出まくりでしたwww

今回、一夏はちょびっとしか出ませんよ〜

第二十三章 Ⅱ 奇跡の価値はⅡ

第二十三章 奇跡の価値は

IS学園一年寮 シンジの部屋

「まいったな・・・どんな服をつけていこうかな？」

シンジはこの後の千冬とのデートの服装を選んでいた
相手は『ブリュンヒルデ』。下手な格好をすれば笑われてしまう

「とりあえず・・・これと、これ。後はこれかな？」

シンジが選んだのは、黒のジャケットに濃い青のデニムのジーンズ。シャツは黒のYシャツ
ちなみに、この服は臨海学校から帰ってから、シンジの服が少ないことに気づいたラウラが一夏たちを集めて、シンジを連れていって選び、購入した（実際は買わせた）物である

「まあまあかな？」

シンジ自体の見た目はそこまで悪くないので、馬子にも衣装といった感じである。ただ、一夏に見られたら爆笑は必至である
それはすごくいやなので、誰にも見つからないように静かに、だが迅速に行動を開始する

505

襟元に『発信機』が付いていることにも気づかずに。

IS学園一年寮 ラウラの部屋

「目標が動き出したぞ」

「『あの服』を着ているって事は・・・少なくともただの用事じゃないわね」

「行きましょう。絶対阻止するわ」

「あつたり前よ！あのバカシンジ、あたしの断りも無く！」

ラウラ、鈴、レイ、アスカの台詞である

ここからは私、ラウラ・ボーデヴィツヒが語ろう。

現在、私たち四人は私の部屋で待機中。状況は目標である碓シンジが自室を出たところだ

私たちは既に外着であるために、さっそく追跡を開始した

「うわ、何あれ。辺りを気にしながら進んでるのを見ても怪しすぎるわ」

「うむ。それほど重要な接触なのだろう。動きが普段と違う」

「碓君・・・カッコいいわ」

「あなたは黙ってなさい」

約一名、妙なことを言っているが・・・まあ、ここはスルーしておこう

しばらくし、シンジが向かったのは、ご存知、駅前の『レゾナンス』。そこにあるカフェテリアの前に立っている。私たちは、近くの茂みに隠れている

「どうやら、あそこで待ち合わせのようだな」

「そうね。にしても・・・なんでカフェテリアの前？」

「あのバカシンジだしねえ・・・そういう知識なさそうよね」

「碓君・・・」

レイがふらふらとシンジのところに行きそうになったので、アスカと鈴が抑える。大丈夫なのか？

こちらがバタバタしているうちに、シンジに近づく人物が一人いた。

「静かにしろ！目標に接触する者が現れたぞ」

「だ、だれよ!？」

「あ・・・あれって・・・」

「・・・先生」

そう。レイの言うとおり、相手は織斑千冬教諭その人。服装は普段通り、サマースーツである

「くっ……やはりな。これで敵の戦力が把握できた」

「っ、尾けるの……?」

「ああ。だがこれは志願制だ。敵に捕まれば何をされるかわからんからな……」

といっても、少し説教されるだけなのだが

「行くに決まってるでしょ?」

「ええ……碇君は年上好きじゃないの」

「あ、あ……あたしも行くわよ!??」

鈴が若干震えているが、その気概は本物だろう

「よし、では……ん?」

再び、二人に視線を戻すと、なにやら見知らぬ女と話し込んでいた。誰だ?あの女は……

レゾナンス 某カフェテリア前

「ちょっと早かったかな？」

僕は待ち合わせの場所に着いたので、千冬さんが来るまで待つことにした。

「……格好、大丈夫かな？」

改めて、自分の格好を見る。うう……普通に学園の制服にしとけばよかったかな？
そんなことを考えてると

「すまない、少し遅くなった」

聞きなれた声が聞こえて、振り向くと、織斑先生がこっちに向かって歩いてきた

「大丈夫ですよ、僕も来たところですから」

「うむ、では今日はどこに行こうか？」

「定番なら、遊園地とかショッピングとかですよねえ」

「そうだな。だがショッピングは臨海学校前にしたたる？」

「ですよねえ……」

人々が行き交う場所で悩む二人。しかし、そこで思いがけない再会をする

「えっ！？シ、シンジ君……！？」

「え……？ミ、ミサトさん！？」

そう、本来いる筈が無い、ネルフの作戦部長の葛城ミサトがそこにいた。その横には赤木リツコ博士。シンジは突然の再会に驚いた

「え……ええ！？な、何でここに！？」

「ちょーっち、お昼をねえ　そういうシンジ君こそ・・・すみに置けないわね」

「そうね。なかなかやるじゃない、シンジ君」

「か、からかわないでくださいよー」

「シンジ・・・こちらの方は？」

耐え切れなくなった千冬さんが、声をかけてきた

「ああ、こちらは葛城ミサトさん。僕の上司に当たる人ですね。」

「葛城ミサトです。シンジ君がお世話になってます」

「織斑千冬です。いえいえ・・・とても助かってます」

ミサトさんと千冬さんが握手する

「んで、こっちが私の友人の・・・」

「赤木リツコです、よろしく」

「リツコさん」

リツコさんとも握手を済ませる

「せっかくだし、みんなでどこか行きませんか？」

「お、いいわねえ！さーって、それじゃ……………」

『ピーッ！ピーッ！ピーッ！』

「え？まさか……………」

「使徒か!？」

「ここにも使徒が来るの？」

「はい！じゃ僕は急ぐので……………」

「ええ、また後でね、シンジ君！」

新たな使徒の出現にシンジと千冬、ミサトとリツコはそれぞれ走り出す

「司令！」

「解っている」

この男『碓ゲンドウ』。NERV本部司令。シンジがいた世界からの転移後、某研究施設を設立。その手段は不明

「総員第一種戦闘配置。IS学園との連絡は？」

彼は冬月コウゾウ。NERV本部副指令。

「もう少しかかります！」

彼女は伊吹マヤ。NERV本部オペレーターで、技術開発部技術局所属。二尉

「急げ。敵は待つてはくれないからな」

「目標、現在宇宙空間を移動中」

彼は青葉シゲル。NERV本部オペレーターで、調査部情報局所属。

二尉

「目標の落下地点は？」

「ただ今解析中です、結果が出るのはもう少しかと」

彼は日向マコト。NERV本部オペレーターで、戦術作戦部作戦局所属。二尉

「そういえばシンジ君・・・目の色が赤くなかった？」

「そうね。イメチェンかしら？」

「まさか」

二人が話をしていると

「ISS学園との通信、繋がりました！」

マヤが通信可能になったことを伝える

「よし、回線をつなげ」

「了解！」

IS学園 モニター室

某研究施設との通信より少し前

「映像、出ます！」

そこには目のような模様が蠢く黒い球体が写っている

「ここから落下するとなると・・・かなりの被害だな」

「はい。下手をすればこの街が消えてしまう可能性もあります」

山田先生の言葉に室内がざわめき立つ。

今、専用機持ちは全員モニター室に集合している

「え？・・・織斑先生、碓ゲンドウという人物から通信が入ってますが・・・？」

「なんだと？……通信を開け」

「りよ、了解！」

山田先生が通信を開くと

見覚えのある、男が顔の前で腕を組んでいる

『初めまして。私は碓ゲンドウ。この研究施設の所長で、その碓シンジの父親だ』

「……父さん」

『久しぶりだな、シンジ』

「そう……だね」

『フツ……しゅつげ……』

スパーン！

小気味良い音と共に父さんの頭が机にぶつかる

『あなたねえ、いい加減にしないで！あ、ごめんなさい……私は碓ユイと申します』

その女性は恭しく頭を下げる……って、ええ！？

「か、かあ・・・さん!？」

『初めましてね、シンジ』

「あー、んんっ。そろそろ、使徒に対しての作戦を・・・」

『ああ、そうですね』

織斑先生と母さんが話し始めた

「ちょっと、バカシンジのお母さん、死んでるんじゃないの？」

「そ、そのはずんだけど・・・」

「・・・???」

僕、アスカ、綾波は首をかしげていた。って、綾波は首を傾げなくとも・・・

「私にそっくりなの・・・わからないわ」

「そっいえばそうだね」

『え、では作戦の説明をしますわね。今回は、碇シンジ君、綾波

レイさん、式波・アスカ・ラングレーさんで行います。落下する使徒を三人でATフィールドをつかい受け止めてこれを撃破してもらいます』

やっぱり、そうなるよね・・・

『この作戦は、使徒の侵攻速度を見ても、明日に・・・』

『目標、侵攻速度が上昇！このまま行けば一時間後にIS学園に落下します！』

『聞いてのとおりですが、一時間後にこのIS学園に使徒が迫っています。運良く、三人が学園にいたので、すぐに準備を始めてください』

「了解しました。よし、碓、綾波、式波は学園の敷地内で待機。他のISは一年の専用機持ちは三人のサポート。他は自室待機。以上！」

先生の拍手で、一斉に皆が動き出した

「・・・死ぬなよ、シンジ」

「大丈夫だよ、一夏」

「アスカ、まだ決着はついていないからな。こんなところでしたばるなよ？」

「当り然つ。アンタを打ち負かすまでは死ねるもんですか」

「あんたもよ、レイ」

「・・・ありがと、鈴」

『シンジ・・・聞こえる？』

「この声は・・・母さん？」

「うん、聞こえるよ」

『・・・生きて帰ってきなさい・・・お願い』

・・・母さん・・・

「うん、わかった」

『シンジ・・・私だ』

「父さん・・・」

『・・・帰って来い・・・死ぬなよ』

「・・・わかったよ、父さん」

ありがとう、父さん

『そろそろ、来るわよ、みんないい？』

「」「了解！」「」

この距離なら見える。今は虹色の球体の姿、そして・・・その球体を展開させる

『では、作戦開始！』

「」「ATフィールド、全開！」「」

ガキイイイン！！！！

三人のATフィールドで使徒を受け止める

「うお・・・すげえ衝撃だ！」

「シンジいい！」

「下がれ！鈴！」

使徒の落下の衝撃は物凄く、一夏たちは吹き飛ばされる

「ちょ・・・誰が攻撃すんの！？これ！」

「綾波とアスカは攻撃に回って！」

「で、でも・・・シンジ！」

「はあああああつ！！！！！」

シンジは初号機ではなく、自身のATフィールドを展開した。何とか使徒をつけとめるものの、ISが軋んでいた。が、その時使徒のちょうど真ん中からヒト型の何かが現れ、手を伸ばす。それはフィールドを突き抜けて、シンジの手を掴み

ブシューウウウ！！！！

シンジの両手を突き刺した

「ぐううあああああっつ！……！」

シンジの悲鳴がこだまする

「シンジいい……！」

「はやく……！」

「解ってるわよ！あたしに命令しないで！どつりゃあああああっ！
……！」

アスカがプログ・ナイフを二本取り出す

「ぜえい！でりゃ！はああっ……！」

そして、一本で使徒のフィールドを切り裂き、もう一本でコアを突
く！

ガッ！

「はずした!?!」

突くと同時にコアが激しく動き始めた

「こっちでも同じなのはちょっとムカつくわね」

「アスカ、早く!」

「解ってるけど……相変わらずちょこまかと!」

アスカが手をこまねいていると、横からレイがフィールドに手を突っ込んでコアをつかんだ

「うううううっ!?!?!」

「レイ!?!」

「は……や、く!」

「アスカっ!?!」

「わかってるっちゅーのおおお!?!?!?!」

アスカがナイフをコアに二本突き立てる

「もっついっちょおおう!!!!!!」

ナイフの柄に思い切りパンチをかます。ナイフが深く突き刺さり

バキッ

コアが破壊された

ドゴオオオオン!!!!!!!!

『よっしやああっ!!!!!!』

ミサトの勝利宣言にIS学園が喜びの声に沸いた

「「「はぁ・・・はぁ・・・」」」

三人はその場の倒れこんでいた

「シンジ!!!」

そのシンジの目に映ったのは・・・自分の両親。へりに乗って駆けつけてくれたのだ

「父さん・・・母さん・・・」

シンジはその姿を見て、意識を闇に沈めた

第二十三章 〓 奇跡の価値は〓 (後書き)

え

ついに生まれたNERV軍団(?)

なぜか加持は出ず・・・

これからはIS学園に度々出没しますよ

第二十四章 Ⅱ 夏休み・第一幕Ⅱ（前書き）

え、NERVメンバーの登場について一言、ご指摘をいただきました。この人たちの登場は前々から決まっておりました。無理矢理感を感じたのはおそらく私の文才の無さ故です。

なぜ、ミサトたちがこの世界にいるのか、そしてユイがいるのか。この章で明らかになります。まあ、少しグダグダかもしれませんが・

もし、またご意見いただければ幸いです

それと、300000PVと300000ユニーク達成です！

皆様の閲覧が、感想が更新に繋がります（え）

これからもよろしくですノン

第二十四章 Ⅱ 夏休み・第一幕Ⅱ

第二十四章 夏休み・第一幕

某研究施設（名前はまだ無い）

この日、シンジ、アスカ、レイはミサトたちに会いに来ていた
場所は、車を走らせて一時間の場所にある山の麓

「いらっしゃーい アスカとレイも元気そうで何よりねー！」

「ミサトもね」

「お久しぶりです、ミサトさん」

「……え、ええ、そうね、レイ。お久しぶり」

少し、うろたえながらアスカ、レイと握手する

レイに名前と呼ばれたの……初めてだわ

そんなことを思いながら三人を連れて案内するミサト

「シンジ君、久しぶり！元気してた？」

「はい！伊吹さんもお元気そうで」

「アスカもまだくたばってなくてなによりだ」

「……青葉さんってそんなに毒を吐く人だったかしら？」

「レイちゃんも無事でよかったよ」

「……そつちも……無事で何より」

途中でNERVオペレーター三人衆（笑）に出会い、各々、再会の喜びを分かち合う

「ここが司令室・・・じゃなくて所長室よ」

ミサトも前の癖がなかなか、抜けないらしい。まあ、しょうがないことなのだが

プシュツと空気が抜けるような音がし、扉が横にスライドして開く

そこには、相変わらずのポーズで腰掛ける、ゲンドウ

その傍らに立つ、ユイ

ユイの隣に立つ、リツコ

がいた。シンジたちは部屋に入っていく、ゲンドウから二メートル半ぐらいのところまで止まる

ミサトは三人のすぐ後ろにいる

「こうして、直に会うのも久しぶりだな・・・」

「そっだね・・・父さん」

互いに相手を見る。その思いは幾許の物があるのだろうか

そして・・・その均衡を破ったのは・・・なぜかアスカだった

「ちょ、ちょっと待ってよ、一番聞きたいのはなんでみんながここ

にいるのかってことよ!」

「そ、そうだよ!何で父さんやミサトさんがいるのさ!それに・・・
母さんまで」

「・・・納得のいく説明をお願いします」

それは三人とも疑問に思っていたことだった
この世界にNERVなんて組織はないのだから

「それについては私が説明します」

そう言うて前に出たのは、赤木博士

「説明といえるかは解らないけど・・・私たちの世界ではシンジ君
がレイを助けたことにより、サードインパクトが発動したの。まあ、
その前に何か槍が降って来たけど・・・その情報は今はいいわね。
で、そのときの膨大なエネルギーが何らかの作用を引き起こしてこ
の世界に飛ばされた・・・と考えるのが一番可能性が高いわ。ちな
みに、飛ばされたときは、ドイツの研究施設が何者かによって潰さ
れたニュースがやってたわね」

ちょうど、ラウラの暴走事件前後である

「……つまり、シンジのせいなわけ？」

「ええっ!？」

うるたえるシンジ。こうなったのが自分のせいと言われれば、無理も無い話である

「一概にそうとは言えないわね……まずシンジ君と私たちが同じ時間軸の人間かと聞かれたら、解らないのよ」

「どっいう……ことですか？」

レイが首をかしげる

「つまり、例えばの話……シンジ君の世界と私たちの世界がサードインパクト起こるまでのプロセスをまったく同じに進んでいたとしたら……?」

「……出会ったときに同じ時間軸の人間と錯覚する……?」

「そういうことね」

「……そんな」

まあ、リツコの『何か槍が降ってきた』と言っていたので、同じ時

間軸の人間なのは確定しているのだが、シンジは見てないのでわからずじまいなのだ

「じゃ、じゃあ、母さんは何で……?」

そして一番の謎、ユイの存在に触れるシンジ

「何て言ったらいいのかしら……こう、目の前がぱあっと光ったと思ったら、次に見えた光景がここだったのよ」

「……つまり……何もわからない……?」

「そつなるわねえ」

ユイ本人でさえ首をかしげる始末であるが、ここでリツコが口を挟んだ

「これは、私の仮説になりますが……ユイさんは、やはり違う時間軸の人間ではないでしょうか?」

「……それも、サードインパクトの作用か? 赤木博士」

「おそらくは。ただ、これは仮説ですので、様々な原因、作用、過程を踏まえたうえでが一番説明が付きやすいものですので、絶対とは言いません」

「そうか」

父さん……

心なしか残念そうだ……

「そう落ち込まないで、あなた……ここにいる限りはこの研究所と夫の面倒は私が見ますから」

「……すまん、ユイ」

父さん……少し、嬉しそうだな。……って

「僕の面倒は？」

「あら、シンジなら一人でも大丈夫よ。この人とは出来が違うんですから」

ちよっ……軽く父さんが凹んでるよ!?

「あ、そうそう、シンジ君と言えば……その目、イメチェン？」

ビシッと僕の目を指差すミサトさん

「そうねえ……シンジ君、イメチェンとかのイメージがまったく無いんだけど……?」

「あ、これは……」

僕はこの目になった経緯と使徒化について話した

「シ、シンジが……使徒……」

父さんが机に突っ伏した。と、父さん……?

「あらあら……まあ、でもシンジはシンジだし……問題は無いですわよね?」

「ええ、そうですね。シンジ君が我々に歯向かわなければ……ですが」

「リ、リッコ……怖いって」

リッコさんが僕をじっと睨んでくる。怖い……(汗)

「だ、大丈夫ですよ……歯向かうだなんて」

「そぞ。なら、だいじょうぶね」

まるで『冗談よ』と言いたげな言葉だが・・・目つきは本気だった。
・・・逆らわないようにしようと

「ところでシンジ。いま使徒は何体来た？」

いつの間にか復活していた父さん。凄い！

「え、えつと・・・1、2・・・七体だよ」

「と言うことは、我々が見た使徒で言えば残り一体か」

「はい。それに、今後も未確認の使徒が現れないとも限りません」

「うむ・・・」

なにやら、大事な話を始めちゃったな・・・

「父さん、そろそろ僕たちは帰るよ」

「そつか」

「・・・これからどうするの?」

「とりあえずこの世界に普及している『IS』の研究・開発を行うつもりだ。『IS技術開発研究所・NERV』としてな」

「そっか・・・頑張ってね」

「ああ・・・シンジもな」

「うん。・・・母さんも」

「ええ」

「ま、また・・・会いに来ても・・・いいか、な?」

「勿論、いつでも来なさい、シンジ」

「ありがとう、母さん」

こうして僕たちはIS学園に帰った

おまけ

車中

「そついえば、加持さん……いなかったね？」

「そついえばそつね……もう死んじやったんじゃないの？」

「……アスカ……そついうこと言っちゃダメ」

「わ、わかってるわよ……」

「いーいー」

「だあああ！ーかげんにしなさいよ！レイ！」

神奈川県南西部 芦ノ湖付近（前の世界で第3新東京市があった付近）

パチパチ……

薪が燃える音が響く

「……は……なんだよ……葛城……シンジ君……は
あ」

加持リョウジは人知れずやってきて、人知れず、生きていた
彼がNERVに見つけられるのは……もう少し先の話

第二十四章 Ⅱ 夏休み・第一幕Ⅱ（後書き）

次回予告

IS学園で平和に暮らすシンジ

突如、一夏から手渡されるチケット

戸惑うシンジ

チケット持つもう一人の人物

二人が邂逅するとき、何かが起こる！

前回の次回予告を書き忘れた作者はシンジによって殲滅させられる
（ええ

次回 夏休み・第二幕

この話は続くのだろうか？（ヲイ

第二十五章 Ⅱ 夏休み・第二幕Ⅱ（前書き）

え〜・・・今回もご指摘いただきました

奇跡の価値はの回で『破』の台詞を乱用に疑問とのことですが・・・

これに対しての指摘がお一人だけではなかなか判断がつかず・・・
読者様に判断を委ねたいと思います

この前書きを見た方で時間のある方は『奇跡の価値は』の戦闘シーンを
見直していただき、その上で変えたほうがいいのか、そのままでも
良いかを感想でいただきたいと思えます。

作者のわがままですが・・・出来れば多くのご意見をお待ちしています

第二十五章 夏休み・第二幕

第二十五章 夏休み・第二幕

某遊園地 入園ゲート前

「……おっそいわね、一夏の奴」

今回は私、ファン・リンイン鳳 鈴音が語り手になるわ

今、私はIS学園から程近い遊園地にいるの
その理由は……

三日前

「おっ・・・鈴、丁度良かった」

「一夏？」

私が歩いていると、後ろから一夏に声をかけられた
珍しく、一人らしく・・・なんか、こっ・・・『なにか』から開放
されて楽しそうだった

「なに？一夏」

「あのさ、ちょうど近くの遊園地のペアチケットが手に入ったんだ
けど、いくか？」

「ふん、どうしようかなあ」

正直、今は一夏に恋愛感情は無い。今は親友として付き合っている
のよね

どうせ行くなら、シンジと行きたい。でも、親友の頼みを無碍に断
るのも気が引ける・・・
どうしようかな・・・？

「・・・よし！それなら近くの喫茶店でパフェを奢ってやるっ、」

番高いやつな」

ピクッ

パフェかぁ・・・しかも一番高いやつ・・・か・・・
あそのパフェはこのあたりでは評判が高く、人気ナンバーワンな
のだ

「しょ、しょうがないわね・・・付き合っただけあげるわ」

「よし！じゃ、十時に入園ゲート前な」

「オツケー」

ま、そんなこんなでここにいるの

け、決してパフェにま、負けたんじゃないからねっ！これも親友の
務めなんだから！

まあ、それはいいとして・・・

「アイツ、ほんとに遅いわね。後でふんじばってやるつかしら!？」

「ゴメン、遅くなっちゃった!」

やっと来たわね・・・微妙に口調をシンジっぽくしてるけど、そんなに許されると思ってんのかしら？
たまに、一夏は遅れると口調をシンジっぽくするの。それで毎回アスカやレイに怒られてるんだけど
ここはガツンと懲らしめてやんなきゃね

「ちょっと！あまりにも遅いじゃ・・・ない・・・の？」

「ゴメン・・・鈴、ちょっと手間取っちゃって」

「シ、シンジ!？」

そう、目の前にいたのは一夏じゃなくてシンジ。私の想い人
肩で息をしながら顔の前で手を合わせて謝っている
が、私はそんなことはもうどうでもよく

「な、なんで・・・？一夏じゃなくてシンジが来るの？」

「ああ、それはね・・・」

二日前

IS学園 一年寮 シンジの部屋

「ノックして、もしもし」

コンコン

「シンジいるか？」

「うん、びびぞ」

ガチャリ

「シンジ、ちょっと相談なんだが・・・」

シンジの隣に座る一夏は珍しく真剣な表情、シンジも一夏の方を向いて話を聞く

「鈴を遊園地に誘ったんだが・・・行けなくなってな、代わりに行ってほしいんだ」

「なんだ・・・何かやらかしたのかと思ったよ」

ふう・・・と安堵のため息をつくシンジ

「はは、で……行ってくれるか？」

「そうだね、僕は良いよ」

「そうか！サンキューな！」

「じゃ、鈴に連絡しとかないと……」

携帯を取るシンジの手を一夏が掴み、止める

「鈴には俺から連絡しとくから」

「そう……？わかったよ」

現在

「……いつことなんだ。それにしても一夏……連絡し忘れたのかな？」

い、一夏が来れなくなった？だ、だからって……なんでシンジなのよ……！……！

今日の鈴の格好は赤のTシャツにデニムのホットパンツ、その上に白のパーカーといたいわゆる、『友達用ファッション』なのだ

くっ・・・シンジが来るってわかってたら『恋人用ファッション』で来たのにー!!

『恋人用ファッション』の全容は不明である

「ここで喋ってても時間の無駄だから・・・いこっか？」

「へ！？あ・・・そ、そうね！いきましょー！」

二人は遊園地に向かって歩いていった

それを見つめる二つの影に気づかず

第二十五章 Ⅱ 夏休み・第二幕Ⅱ（後書き）

次回予告

遊園地で楽しい時間を過ごす鈴とシンジ

それを見つめる二つの影

それは誰か？

そして一夏の真意は！？

次回 夏休み・第三幕

二つの嫉妬が爆発するとき何かが起こる（ナワケナイ

第二十六章 Ⅱ 夏休み・第三幕Ⅱ

某遊園地 正面ゲート近くの茂み

「むむ……シンジめ、嫁のくせに私をほったらかしていくとは…

」

「……………ラウラ」

「なにか？」

「目標の索敵は怠るなよ」

「了解です、教官」

まったく……私が真剣に考えているというのに……シンジめ……
デートとはな

朝

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私、織斑千冬は考えていた

先日の『シルバリオ・ゴスベル銀の鐘』の暴走事件

あの時は否定はしたが、恐らくはアイツの・・・篠ノ之束の仕業だろう

そして・・・クラス対抗戦の乱入事件も・・・

シンジがそれを知れば、悲しむだろう・・・幕の立場を考えて

「まったく・・・・・・・・アイツも面倒くさい事をする」

551

ため息をつきながら歩いていると、目の前をシンジが歩いていく
Yシャツにカジュアルスーツにジーパンと言った外行きの格好だった
そして、その後ろを、ラウラが尾行している・・・アイツは・・・

「ラウラ」

「誰だ！？・・・・・・・・織斑先生でしたか」

「何をしている？」

「・・・・・・・・シンジが一夏の代わりに遊園地に行くそうで・・・」

「あまり・・・プライベートを詮索するなよ？」

「噂では・・・鳳 鈴音とデートとか」

ピクッ

デートか・・・もし事実なら・・・許せんな

「ラウラ、私も同行しよう」

「きよ、教官自ら！？・・・あ・・・」

「今日だけは教官でかまわん・・・追跡を続行するぞ」

「了解です、教官！」

・・・と、ここまで来たのだが

「まさか、本当にデートとはな・・・」

何故か、少し寂しい気持ちになった・・・

「教官・・・目標が侵入しますが？」

「・・・追跡する・・・チケットは？」

「ここに！」

ラウラからチケットをもらい

「いくぞ！」

「了解！」

私たちは、戦場に向かった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうかした？シンジ」

「え？ああ、なんでもないよ」

どうも……誰かにつけられてる気がするんだけど……気のせいかな？

気のせいではないのだが

「シンジく、あれ乗ろうよ！」

鈴が指差すのは、ジェットコースター
何でも、最高時速は150km/hを超えるとか……

「え……しょうがないなあ」

ISの戦闘速度はそれ以上。だからこそシンジも軽い気持ちで乗っただけ

……後で後悔するとも知らずに

10分後

「あ……おもしろかったあ」

「……はあ」

「だ、大丈夫？シンジ」

「う、うん・・・なんとかね」

ISでも大丈夫な訳は絶対防御にPICがあるから
それがないジェットコースターはシンジに落ちるかもしれない恐怖
を思い出させた

「やっぱり、ISとは違うんだね」

「そりゃそうよ」

「で、次はどこに行く？」

「そうねえ・・・」

こうしてシンジと鈴は今日一日、めいいっぱい楽しんだ。
そして、今は巨大観覧車の中・・・二人つきりだった

「ねえ」

「何・・・？鈴」

「綺麗ね、外」

「そうだね」

鈴は「鈴のほう綺麗だよ」と言って欲しかったのだが、とても言えるわけがなく
もじもじと人差し指を絡ませながら俯いていた

「あーあの、シン」

と、言おうとした瞬間

パキユン！

鈴の真横を銃弾が飛んでいった
慌てて見ると、下のゴンドラにラウラと千冬がいた。その目付きは
今にも食いつかんばかりだった

「……………嘘でしょ？」

「あは…はは…は……………」

シンジと鈴は結局、結構な緊張感の中で二人っきりの時間を過ごした

「なんであんたがここにいんのよ！？ラウラ！」

「シンジのいるところ、私有りだ」

「わっけわかんない…」

鈴がラウラに文句を言っている横で、千冬はシンジの頭を撫でていた

「あの…先生？」

「今は千冬でいい」

「…千冬さん、そろそろ止めてもらえると嬉しいんですけど…」

「ならん、これは罰ゲームだ。おとなしく受ける」

「そんな」

「教官、私も罰を与えてよろしいでしょうか？」

「……ダメだ」

そう言っつて、千冬はシンジを抱きかかえて走り去る

それを見た鈴とラウラは大急ぎで追いかけたのであった

おまけ

「門限を過ぎたな？ 鳳、ボーデヴィツヒ」

「す、すみません……」

二人は門限を破ってお仕置きを受けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4699r/>

IS インフィニット・ストラトス 新劇場版～シンジ編～

2011年6月21日16時38分発行